●国際連合大学 2012-2013 年国際教育交流事業●

# 韓国政府日本教職員招へいプログラム

# 実施報告書

ソウル市・忠清北道　清州市・江原道　春川市　原州市・仁川広域市

2013 年 8 月 22 日(木) ― 8 月 29 日(木)


はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
1. 実施概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
2. 教育機関訪問・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
3. 学校訪問・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
4. スタディツアー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
5. 成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
6. 今後の活動予定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66



国　際　連　合　大　学（UNU）
公益財団法人ユネスコ･アジア文化センター（ACCU）

# はじめに

国際連合大学（United Nations University）は、持続可能な人類の安全保障、気候変動、開発、平和構築など、国連とその加盟国が直面している、喫緊の地球規模の諸問題の解決への取り組みに、研究、教育、能力開発、知識の普及を通じて寄与することを目的とする国連機関です。

国際連合大学は、2002 年に主にアジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的とし、日本政府からの拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を開始しました。2000 年に設立された「ユネスコ青年交流信託基金」で実施されていた「韓国教職員招へいプログラム」は、同年より本事業のもとで開催されることとなり、同大学からの委託を受けてユネスコ・アジア文化センター（ACCU）が実施を担当し、今年まで 13 回にわたり、1,550 名の韓国の教職員を日本に招へいしてきました。

2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年 10 名程度の日本教職員を韓国へ派遣してきました。これら交流事業の成果が韓国政府に高く評価され、2005 年からは韓国政府と韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして、参加人数を 20 名に倍増、さらに、2008 年には 54 名に増員し、日韓教職員相互交流の更なる発展を目指しています。

2013 年 8 月 22 日から 8 月 29 日に実施された「韓国政府日本教職員招へいプログラム」では、2013 年 1 月に韓国の教職員の受け入れにご協力いただいた自治体や学校の教職員、及び 2014 年 1 月に受け入れていただく自治体や学校の教職員等が参加しソウル市、忠清北道（チュンチョンブクド）清州（チョンジュ）市・江原道（カンウォンド）春川（チュンチョン）市・原

州（ウォンジュ）市、仁川（インチョン）市での学校および教育文化施設等の訪問を通して、韓国における教育の現状と課題、訪問都市の教育の特徴、及び両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、韓国の教職員、児童生徒との交流を図ることができました。また韓国ユネスコ国内委員会による、UNESCO 韓日教師ソウル探訪に参加し、両国の教員が個人レベルでの友情を育むことができました。

このたびの訪問が、韓国の教育や文化に対する参加教員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日韓の教員間、学校間の交流のいっそうの発展に役立つよう願ってやみません。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、韓国ユネスコ国内委員会、文部科学省、及び忠清北道教育庁、江原道教育庁、訪問先の学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2014 年 3 月
国際連合大学
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

# 1．実施概要

韓国政府日本教職員招へいプログラムは、2000年度から実施されている韓国教職員招へいプログラムと対応するプログラムで、2003年から日本の教職員を韓国へ派遣してきた。これらの交流事業の成果が韓国政府に評価され、2005年からは参加人数を倍増し、韓国政府と韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして実施されることとなった。2007年には、文龍鱗（ムン・ヨンリン）元韓国教育部長官からの招請により、中曽根弘文元文部大臣を団長として日本教職員26名が韓国を訪問した。2012年までにのべ369人の教職員を韓国に派遣し、両国の教職員の交流を深め、日韓両国間の相互理解と促進に貢献してきた。

今回の韓国政府日本教職員招へいプログラムでは、日本の教職員等50人が2013年8月22日から8月29日の8日間にわたり韓国を訪問した。訪問団の構成は、参加者として、1）2013年1月に国際教育交流事業のもと、日本を訪問した韓国教職員を受け入れた教育委員会より推薦された教職員、2）同年訪問した東京近郊の学校の教職員、3）2014年1月に韓国教職員の受け入れにご協力いただく教育委員会より推薦された教職員、4）公募により選抜された教職員の計44名および、国際連合大学、文部科学省、国立大学法人岡山大学とユネスコ・アジア文化センターの同行者を含めた50名である。訪問団の団長は、今年ASPUnivNetの事務局である、岡山大学の阿部宏史副学長であった。

7月26日、東京の国際連合大学にて、訪問にあたってのオリエンテーションが実施された。国際連合大学の秋葉正嗣大学院事務局長、文部科学省の加藤重治国際統括官、駐日本国大韓民国大使館の金甫燁参事官、ユネスコ・アジア文化センターの老川祥一理事の挨拶ののち、文部科学省生涯学習政策局参事官付外国調査係の松本麻人氏より「韓国の教育事情について」と題した講義があり、現状や課題について具体的な説明を受けた。また、前年度参加者から前年度の体験談、アドバイスおよびその後の交流についての発表が行われ、参加者全員が本プログラムおよび今後の教育交流への目的意識を高めることができた。発表にご協力いただいたのは、2012年度参加の横浜市立永田台小学校の川上麻耶教諭、多摩市立東愛宕中学校の田中秀周主幹教諭である。その後、プログラム中の役割分担、訪問先からのリクエストに対する準備、日本文化紹介について参加者同士で打ち合わせを行った。

訪問団一行は8月22日に成田国際空港から出発し、同日昼頃に仁川国際空港に到着した。韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）から出迎えを受け、宿泊先のソウルロイヤルホテルで、KNCUによる今回の訪問に関するオリエンテーション、開会式が実施された。夕方からの歓迎交流会では、訪問団と韓国教職員が交流を深めた。歓迎交流会には、2013年1月の日本招へいプログラムの参加教職員が参加しており、再会を喜び、更に親交を深めている場面も見られた。

23日、Aグループは終日ユネスコスクールであるソウル大学校師範大学附属女子中学校を訪問し、Bグループは、終日ユネスコスクールである保聖女子中学校を訪問した。学校訪問では、ユネスコスクール活動の紹介をする場面もあった。

24日は朝9時からKNCUより韓国のユネスコ活動とASPnetについての説明があった。韓国教育開発院の尹鍾赫（ユン・ジョンヒョク）グローバル教育研究本部長から「韓国教育の最新改革動向」について講義があり、日本教職員は韓国の教育事情や日本の教育事情との差異について理解を深めた。

その後、初の取組みとなる「UNESCO 韓日教師ソウル探訪」が実施された。日本の教員5名と、韓国の教員1，2名が1つのグループになり、ソウルの世界遺産やESD関連施設を視察するものである。各グループで自己紹介、訪問先決めをしたあと、グループに分かれてソウル市内へと出発した。世界遺産である昌徳宮（チャンドックン）や伝統家屋が残る北村（プッチョン）などを訪問し、日韓の教員が密度の濃い交流を行うことができた。韓国側の参加教員には、2013年1月の日本への招へいプログラムに参加した韓国教職員も参加し、日本教職員と

再会を喜ぶ場面も見られた。

25 日から 27 日までの 3 日間はA、B 二つのグループに分かれ、A グループは忠清北道（チュンチョンブクド）清州（チョンジュ）市を、B グループは江原道（カンウォンド）春川（チュンチョン）市、原州（ウォンジュ）市、仁川（インチョン）市を訪問し、各都市で教育機関・学校訪問や文化施設見学を行った。

A グループは 25 日午前にソウルを出発し、清州へ向かった。清州市は忠清北道の道庁所在地で高麗時代最も古い金属活字本が印刷された場所である。一行はまず清南臺及び大清ダムを訪問した。昼食後、文義文化財團地を訪問した。ホテル到着後、同日夕方、ホームビジットがあり、ホストファミリーと交流の時間を持った。26 日、A グループはユネスコスクールの上黨（サンダン）高等学校を訪問した。午後はハングルサラン館見学後、忠清北道教育庁を訪問した。27 日、午前中に垣坪（ウォンピョン）小学校を訪問した後、午後は清州古印刷博物館及び清州市韓国工芸館を訪問した。

B グループも午前にソウルを出発し、春川（チュンチョン）市へ移動した。春川市は江原道の道庁所在地であり、湖畔に囲まれ毎年多くの観光客が訪れる。一行は春川市に向かう途中、DMZ（非武装地帯）を訪れ、韓国 DMZ 平和生命園、ウルチ展望台、第 4 トンネルを訪問した。同日夕方にホームビジットがあり、各家庭を訪問し、有意義な時間を過ごした。26 日午前、江原道教育庁を訪問し、午後はユネスコスクールである春川教育大学校附属小学校で、学校給食を体験した。午後は清平寺訪問を訪問した。27 日は、原州女子高等学校を訪問し、学校給食を体験した後、グループプログラムレビュー会議を行い、雉岳山国立公園を訪問した。

28 日朝、A、B 両グループは 2 回目のグループプログラムレビュー会議を行い、仁川（インチョン）市へ向かった。
仁川到着後、ベストウェスタンプレミアソンドパークホテルにて本プログラムの報告会を行なった。A、B 各グループは、韓国訪問で得た成果を今後どのように発展させていくかなどをテーマに発表した。A グループは、韓国では伝統と新しい技術の融合がされていた、と述べた。また、韓国の特別支援教育から多くを学んだ、実際に現地で授業をしてみて ESD の必要性を再認識した、と述べた。B グループは、参加する前は韓国全体に反日感情があるかと思っていたが、教員や子供たちと接し実際には親日の人が多く嬉しかった、と述べた。また、ESD についてはボランティア活動を熱心にしている印象を受けた、国際教育の面では、対象の見方を変えることに力を入れ、相手を競争相手と考えるのではなく、共に歩む相手と見ることを大事にしていた、と述べた。参加者全員が、本プログラムでの経験を今後の教育活動や教育交流に活かす決意を固めた。

29 日、一行は帰港先ごとに成田国際空港、関西国際空港、福岡空港に向け、帰国の途に着いた。

# 2. 教育機関訪問

**韓国ユネスコ国内委員会**
**忠清北道教育庁**
**江原道教育庁**

**今回の教育機関訪問は、ソウル市、忠清北道（チュンチョンブクド）、江原道（カンウォンド）にて、計 3 機関で行われた。ソウルへ到着すると宿泊先のソウルロイヤルホテルにて、オリエンテーションおよび開会式が行われた。韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）では、韓国の教育事情に関する講義が行われた後、日韓教員がともにソウルの世界遺産や ESD 関連施設を視察する、「韓日教師ソウル探訪」が実施された。**

---

## 韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）
**8 月 24 日**

---

**開会式、韓国のユネスコ活動及びユネスコスクールの紹介、韓国の教育に関する講義、韓日教師ソウル探訪**
**日時　平成 25 年 8 月 24 日(土) 9:00～17:00**
**場所　ユネスコ会館 11 階ユネスコホール**

**【韓国ユネスコ活動及びユネスコスクールの紹介】**

KNCU の歴史について、映像で紹介があった後、教育チームのベ・スンヒョン氏より、ESD 事業について説明があった。KNCU では、次のような事業を実施している。

1. ユネスコ ESD 韓国委員会（2009 年～）
2. ESD の学術会議シリーズ（2010 年～）
3. ユネスコ ESD の公式プロジェクト（2011 年～）
4. ESD に関する出版物の発行
5. ESD の教員研修

続いて、教育チームのチョン・ソヨ氏より、ユネスコスクールについて説明があった。

1. 概要

韓国のユネスコスクールは、KNCU が認定する国内版とユネスコ本部が承認する国際版の 2 段階になっている。1961 年 4 校からスタートし、現在 166 校（小 40 校、中 35 校、高 66 校、大学 4 校、特殊 1 校）が国内版に加盟しており、国際版が承認しているのは 56 校ある。2 段階にしている理由は、質を確保するためで、国内版に認定されてから、最低 2 年間活動をしなければ国際版に申請することはできない。これは、校長先生の交代によって、ユネスコスクールの活動が継続されない等の事態を回避するためである。

2. ユネスコが定めるユネスコスクールのテーマ
・グローバル問題と国際機関の役割
・ESD：環境教育が最近変わったもの
・平和と人権
・文化間学習

3. 主要活動
・総会：新学期が始まる 3 月に約 200 人の教員が集まり、昨年度の活動を報告し、本年度の活動内容について検討する会議
・新規加盟審査：これまで全面的に KNCU が行ってきたが、学校数の増加に伴い、地方教育庁に学校のヒアリングを依頼
・模範生徒の表彰
・学校及び教員協議会の運営：地方教育庁の協力により実施
・ワークショップ等の開催
・国際版ユネスコスクールの活動支援

4. Rainbow 青少年世界市民プロジェクト（2010 年から）大学生を対象とするプログラムで、平和・人権・異文化・環境・世界化・地域固有文化・経済正義から自身の関心の持っているテーマを決めて活動するもの。同じ関心を持つ青少年が一緒になって、プロジェクトを企画・実行し、成果物として宣言をまとめる。

（稲城市立稲城第六小学校　教諭　友部　尚子）

**ユネスコ活動に関する資料の展示**

**阿部宏史団長（前列、右から５人目）、関東石（ミン・ドンソク）韓国ユネスコ国内委員会事務局長（同６人目）**

**【参加者の感想】**

**風張敬**・・・・・・・・・韓国のユネスコスクールの現況について詳しく知ることができた。また、ASPnet 加盟校における「Rainbow 青少年世界市民プロジェクト」は、現代社会の様々な問題に学生が主体的に参加し、学んだことを実践するという社会生活に活かす能力を育む機会として素晴らしいと感じた。子どもたちが、このような機会で活動し活躍できるよう、教員として子どもたちの学習環境を整えることの大切さを学んだ。

**【韓国の教育に関する講義】**

尹　鍾赫（ユン・ジョンヒョク）韓国教育開発院グローバル教育言及部長より、最近の韓国教員の改革動向について講義があった。

1.　序論：韓国教育を診断する

これまでの韓国の教育の成功した側面として PISA 最高水準の教育力に到達したこと、国民全体の教育レベルが向上したこと、教員の専門性強化など質的レベルの向上にも成功したこと、などが挙げられる。一方で問題点としては、入試競争の過熱による生徒や家庭の精神的・経済的な負担、生徒の教育の質に対する不満と学習へ興味喪失、過度な行政業務や強健侵害による教員の指揮と満足度の低下などがあげられる。

2012 年 12 月に韓国では、初の女性大統領である朴槿恵新政府が発足した。大統領は、教育分野の革新を進めるに際して、学生たちが規格化された学習から脱出、自由に学習してほしいとの考えを持っており、学校生活をする上でゆとりをもたせて「夢」と「才能」（タレント・素質）を育てる教育、「幸せ教育」を目標として掲げている。

これまで韓国の教育では、学校生活を規則の中で厳しくしてきた。生徒たちは何があっても学校へ行く。絶対に欠席してはならないものであり、生徒の管理という面で学校の中での教員の役割は重要であった。昔は注入式教育で学生を育てるシステムであり、個人よりも全体を重視する軍隊式教育であった。生徒は頑張って通い、とにかく勉強するよう求められた。その結果、OECD 主催の PISA では韓国の学生点数は良くなった。それは学校の先生の管理や生徒たちの能力に負うところが多いのだが、他に塾のようなプライベート教育によって補われている部分が多かった。PISA 好成績の反面、どれだけ自発的に学習に向かっているかという面では世界でも韓国は低いランクになる。親・教員が管理によって育てることはできるが、実践的な社会生活での能力の低さは課題として残った。

2.　自由学期制の導入

従前のような教育を通じての生徒の制御という方向性は、本当にこれでいいのか、個性を重視したほうがよいのではないかという議論があった。一方で、高校段階からの改革は大学入試を考慮すると難しい。そこで、負担の少ない中学生段階で「自由学期制」の採用にいたった。

自由学期制とは、生徒に一学期もしくはそれ以上、生徒が教室を抜け出して自分がやりたいこと

をみずからから作り出す機会を作り出すことである。2013 年度から、パイロットケース 42 校において開始された。2015 年までに徐々に増やし、2016 年以降はすべての中学において 1 学期かそれ以上の期間で自由学期制を全面採用することを計画している。

自由学期制の目標は、自分が持つ生活パターンにより自分の世界を持ち自分の活動の機会を得ること、自分で設計図を描き、関係諸機関・地域住民・学校とともに、次のステップについての進路模索をさせること、3 年間の中学教育において、他の学期でも柔軟に教育課程を改変することである。1 学期を自由学期制としつつ、5 つの学期で教育課程を終えさせることを考えているが、どのように適応していくかは不安も残る。7 月に自由学期制について説明の機会があったが、生徒の反応が良かったのは、テストや点数による評価がないことであった（自由学期制では、主観的ではあるが評価はある）。進学について問題が生じないように、自由学期制度の実績を高校入試だけでなく、大学入試の際にも評価対象となるよう政策的に進めている。

自由学期制は子供たちをただ遊ばせるのではなく、一度くらいは必要な息抜きの期間として、目下問題となっているいじめ・学校暴力問題の解消につながることが期待される。また体験を重視した授業や自身が望むことができるような授業を展開することで、さまざまな方向性の存在を保持し、正常な学校の状態を創出することが期待される。

体験を通じてチャンスを得られることは、子供が自分の才能に従って、自分の進路を選ぶためにも大事である。ただ不足した授業量をどう回復するか、教師の負担や担当教科の時間数確保といった葛藤の問題などもあり、教員相互の理解など改善も必要である。実施に当たっては関連諸機関や地方自治体・教育長、各分野の専門機関との連携・総体的な支援が重要であるが、その体制は整いつつある。

3. 小中等教育課程の改善努力と課題

自由学期制の導入によって人間性教育中心の授業を強化することで、心身を鍛錬し思春期を悩まず過ごせることが期待できる。昨今進む少子化問題への対応としても、少ない人口で効率的な社会維持をしていく上で重要な制度である。体験中心の特別学習ではあるが、自分が活動した体験をまとめ、自分の成長の振り返ることも大事である。生徒は自由に体験することで満足してしまうが、政府としてはその体験をきっかけに適正なレベルのキャリア指導につなげたい。

またプログラムをどのように評価するのかという問題も残っている。さらに自由学期制とともに教育課程の編成を重視している。韓国における食生活・健康状態の変化に応じて 2000 年代半ばからは、栄養管理を含めた教育、正しい食生活の教育や健康のための体育活動を重視している。

4. 均等な教育機会の保障と教育福祉政策

均等な教育機会保障のための支援政策として、無償給食が数年前から話題になっている。しかし地方政府の財政負担の問題もあり、きびしい部分もある。また学校内・外の教育費軽減についての関心が高まっているが、経済的事由による格差が生まれないようにすることは重要である。低所得者層については、ボランティアの活用などにより学習機会を補完し、教育費の軽減策を講じている。学習塾問題の一端としてある共働きによる子供のケアの問題についても、幼稚園だけでなく小学校低学年段階までケアサービス機能を強化拡大することで対応しようとしている。

5. 幸せな教育を実現するための今後の課題

第一に、中小期ロードマップの設定である。1、2 年で実績は出ない。広く長い目で、些細なことを気にしすぎず、学校に魅力を感じるようにさせ、5 年計画くらいで見ないとうまくいかない。そして一度始めたら長期間続けることが大事である。

第二に、広報活動を効果的・集中的にする必要がある。

第三に、自由学期制について、関連部署・産業界・NGO などと協力体制を構築していくことが重要である。

＜質問＞

Q : 日本はゆとりから注入式に戻す流れとなり、韓国とは逆の流れだか、このことをどのように考えるか？学生の自主性はどのように育つものか？

A : 私も驚いた。ゆとり教育が変更されたときに驚いたのは、ヨーロッパやアメリカではポジティブな効果があり、国際的な評価（PISA）で生徒たちの実力上昇が確認できた。政府も PISA 評価を信頼している。しかし PISA は、学力オリンピック化している面もある。勉強はうまくできても、興

味を失いつつあることが問題である。ゆとり教育のメリットは、生徒の興味を誘発する部分にあったと思う。日本はデメリットを見つめて注入式教育に切り替えたと思うが、メリットを尊重すべきだったのではないだろうか。中学校教育で自由学期制を取り入れる理由として、中学生には明確な目標がないことがあげられる（小学校は学習の入門としての目標があり、高校は将来へ備えての学習としての目標がある）。　自立的にすることが大事である。しかし中学生が学習するにおいて、保護者のガイドや調整は必要である。

Q：韓国は６学期生ということか？自由学期制の１学期は、すべてキャリア教育なのか？教科書内容の削減は問題となっていないのか？

A：１学期間、教科教育を行わないことへの対策としては２つの方法がある。

一つは５学期で６学期分の内容を行うことである。しかし授業日数の問題があるため、補填のために休みの日を減らしたり、土曜日の活用などが必要となる。もう一つは、５つの学期の間で授業時数自体を調整することである。しかし保護者・教員の立場からは受け入れがたい部分が多いと思われる。そのため両者を比較すると、前者の方法が取られるのではないか。

Q：自由学期制の趣旨は何か？現場の教員に対する具体的サポートはどうするのか？現場の反応はどうか？

A：趣旨のひとつは勉強以外のものでも成功できる社会を作ることにある。ランキング上位者のための社会・垂直的な社会を作るのではなく、バラエティにあふれた社会にするための自由教育制は大きな意味を持つと考えられる。また今後の少子化克服の戦略として、生徒一人ひとりが韓国社会を担う大事な存在であることを認識し、多様な人材を排出する韓国を目指すためにも意味を持つと考えられる。教員はそのために勉強をしていく必要がある。政府は研究制度の整備や専門領域の人材開発などによる対処を検討している。教員は、教員相互・生徒との対話を通じて、教えるだけの集団としてだけではなく、精神的な指導者、生徒たちをガイドする機能をもっていく必要がある。

Q：自由学期制・ゆとり教育は正しいと思うが、日本でうまくいかなかった原因のひとつには大学入試システムがあると考えられる。韓国でも同じことが起こるのではないか。大学入試改革についてはどう思うか？

A：この点については悩んでいる。自由な雰囲気を誘導したいが、教員・保護者・生徒は大学進学を考えるので難しいとの意見もある。自由学期制が貴重な体験となるように、プラスイメージで反映させることが大事であるし、大学入試にも反映するような制度設計も大事である。韓国の入試ではボランティア活動の項目があり、これに自由学期制を入れることを検討している。極力、入試の障害にならないように配慮している。しかし保護者感情の問題は難しい。子供により良い生活をしてほしい保護者は別途、塾に通わせるなどの行動にでるだろう。自由な教育をさせたとしても、意図しない方向に進んでいくことは十分に考えられる。その意味で、自由学期制の成功のためには、家庭・国民レベルの意識転換が必要ということを痛感する。

（橋本市立紀見小学校　教諭　谷口　喜美、名古屋大学教育学部附属中・高等学校　教諭　曽我雄司）

**質疑応答**

**【参加者の感想】**

**平石達彦**・・・・・・・・・韓国はPISAのテストで、「知識」は対象国でトップではあるが、「自発性」や「スポーツ性」、「社会性」の結果が芳しくなく、知識面以外をどのように伸ばしていくかが、韓国の悩みだそうです。それを打開するため、夢と才能を育てる教育を推進していくと説明を受けました。児童生徒の知識だけではなく、人格や社会性を育む教育方針を展開するという、韓国の教育方針の転換期に講義を受けることができたのは、非常に貴重な体験でした。

**手塚美代子**・・・・・・・・・韓国教育が、厳しい受験競争とワールドクラスの学力から新たなるパラダイムによる「幸せ教育」へと転換し始めており、子どもが自由に生活する学校で「夢と才能」をどのよ

うに実現させていくのかを注視したい。もはや知識の量だけでは生きられない時代にあって韓国ならではの方向性を導き出そうとしており、「幸せ教育」が ESD の理念にどのようにつながるのか興味深い。日本と韓国の教育の大きな違いは教育福祉政策という考え方にあるようだ。学校教育費の比率では OECD トップクラスの韓国は、羨ましいばかりの教育環境整備と人材活用を行っている。講話を聞いて「教育は施策なり」と痛感するとともに、日本の教師の優秀さも改めて実感した。

## ＜UNESCO 韓日教師ソウル探訪＞

講義後は、初の取組みとなる UNESCO 韓日教師ソウル探訪が行われた。日本教職員５名、韓国教職員２名、通訳１名のグループに分かれ、ソウル市内を探訪した。同行した韓国教職員の多くが、2013 年１月に韓国教職員招へいプログラムの参加者だった。はじめにグループで訪問先を決めた後、実際にグループで外に出向き、ソウル市内を視察した。

（松原市立三宅小学校　教諭　西川　りか、横浜市立永田台小学校　教諭　清水　沙織）

ソウル探訪

**【参加者の感想】**

**会坂友子**・・・・・・・・・韓国の教員２名・通訳１名の計８名で、規模が小グループで、学校のこと以外にも、生活面など日常的なことまで色々お話しすることができ、あっという間の時間だった。観光地では行かないであろう見学先や廣場市場も含め、この探訪は滞在中の忘れられない時間となった。今回、初めての試みだと伺ったが、是非、次回も教員同士の探訪はスケジュールに組み込んであるとよいと思った。

**長谷圭城**・・・・・・・・・担当して下さった先生は日本での滞在経験があり、日本への理解が高い方であった。暑い天候と私たちの疲れを考慮して頂いたスケジュールとなった。観光地をさけ、ソウル市の新庁舎をゆっくりと見てまわるなど充実した１日だった。一緒にまわった通訳が 19 歳の若者であり、40 代後半の先生との間でかわされた徴兵制についての議論が、世代差を表すものであり興味深かった。その中で出た本音の意見（自国を守るためには、日本も軍隊を持つのはある意味当然）が聞けたのは、このような機会があったからであり意義深い時間となった。

---

## 忠清北道（チュンチョンブクド）教育庁（A グループ）
## 8 月 26 日

---

**代表者：李　起勇（イ・ギヨン）教育長**
**特色：管轄学校：808 校（幼稚園 327 校・小学校 258 校・中学校・129 校・高等学校 83 校・特殊学校 9 校・放送通信高校 2 校）**
**教育長が、教育全般（財政・人事等）全てにおいて、強い権限を持つ。**
**＜忠清北道教育における基本方針＞**
**「能力品性を兼備している世界人の育成」**
**2013 年は、「多様性を尊重する幸せ一杯の忠北教育の具現化」が、施策の重要なポイント。重要業務は、①調和性に富んだ学力向上、②創造性を育む教育、③品性を育むこと、④信頼される行政参加、⑤均衡の取れた福祉の実現の５点。**

学校政策課のユ・チョル氏による歓迎のあいさつの後、学校政策課職員が紹介された。続いて教育の現状及び特色について、ビデオとプレゼンテーションによる紹介があった。プレゼンテーションでは、忠清北道教育庁における忠北教育の基本方針、行政組織、学校状況、2013 年重要業務及び特色事業が紹介された。今年の特色事業は、①尊重しあい、思いやりのあふれる「皆が幸せな学校」運営－学生・保護者・先生が満足する幸せな学校づくり、②幸せカルテット（Student-Parents-Teachers-Community）を通した品性教育－共感プログラムの運営。

その後、質疑応答が行われた。

Q：選挙で民意により選出されている教育長と知事との日常的な関係性と、韓国の教育行政の在り方

はどのようになっているのか。また素晴らしいPR・広報力の理由は？

A：教育長は民意による選出。権限がとても強く庁内の予算、人事など、全ての教育分野に及ぶ。日本のように、権限をもう少し減らすべきではないかという議論もある。教育長は、国際交流に興味があり、様々な国際交流事業を展開している。そのため、過去にも各国を訪問している。庁内職員も年に数回は、海外に出向いて国際交流のために尽力している。

Q：（韓国は）学力・体力向上などで様々な優秀賞を獲得しているが、学力・体力をはかる指標として、どのような方策を国として取っているのか。日本では、学力テスト・体力テストなどを全国的に実施しているが、韓国にも同様の指標があるのか。

A：学力向上では、基礎学力をはかるものとして、成就度評価（学力テスト）を実施している。対象は、小学校6年生と中学校3年生。基礎学力向上のために、学校の教育環境を整備し、オーダーメイド型の教育プログラムを開発した影響が大きい。基礎学力達成評価があり、忠清北道はトップの成績だった。体力増進について韓国では、全国少年体育大会がある。これでもオーダーメイド型の教育プログラムの効果があり、好成績を収めた。国として、全員に実施する指標テストを実施している。

（千葉県立特別支援学校市川大野高等学園　教諭　髙瀬　浩司）

**【参加者の感想】**

**小島源一郎**・・・・・・・・・教育庁は、忠清北道の教育についての教育行政を司る機関であるが、日本とは異なり、教育庁舎として独立した建物であった。忠清北道の教育を「忠北（チュンプク）教育」として道民へ親しみやすく愛称化しプロモーションビデオを作成して住民へのアピールを図っている。また、日本語、英語などにも訳し教育の町を発信している。教育にかける行政の意気込みをこれほどまでに感じたことはなかった。教育長は、民選なのでとても権限が強く、庁内の予算人事など、すべての教育分野での権限を持っているとのことであった。このことについては、賛否両論があるとのことであった。実際、懇親会でお会いしたがやはり堂々とした態度で、話の中で知事との関係を伺ったところ、まったく対等であるとのことだった。特色ある教育や環境整備について素早く対応できるシステムもここにあると感じた。

**谷口　喜美**・・・・・・・・・英語教育による国際理解を促進し、国際人を育てる教育を積極的に実施するなど、これからの社会を生きていく子どもに必要なことを見据え、育てるために教育への投資を惜しみなく行っている姿は素晴らしく、日本も見習う点が多いように思いました。

**篠崎　佳弘**・・・・・・・・・一つ目の政策として、学ぶ楽しさと教える喜びがあふれるということが挙げられていましたが、サンダン高校の実態を視察してすぐのことでしたので、本当に楽しく勉強ができているのかが疑問でした。二つ目の政策の素質と適性を発見して社会に適応できるというのは、自由学期を設けることで対応するのでしょう。三つ目の正しく健康で温かい心を持つということにも、自由学期の導入はよい方向に進むかもしれません。いずれにしても生徒には、「創意と知恵を」という目的で政策を立てているという点は理解できました。今後の韓国事情にも目を向けていきたいと考えています。グローバルな人材の育成という点では日本と同じであり、将来のグローバルリーダーが出てくることを望んでいる点では共通していると感じました。

教育庁表敬訪問

---

## 江原道（カンウォンド）教育庁
## （Bグループ）
## 8月26日

---

**代表者：関　丙熹（ミン・ビョンヒ）教育長**

**特色：国際理解教育及び教職員の交流こそ、わだかまりを超えた新しい関係作りになるものと考え、鳥取県教育委員会と教育関係の発展を目指した交流を実施している。点数教育からの脱却を目指す「希望**

**教育プロジェクト」を展開。具体的には、教員の事務処理を軽減し、生徒との時間をより多く確保することを目指した、教育行政軽減。さらに、多様なサークル活動、特技、適性にあわせた放課後の活動を取り入れることにより、生徒が行きたがる学校づくりを目指す。また、体験学習費や実習費を補助し、保護者の経済的な負担を減らす取り組みも行なっている。学生と教員と保護者が協力して生み出す、幸せに満ちた教育環境づくりが特色である。**

教育庁に到着後、集合写真を撮影し、趙成浩（チェ・ソンホ）江原道教育局長より歓迎のあいさつ、および出席者紹介があった。続いて伊藤英夫グループ長があいさつした。その後、江原道教育庁の取り組みをビデオで視聴、質疑応答が行われ、最後に記念品が贈呈された。

Q. 教員が授業に集中できるように事務処理を減らすとあったが、別に担当者を採用したのか。

A. 教員が授業のみ集中できるように、授業以外の業務は教頭を中心に行政担当チームを編成し、行政士を７クラス以下は１名、７クラス以上は２名配置。電算補助、科学補助などを行い、教員補助。雇用安定を図るために、努力をしている。

Q. ESD の各学校における取組み現状は？

A. 多くは枠組のみを提示し、具体的な取組みについては各学校の現場で行なっている。

Q. 「みんなのための教育」は大変素晴らしい。学校は競争のストレスを与えるところだが、競争がなければ生徒が楽をするのではないか、という反対意見はないのか。

A. 韓国教育も熾烈な競争教育が行なわれてきた。こうした競争教育によって、進歩してきたという意見もある。しかし、考え方を変え、英数国だけができる人材だけでなく、子供たちの才能、夢を育てることができるような教育を行いたいと考えている。

Q. 学生の人権条例とは？

A. マニフェストを５つ提出しているが、学校人権条例のみ、議会で滞っている。人間としての人権を享受しながら、学校生活を行なうことである。例えば、「携帯を使わない」などの規則は政府からではなく、生徒が話し合い、決めていくことが必要である。

Q. 高校入試改革の一つとして、我が校では、作文など複数解答の入試問題を出題している。こちらでは、どのような取組みをしているか。

A. ３月１日より公共標準化制度を実施。入試があると学校間の競争が激しくなり、序列化が起きると考える。主要科目以外にも能力があるので、そちらにも注目をするにしている。さらに、自由学期制度として、体験学習、進路体験などを国家施策として行なう予定である。

（市原中央高等学校　教諭　木嶋　勇一）

**教育長を囲んで**

**【参加者の感想】**

**森下まちこ**・・・・・・・・・これより先に国の教育の動向をうかがっていたので、それを受けて道としてどのように具現化しているかがよくわかった。幸せな学校―みんなで参加する教育・みんなのための教育と捉え、未来社会にとって必要な教育を考え、教師主導型から活動中心の子どもが主体的に動く授業への転換、読書教育の重視が謳われていた。江原道内の学校訪問でそれが見えた。

**唐川　和喜**・・・・・・・・・すべての子どもたちが幸せであるようにとの教育施策を推進していたのが印象的であった。子どもたちとかかわりが持てるように、事務的な作業は、学校に１、２人いる行政官が行うことになっており、教員にとっては、子どもに向き合う時間が取れ、教材研究の時間が確保できる。本来の職務に専念できるというのは喜ばしいことであると思った。

**木嶋　勇一**・・・・・・・・・点数教育からの脱却を目指す、「希望教育プロジェクト」に関心を持った。事務処理を軽減し、教員が教育に専念し、生徒たちと過ごす時間を確保するという取り組みは、是非とも参考にしたい。「生徒が行きたがる学校」という理想は、本校でもモットーとして掲げたい経営理念である。生徒自身が考えたルールを守っていくという学校人権条例について、具体的な取り組みを知りたかった。

# 3. 学校訪問

**A グループ**
**ソウル大学校師範大学附属女子中学校**
**上黨高等学校**
**垣坪小学校**
**B グループ**
**保聖女子中学校**
**春川教育大学校附属小学校**
**原州女子高等学校**

**A グループと B グループに分かれ、学校訪問を行った。ソウルで両グループはそれぞれ1校を訪問した後、A グループは忠清北道にて、B グループは江原道にて各 2 校を訪問し、授業見学や教職員、児童・生徒との交流が活発に行われた。**

---

## ソウル大学校師範大学附属女子中学校（A グループ）
**8 月 23 日**

---

**代表者: ユ・ソヨン**
**特色:教科教室制を全国に先がけて実施、様々な教育活動(体験学習、職業観を育てる進路指導、ESD と国際理解教育、CCAP(外国人と共に参加する文化教室)授業実施など)に対し、毎年賞を受賞している。(2012 年最優秀学校賞)**
**目指す子ども像は、「正しい」人「元気な」人、「必要とされる」人、「決定できる」人、「温かい」人。**

学校到着後、学校長による挨拶があり、学校の紹介を受けた。電子掲示板には私たちを歓迎する文字が書かれ、廊下は節電を促す南極の白熊のイラストがスイッチに貼られていた。

教室は、階ごとに教科をまとめた配置になっており、3 階は英語教室、日本語教室、漢字教室などがあった。2 階は国語と道徳、4 階は数学と社会だった。各教室では学習内容に合わせ、机の配置が様々であった。教室内の壁の色、材質にはどれもこだわり、子どもたちの心と身体に良いものになっている。教師は電子黒板を自在に活用し、マイクを使って授業を行っていた。習熟度別授業も実施され、学年を 5 段階のクラスに分け、教師が足りないところには補助教員を配置する。教師の心得は「5S＝Swiftly(迅速に)／Stand with students／See students／Smile at students／Satisfy students」。

歓迎公演では、女子 4 人による迫力ある挙道の演技、民族衣装をまとった伽耶琴の美しい演奏があった。

その後は 3 グループに分かれ、西野正晃教諭、浦西洋平教諭、高瀬浩司教諭が中心となり日本の文化についての授業を行なった。子どもたちの食いつきはよく、集中してよく聞き、反応し、楽しんでいる様子だった。最後の拍手は教室の空気が割れんばかりだった。

給食を食べた後、質疑応答に移った。

Q：日本語の授業について。
A:選択制。親と子どもにアンケートを実施している。学年ごとに 1 年次は漢字、2 年次は進路、3 年次に日本語の授業を週 1 回行っている。
Q：入学校は選べるのか。試験等はあるのか。
A：学区制で、該当地域の子どもたちが自動的に入学してくる。自分では学校を選べない。共学が普通だが、この地域は男子中と女子中に分かれている。
Q：給食について。
A：質も満足度も良い。2007 年度に始まり事故は一度もない。調理員が 6 人、栄養士が 1 人いる。残す生徒もいるが、体力の落ちた人は 4%未満で特に問題はない。
Q：教員の連携について。
A：教室が固定されている分、連携・連絡は努めて行う。共通ファイル、電話、会議など、夕食をとりながら行うこともある。1 年に 2 回、親を対象とした教科活動調査アンケートを実施し、その結果を活かしている。

（千葉県八千代市教育委員会 永石　利恵）

伽耶琴の演奏

**【参加者の感想】**

**風張敬**・・・・・・・・・電子教卓やTV、タブレット型ノートパソコンなどのICT機器を有効に活用し、子どもたちと相互作用しながら授業を展開しているという点で驚いた。また、外国人と共に参加する文化教室（CCAP）では、外国人の方との交流をするために、積極的に教員側で授業を申請し、努力をして実施しているという運営面の学びがあった。

**竹之内勝**・・・・・・・・・2010 年から、教科教室制で運営されている学校である。私自身が、ユニバーサルデザインを含めた環境づくりこそ、子供たちの意欲や関心の向上へつながる第一歩と考えているため、非常に興味深かった。ブラインドカーテンへの教科に関する内容のデザインや、掲示物等の環境づくり等、教科の特性に合わせた最適な環境が徹底されていた。日本での教室環境づくりのヒントを得た。また、環境部や福祉部、伝統文化部等、部活動が中心となってESDを推進している。全校生徒への共通取組としては、生徒アンケート上位20職種の職業人を招いた講演会を開催し、各生徒は1年間に2職種、3年間で6職種の方から話を聞いている。日本の中学でのESD推進にヒントを得た。

---

## 上黨（サンダン）高等学校
## （A グループ）
## 8 月 26 日

---

**代表者名：イ・ピョンボク**

**特色：1997 年に創立され、生徒数 1159 人のユネスコスクールである。特色ある活動としては、(1)学習サークル組織運営（20 個）、(2)生徒 Mentoring 運営、(3)外国人と共に参加する文化教室（CCAP）運営、(4)進路意識プログラム運営、(5)国際交流及び外国語能力向上プログラム運営などである。**

学校到着後、校長による挨拶があり、学校、教職員、ユネスコ活動についての紹介を受けた。教頭による学校紹介では、グリーン清州・教育目標・サークル活動、施設について説明を受け、その後、生徒によるサークル活動紹介があり、レインボープロジェクトについて、環境をテーマとしたゴミの分別や食べ残しゼロ運動といった具体的取組みを聞いた。また、日本の姉妹校である大阪教育大学附属高等学校池田校舎との国際交流についての話もあった。

日本教職員からは「ふるさと」、「世界に一つだけの花」を披露した。その後は、2グループに分かれて授業観察・施設紹介があった。

日本教職員による授業では、会坂知子教諭、秋山満代教諭、河内節子教諭が共同で学校紹介と茶道体験を、壷井宏泰教諭がスカイプを使ったリアルタイムの日本人生徒と交流を、猪股豪教諭が日本の高校生の学校生活について、長谷圭城教諭が学校紹介と日本の文化として浮き世絵の紹介を、鎌田彰教諭が日本文化紹介として折り紙と高校の学校生活、日本語と韓国語の共通の言葉〈発音〉について、それぞれ紹介した。

昼食の後は、日韓双方から質疑応答が行なわれた。

＜日本側からの質問＞

Q：どのような英語教育を行っているか。

A：年に4～6単位とれるようになっている。3段階の習熟度別授業を実施。

Q：大学入試を意識した授業か。

A：英語のスピーチ評価の割合が5分の2を占めるため、スピーチ重視の傾向がある。

Q：午後10時まで勉強していると聞いたが、その割合、誰が生徒を見るか、教員の割り当てはどうなっているのか。

A：ほぼ100％の生徒が午後10時まで自由学習または特別学習を行っている。教員が生徒を監督しており、教員には、授業なしの場合1200～1300ウォン、授業ありの場合4000ウォンの手当がつく。

Q：保護者からの要望と期待には何があるか。

A：よい大学に進学させること。学力を高めること。

Q：保護者との協力体制にはどんなことがあるか。

A：学校運営委員会において、学校の議案と審議を行っている。自発的に保護者会を開く。

Q：地域の文化を国際的に広報していると聞いたが、具体的に生徒はどのような取組みをしているのか。

A：姉妹校の大阪教育大学附属高等学校池田校舎と交流をしている。お互いの国で交流もしている。その他の活動は自発的なものとなる。

Q：特別支援学級との共同学習はどんなものがあるか。

A：身体や精神の状態によって3種のクラスに分かれている。

・特別支援の生徒のみのクラス
・統合クラス
・部分統合クラス　　の3種類

＜韓国側からの質問＞

Q：高校から大学に進学するためにやっていることは

何か。また、ボランティア活動についてはどうか。
A：放課後に１時間程度、補習を行っている。ボランティアは必須ではない。一般入試では役に立たないが、AO（Admission Office）入試については考慮されることもある。

質疑応答の後、記念撮影を撮り、見学を終えた。

（興本扇学園足立区立扇中学校　教諭　根石　雅仁）

**給食の時間に生徒と交流**

**【参加者の感想】**

**小島源一郎**・・・・・・・・・この高校も、小中学校と同じく地域で振り分けられた生徒たちであり、幅広い学力差があるはずなのだが、それを感じさせないくらいの子どもたちの素直さ、落ち着きなど、こんな高等学校は日本どこを探しても見つからないのではと思った。男女共学にも関わらずクラスは男女別になっているのには驚いた。電子教卓や大型スクリーンなどの優れた ICT が導入され、調和のとれた教育実践がなされていた。高校の場合は、全生徒が放課後残って 10 時まで自主学習に励んでいる。また上位１割の生徒は、寮に入り勉強に専念している。寮生と給食時に話をすることができたが、「勉強に疲弊している」「学校生活は楽しくない」とのことであった。それでも一流の大学を目指して勉強しなければ仕方がないのが、韓国の高校生の現実であることがよくわかった。

**高瀬浩司**・・・・・・・・・今回の訪韓での自身の大きなテーマでもあった、韓国におけるインクルーシブ教育に関する理解を深めるためには、とても貴重な訪問であった。大学受験に向けて、寮運営や放課後指導の体制を整えて、進学指導をしていることも印象的であったが、高等学校における特別なニーズのある生徒たちへの教育体制には、学ぶべき点が多かった。日本の高等学校には、特別支援学級は設置されていないが、韓国の高等学校には、全ての学校に特別支援学級（特殊学級）が設置されている。さらに、自分で学校を選択して地域の学校に入学し教育を受けることができる。こちらの学校では、統合教育としての通常学級対応や部分的な通級、また個別的な学習など、生徒に合わせたパターンでの学習形態で授業展開されていると伺った。日本の高等学校におけるインクルーシブ教育は、通常学級内で特別支援教育をいかに提供するかということが課題である。地域で学ぶために、こうした特別支援学級を高等学校内に設置することも一つの方策であり、高等学校段階における特別支援教育の在り方について深く考える機会となった。

**竹之内勝**・・・・・・・・・「ユネスコ部」が中心となって ESD を推進している。興味をもっているプロジェクトに各部員が分かれ、本市でも取り組んでいる「ライスプロジェクト」や地域固有文化をテーマにした「レインボープロジェクト」「国際交流」等、高校生らしく、これからの韓国やアジア、世界の持続発展を託せるような取組を垣間見た。日本において、小・中・高校を貫いた、発達段階に合わせた ESD の推進プランが浮かんだ訪問であった。

**壷井宏泰**・・・・・・・・・スカイプ交流で日韓の高校生がお互いの学校や文化について話し合い、相互理解に役立った。①韓国の高校生が１０時まで学校で勉強していることに日本の高校生が驚いた。②日本の高校生が 3 時半に学校が終わるということに韓国の高校生が羨ましそうだった。③韓国の高校生は J-POP やアニメなど、日本文化に関心の高く、日本語もある程度話せる割合が高いと感じた。それに比べると日本の高校生は韓国の文化や言葉に関してもっと理解を深めるべきだと感じた。今後もスカイプ交流を継続・発展させていきたいと思う。

---

## 院坪（ウォンピョン）小学校
## （A グループ）
## 8 月 27 日

---

**代表者名：嚴德鎔（オム・ドクヨン）**

**特色：「礼儀正しく知恵を持った健康的な子ども」の育成を目指し、日々の授業実践を行っている。また教職員が常に研究し、積極的に世界をリードできる人材育成のため、日々研究、研鑽に励んでいる。**

**特徴的な取組みとして、生徒の基礎学力向上プロジェクト、シムル（韓国の相撲）、卓球、テコンドーなどの部**

**活動の充実、グローバル人材育成のためのEBS教育放送を活用した教育の充実などがあげられる。**

学校到着後は、学校長、日本教職員団代表による挨拶が行なわれ、日本教職員が「ふるさと」を合唱した。教職員紹介、児童による演奏の後は、教頭より、学校の歴史、児童数、学力優秀校のための学力不振児童ゼロプロジェクト、部活動のシムルの成績、EBS教育放送を活用した教育の取組みなどについての説明を受けた。

続く施設案内では2グループに分かれて、特別支援学級、韓国語、英語の授業を参観した。

訪問団による日本文化授業では、2クラスに分かれ、4年生と6年生を対象に、日本の文化等に関する授業を行った。授業者は授業を日本語で行い、1人の通訳と韓国語が堪能な日本人教師が通訳として補助した。学校紹介をしたところ、韓国の学校にはプールが無いことから、日本の学校のプールの写真に対して、非常に興味を示していた。その後、実物の鯉のぼりを提示した。最後に日本の昔あそびの実践として、新聞紙を使ったカブト作り、けん玉遊び、そして最後に鯉のぼりのうたの練習を行った。児童たちは集中して取り組んでおり、完成したカブトを被って喜んでいる様子だった。けん玉遊びも最初は苦戦している児童の姿を多く見かけたが、時間が経つにつれ、上手くできるようになった生徒もおり、満足しているようだった。最後にプレゼントとして、だるま落としをあげたところ、休み時間になると、男子を中心に熱心に遊んでいた。

児童からは、日本の学校グランドにはどのような遊具があるのか、竹島問題に関してどう思うか、といった質問が寄せられた。

日韓教員の意見交流会では、以下のような質疑応答が行なわれた。

＜韓国側からの質問＞

Q.：日本の児童・生徒は秩序を持っていると、テレビを見て思ったが、どのようにしてそのような児童生徒を育成しているのか。

A： 学校には規則や決まりが多くあり、学校は集団生活を行う場所として位置づけられている。そのような生活の中で身についていっている。具体例としては、給食は静かに食べる、体育の時間は冬でも半ズボンで授業を受けるなどである。しかし、現在の日本では、少子化などの影響により、児童をしつけることが難しくなってきている。

A：過去に学校システムが崩壊し、校内暴力や非行が多発した。その反省から、規則や決まりを児童生徒に一方的に押し付けるのではなく、どうしたら良くなるか子どもに考えさせるというアプローチに変わってきている。また保護者や地域との連携し、子ども達が秩序を持って生活できるよう指導している。

Q：日本はノーベル賞の受賞者数が韓国よりも多いが、その要因は何か。

A：日本は韓国よりも生徒が自由な時間が多く確保されている。その時間を授業で学んだことや、興味のあることに対して、自分で考え調べている。その中で、知識として持っていたものを知恵に変えることができると考えられる。

Q：日本のプライベート教育の割合は。塾や習い事をさせるのは、社会からの見えない影響があるのか。

A：勤務校の小学校では、6年生140人に対し、60人が私立の中学校を受験した。

A：勤務している小学校の児童は、ほとんど塾へ行っていない。宿題するのに精一杯なのが現状。習い事としては、英語やそろばんなどしている児童がいるが、あとはゲームなどで遊んでいる。

＜日本教職員からの質問＞

Q：垣坪小学校の給食配置は、公的であるかまたは私的であるか。調理員の人数は何人か。栄養士の配置はされているのか。

A：給食は補助により無償で運営されている。調理員は、児童100人に対して1人の割合で配置されている。栄養士は、準公務員として扱われ、教育庁により配置されている。

Q：学力不振児童ゼロのための取組みにはどのようなものがあるか。

A：年度始めに基礎学力診断テストを行い、60点に満たない児童に対して支援を実施している。具体的には、放課後学習、休暇期間の補習、教師による個別指導などである。その際の教員への手当は、政府から補助が出ている。

Q：日本では「小1プロブレム」が問題となっているが、韓国にも同じ問題はあるのか。

A：学校生活への適応が難しいと考えられる児童に対しては、担任と保護者が連携を行っている。国レベルの取組みとしては、情緒検査で適応が難しいと診断された児童に対しては、教育庁に依頼し、学期始めの4週間、適応活動プログラムに参加させ、学校生活に適応できるよう支援している。

Q：垣坪小学校は、学力が全国トップレベルに入る優

秀校であるが、どのように学力向上のために実践しているのか。

A：6年生で行われた全国学力テストの結果が良かった。同州内で10か所の学校の先生に対して、報酬金が授与された。表彰された背景としては、年度始めの基礎学力診断テストで60点以下であった児童に対する管理を行った成果である。

Q 韓国の子どもの体力は、二極化しているか。

A：体力の二極化は韓国でも存在する。その対策としては、ペア活動で児童同士がお互いに助け合って授業に参加している。また、体力の低い児童に対しては、肥満クリニックやスポーツクラブを通じて体力の向上に取り組んでいる。

Q：体育の授業日数は？学校にプールはないが、水泳はカリキュラムにあるのか。

3～6年生は週3時間。年間106時間実施している。水泳は教室内で理論的なことしが学習しない。実技を実施する場合は、学校外の施設を利用し水泳の授業を行っている。

（寝屋川市立第十中学校　教諭　浦西 洋平）

**【参加者の感想】**

**会坂友子**・・・・・・・・・英語で使用する教室設備の充実。（英語の教室らしい装飾、教室後方のステージなど。ロールプレイするグループを教室カメラで、前方のPC 画面に映し出し、演じている側も自分たちの様子を見られる仕組み。他のクラスでは動画を活用したゲーム形式の会話練習、児童の注意をひくためのリズムよい拍手のルールなどが印象深い。4年生のクラスを見学したが、児童の活気、こいのぼりやかぶと作り、相撲けん玉など日本文化紹介をとても楽しんでいた様子は印象的。

**秋山満代**・・・・・・・・・学力優秀校として表彰されている。そのための方策として、学力不振児童ゼロプロジェクトを実施、年度始めに基礎学力診断テストを行い、60点に満たない児童に対して、放課後の学習や休暇期間の補習などの支援を実施している。このような地道な先生方の努力によって、学力優秀校になったのだと感じた。

**西野正晃**・・・・・・・・・小学6年生が日本の中学2年生の内容の英語学習をしていることに驚きを隠せなかった。また、どちらかといえば韓国内では先進的な学校ではなかったのかもしれないが、特に英語学習の環境でいうならばそれでも日本の小学校の英語教育環境は足元にも及んでいないように感じた。どれだけ両国間に教育分野への投資の差があるか、それをまざまざと感じさせられた。

日本文化の授業の終了後に記念撮影

## 保聖女子中学校（B グループ）
## 8月23日

**代表者：ホン・ジャスン**

**特色：キリスト教教育を通じて正しい価値観を持つ学生を育てることを教育の重点にし、これを元に実力と人格、創意力を持つ人材養成教育を実施している。国際化の流れと地域的環境を考慮して多文化触れ合い教育を実施している。さらに、放課後授業が活発である。**

学校到着後は、校長による歓迎挨拶とそれに対する日本教職員団の答辞があり、続いて、教頭による学校紹介、生徒によるユネスコ紹介があった。

日本教職員による授業では、2年生6クラス、3年生6クラスにそれぞれに1名ずつ入り、日本文化等に関する授業を行った。それぞれが工夫を凝らした授業を行った。授業後に生徒より寄せられた感想には、日本の四季の自然の美しさや文化がわかったとの意見があった。

その後は2グループに分かれ、英語、宗教、発表の授業を参観した。

懇談会ではまず、生徒による伝統楽器の演奏があり、後半では日韓双方による質疑応答が行なわれた。

＜韓国側からの質問＞

Q：放課後授業は、日本にもあるか？韓国では、5教科や美術系等充実している。

A：放課後学習はなく、プライベートな学習塾があり、受験勉強している生徒が多い。都市部では特に学習塾に通っている生徒が多い。日本では放課後、私立は学習に力を入れ、公立ではスポーツや美術音楽等の部活動を盛んに行っている。指導は先生が行って

いる。

Q：日本の学校の生活規定で、スカート丈や髪の長さ・化粧等の決まりはどのようになっているか。

A：私立は厳しく、公立はゆるい傾向がある。制服が決まっていることが多いが、最近、私服の学校も増えてきた。髪を染める生徒もいる。指導をすると親が抗議するため、指導が難しくなっている。公立小中学校では義務教育期間のため退学はないが、私立では規則違反による退学もある。スカート丈は短い傾向にある。公立では、基本的に不必要なものは学校に持ってきてはいけない。スマートフォンは日本では持ち込み禁止である。

Q：本校では、長い休暇中に生徒は各地にボランティアに行っている。2000年代になって海外へ行く生徒も出てきた。日本ではボランティア活動が先進的なところもあると聞いているが…。

A：学校によって違うが、私の学校では海外へ行くことはない。定期的にボランティアをすることよりも、必要な時に行う。最近では、東日本大震災の際に参加者を募って被災地へ行った。

＜日本側からの質問＞

Q：日本の生徒会は、学校祭の運営や予算配分ボランティア活動等を行っているが、韓国ではどうか。また、生徒会役員の人数や選出方法はどのようになっているか。

A：韓国では、ボランティアは放課後活動で行う。生徒会役員は選挙で選ぶ。推薦を受けた生徒の中から公正な選挙を行い決定する。メンバーは、会長・副会長と部長（布教部長、美化部長、情報部長等）である。活動では、校則の指導等生徒自ら模擬裁判法廷で弁護士・裁判長等で裁判を開きルールを守る活動等を行う。

最後に日本教職員団団長による総評があり、記念品交換をして見学が終了した。

（金沢市立泉中学校　教諭　浜中　真希）

**【参加者の感想】**

**平石達彦**・・・・・・・・韓国で最初に訪問した学校でした。私立の学校ということで、キリスト教を通した国際理解教育を目指していることが特徴的であり、興味深かったです。本校と同じユネスコスクールであり、生徒主体のユネスコ部（サークル）が存在することに驚きました。生徒自身が国際情勢や福祉活動に興味を持ち、意欲的に取り組む様子は、本校の教育活動にも活用していく必要があると感じました。学校の雰囲気は落ち着きがあり、生徒が学習に集中できる環境が整っていました。また、生徒が所有している携帯電話の保管場所が教室内にあり、規律を守らせる指導を行っている様子をうかがう事ができました。英語教育では、習熟度別で授業を行っており、生徒のレベルに合わせた教育を行っていることが分かりました。教室内の設備は、エアコン、プロジェクター、電子黒板が設置されていました。

**梶弘樹**・・・・・・・・異言語によるコミュニケーションが難しかったが，生徒たちの笑顔や，意欲的な発言に助けられた。熊野筆を使っての書写実習を行ったが，思ったより上手に書くことができてうれしかった。外国で外国語を使っての授業をするという貴重な経験をすることができ，子どもたちに学ぶ楽しさや喜びを味わえるような授業作りに今後も務めていきたい。

校門での歓迎

---

## 春川教育大学校附属小学校（Bグループ）8月26日

---

**代表者名：金貞淑（キム・ジョンスク）**

**特色：江原道の春川の中心に位置する、江原道唯一の国立校。常設研究学校運営し、教育実習指導を年4回実施している。毎年、新入生を抽選で選抜しており、クラス定員制。教師も志願で選抜し、質の高い教育のために努力している。**

学校に到着すると、歓迎の楽器演奏があり、その後、校長からの挨拶、児童による学校紹介、歌や伝統楽器などの演奏が続いた。

授業参観では、4年月組と6年星組を見学した。

日本教職員による授業は、参観した4年月組と6年星組において、教員各1名（計2名）が日本文化等に関する授業を行った。2名とも通訳が付いての授業で、計画通り進めることができた。

給食後は校内を見学し、意見交換会を行なった。

＜韓国側からの質問＞
Q：日本の郷土愛・愛国心への教育について。
A：戦後は、特に愛国心を育てる教育は行われていない。自分の住んでいる地域を好きになることが、延いては郷土愛・愛国心につながる。
Q：地域の人をどのように活用しているか。
A：地域の人の活用は学校によって違う。文部科学省でも政策を出しており、これから益々地域住民との協力が必要になってくる。
Q：地域を生かした学習はどのように行われているのか。
A：四季のスポーツや祭り、地域の警察やボランティアの活用等。
Q：ESD をどの教科で行っているか。
A：創意的な体験活動として各教科に割り振って行っている。
Q：教員の事務負担軽減の取組みについて。
A：事務担当をパートタイムで採用している。
補助教員が教科ごとに授業に入りサポートしている。
Q：生徒指導の取組みについて。
A：感性を育てる教育を大切にし、実践している。
（白石市立白石第二小学校 教諭 三浦　良人 ）

**【参加者の感想】**

**石井　亜佐美**・・・・・・・・設備が充実していることに驚いた。自分も小学校の教員だが、この学校のような設備はない。設備の充実をはかり、子供たちの力を伸ばしていこうという韓国の教育の方向性を実感した。子供たちはとてものびのびしていて、かわいく、設備面では大きく日本と異なるが、子供たちの笑顔はどこの国であっても変わらないことを実感した。

**大竹　優志**・・・・・・・・この学校で特に印象に残っていることは何より学校の雰囲気の明るさでした。校長先生が芸能人のように綺麗でまた常に笑顔でした。そのためか他の教員、また子どもたちも皆、笑顔で明るく、学校に活気がありました。見学後の懇談会での「これからの時代を先導する生徒たちをひとりひとり大切に育てていく」という言葉が印象的でした。また IT 設備も訪問した学校の中で一番充実していました。クラスルームでは電子黒板が常設され、画面にタッチしながら授業を進行させる語学授業も見学しました。

**岡　泰子**・・・・・・・・学校設備や歓迎行事での出し物のクオリティの高さに驚いた。また、ここでの授業では、国が異なっても子どもは変わらないと感じた。授業に際して、日本独自の文化は何か、韓国と類似したものはと、日本のよさについて考えるよい機会となった。

日韓教員による意見交換

---

## 原州女子高等学校（B グループ）
## 8 月 27 日

---

**代表者：金　昌萬（キム・チャンマン）**
**特色：先月（7月）、移転したばかりの新しい学校。読書活動の活性化による創造的な人間の育成、学生の自主サークル活動の活性化、「家族の幸せの日」運営による品性教育強化を実施している。**

学校到着後、学校長による挨拶があり、日本教職員団団長が挨拶し、教頭より学校紹介があった。講義型から生徒活動型へ授業形態をシフトしつつあり、授業は 50 分、一般の下校時間は午後 10 時。教科教室制度を実施している。

授業参観では、歴史、国語、英語、数学、音楽を見学し、日本教職員団による授業では、曽我・柴田・平石・高橋・木嶋各教諭が日本文化や道徳の授業を行なった。

昼食後、意見交換会が行なわれた。
＜韓国側からの質問＞
Q：生徒１人１人の能力に合った授業の学校システムの構築について
A：日本では、個人の能力を組織的に伸ばすことはできておらず、お昼休みや放課後に、生徒の質問を受け、個別に対応しているのが現状。
Q：学校は制服？髪型に対する規制は？
A：日本は、ほとんどの学校が制服。髪型は、毛染めをする子はいるが、禁止している学校がほとんど。スカート丈を短くする子が多く、指導が大変な状況。携帯電話については、中学校は禁止、高校は持ち込

んでも良いが、授業中の使用は禁止しているところが多い。

Q：木嶋教諭が実施した英語授業について

A：日本の英語教育も大きく変わろうとしている。一方的に先生の話を聞くだけ、英文を読むだけでなく、「何を話すのか、話させるのか」に重点を置くようになってきた。今回は、スカイツリーの紹介をした後、生徒たちでグループを組んで、アイデアを出しながらツリーをつくるという、「ものづくり」を実践させた。

Q：原州女子高校では、佐藤学氏の手法を取り入れているというが、長所と短所は？

A：長所は、生徒間・生徒・教師間に信頼が生まれ、生徒に達成感が生まれる。また、積極的な態度も培える。短所は、うまく教師が生徒をコントロールできないと、友人関係が上手くいかなくなってしまう。直接的に、大学入試に向けての力がつくのか疑問、評価も難しい。

Q：日本の入試システムについて

A:センター試験に向けて、頑張るのが基本。大抵は、18 時には下校し、その後は塾か家庭学習で、割合は半々。

＜日本側からの質問＞

Q：韓国の子どもたちは夜 10 時まで勉強していると聞いたが、疲れて不登校になったりしないか。学校でのケアは？

A：保健室もあるし、必要ならば病院へ。また、全員を強制的に残しているわけではない。夜間の自主学習をやめて帰る生徒もいる。精神的に疲れを感じる生徒は、ほとんどが家庭に問題がある。そのためにも、「家族の幸せの日」プログラムを実施している。

Q：夜 10 時下校の安全指導は？

A：保護者の同意を得て、帰宅方法を把握している。（迎えに来る、公共交通機関で帰る、電話してから帰る等）

（橋本市教育委員会　森下　まちこ）

日本教員による授業で、韓国の生徒に浴衣を着せる

**【参加者の感想】**

**平石達彦**・・・・・・・・原州女子高等学校では、韓国の大学入試に対する競争の実態を学ぶことができました。原州女子高等学校で最も驚いたことは、学校の開放時間が午後 10 時までであるということです。基本的には、午後 3 時以降の補習・自習の時間は自由参加であるそうですが、半分以上の生徒が午後 10 時まで残るという説明を受けました。今までの教育動向や教育庁の講義では、注入式の教育ではなく、夢と才能を育てる教育にシフトしていく、「幸せ教育」を導入・推進するという説明を受けていたため、夜遅くまで学習させている現実には驚きました。韓国の教育現場では、まだまだ大学入試合格への思いが強く、韓国が推進する「幸せ教育」が成果を出すには、国家・国民規模の課題が存在するということが理解できました。大学入試と関連させ、塾の問題点をどれだけ克服するかが、韓国の課題であり、日本も注目していく必要があると思います。

**高垣大介**・・・・・・・・最先端の設備を備えた、完成したての校舎を見せてもらった。全教室にある教卓は PC のディスプレイも兼ね黒板に映し出すことができる素晴らしいものであったし、図書室や自習室などの充実も、生徒の学習スタイルにつながるものであった。高校では日本人教師による授業が実践されたが、どの教室も反応がよく、日本文化に対する関心も高かった。そんな高校生の姿をみると、日韓の問題など市民レベルでは一切関係ないと感じた。

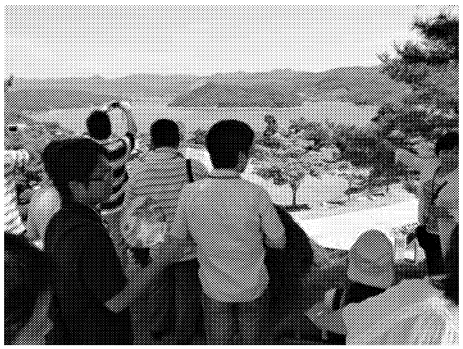
# 4. スタディーツアー

**A グループ**
**清南臺及び大清ダム**
**文義文化財團地**
**ハングルサラン館**
**清州古印刷博物館、清州市韓国工芸館**
**B グループ**
**韓国 DMZ 平和生命園**
**ウルチ展望台、第 4 トンネル**
**清平寺**
**雉岳山国立公園**

## 清南台・大清ダム（A グループ）
**8 月 25 日**

**特色：歴史と自然が調和する大統領の別荘。1983 年から韓国大統領の公式別荘として利用されていた。本館、ゴルフ場、クラブハウス、ヘリポート、養魚場、五角亭などがあり、歴代 5 名の大統領が利用した。2003 年 4 月、一般人に開放された。それまでは立ち入ることができない場所で、本館室内は写真撮影が今もできない。**

「大統領の道」：散歩やジョギングを楽しんだという散歩道。クラブハウス・大清湖（人造湖）、大統領広場・歴代大統領銅像、「未来の大統領」のお立ち台等を見学。「進入道」は緑が多く、四季折々に姿を草花や木々も楽しめる。敷地内で、ドラマ・映画の撮影でも使われている。本館は、地下 1F、地上 2F、延べ面積 2,699 ㎡の規模（1F 居間・食堂・執務室、来賓用ベッドルームが複数、2F は大統領と家族のみが使用できる居間・寝室など）。大きな窓ガラスは防弾になっている。（東京都立王子総合高等学校　主任教諭　会坂　友子）



大清ダム

## 文義文化財団地（A グループ）
**8 月 25 日**

**特色：文義文化財団地は、韓国固有の伝統文化を再現するために造成された歴史教育の場である。団地の中には先史遺跡と文化館を始めとする伝統家屋と徐徳吉孝子閣、金善復忠信閣を元型のまま移し、文義地域の昔の碑石を集めた碑石の距離も造られている。他にも両班家屋、旅籠屋、鍛冶屋、城郭を再現し、伝統文化の香りと先祖の知恵が学べる。**

はじめに、文義文化財団地についての説明があった。1980 年代の大清ダム建設によって移動を余儀なくされた文化財の石の墓や家屋が山麓に移され展示されているところである。

次に伝統家屋を見学した。韓国の伝統家屋は、屋根が藁葺きで、垣根は低く、庭園を造らなくても外の景色と調和して、眺める景色のすべてがその家のものとなる。木造家屋は家を立て直す時に再び木を使えるというメリットがある。家は床暖房である。庭が広く結婚式等様々なイベントに使われていた。オンドル（床暖房）は、台所の竈で火を炊くと部屋が暖かくなる仕組みになっている。煙突から出た煙により藁の中の虫を殺していた。あまり寒くないこの地方の煙突の高さは低く、対流現象によって部屋がすぐに暖まる良さがある。逆に、寒い地方の煙突は高い。垣根が低い理由は、情け深い国なので朝隣の人と挨拶をしたり、美味しい料理を作って互いに分け合ったりしたためという。木や藁等が焼けても、人間が死んでも自然に戻るため、家と自然と人は一つと考えられていた。

青銅器時代の石の墓である「コインドル（支石墓）」は、石の下に人がおり、暖かい地域の石の形で寒い地域は上にあげた形となっている。

次に、貴族（両班）の家を見学した。別居間や大門をつくっていた。女性が住む建物と男性が住む建物、使用人が住む建物が分かれていた。男子は 7 歳までは本館（中居間）で母親や祖母と一緒に暮らすが 7 歳を迎えると移動する。学問をしたり、客を迎えたりした。

両班の割合は、朝鮮初期は 3～4 割であったが、朝鮮後期になると 7 割となった。お金を払って身分を買った人が出てきたため、後期は増えた。両班の家は、一般人の家と屋根が異なる。プライバシー保護

の為、垣根を作っていた。身分によって通れる門が違うので門が 3 つあった。

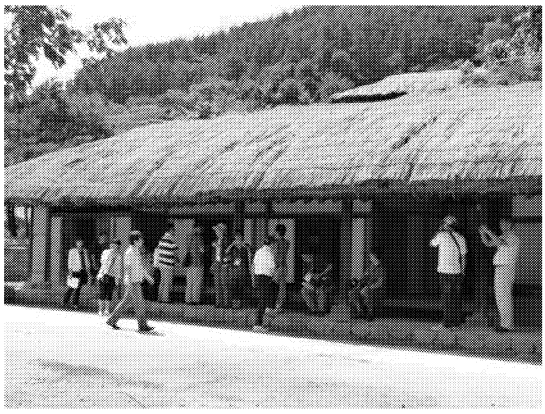
文化遺物展示館には、洞窟の遺物（再現）や瓦が展示されていた。4 万年前の 5～6 歳の男子（フムスン）の骨が、石灰岩（アルカリ性）のために腐らないで発見され、再現されていた。土地は水と土が肥沃し、住みやすい環境であった。旧石器時代には埋葬の際、菊の花を入れており、当時、菊が存在していたことがわかる。王子や王妃が生まれると、胎紐を壺に入れ、外を石で囲み、王子になると山頂の気をもらえるところに移していた。

この風習は王家のみで、一般人は胎紐を乾かし、米の殻の中に混ぜたり、土の中に埋めたりしていた。

時代別・種類別に展示された瓦は、三国時代は、鬼瓦を家屋の 4 隅につけて病気や災いがこないようにしていた。朝鮮時代になると瓦は前に長くなり、雨水から壁を防ぐ機能性を重視するようになった。願いを込めて瓦に模様を描いた。この土地は要衝地だったので、29 個の城が発見されている。

最後に、気を体全体で感じられる高台に上り、全員で「ヤッホー」と大声を出して、悪い気を追い払った。

（石川県小松市安宅小学校 教諭 坂下　和之）



文義文化財団地

## ハングルサラン館（A グループ）
## 8 月 26 日

**特色： 2004 年創設された、「ハングルを愛する館」という意味で、ハングルに関する各種資料を収集するとともに、ハングル研究の中心機関である。**

文化企画部長の挨拶、広報部長の紹介の後、講師よりハングルに関する説明を受けた。

ハングルは、世宗大王が 1446 年、「訓民正音」の名で公布した朝鮮語を表記するための表音文字。「民を教える正しい音」という意味で、庶民にとっては難解であった漢字に代わり、簡単に使うことのできる新しい文字を作成した。ハングルは母音 10 個、子音 14 個の組み合わせで出来ており、母音と子音の組み合わせにより、11,172 個の音を作ることのできる世界で最も多くの音を持つ言語である。作成した人物、目的、年代がわかっている唯一の文字であり、最も独創的で最も科学的な文字と評価が高く、1997 年ユネスコの記憶遺産に登録された。ハングルには様々な書き方があり、「風の音」を表現する際も、風の様子によってさまざまな表現方法を用いる。子音は、人間の口の形を見て作り、母音は空土人などを見て作った。朝鮮半島の他、文字を持たなかったインドネシアのチアチア族が、公式に採用しており、韓国では使用しなくなった 4 つの母音も使用している。

説明を聞いた後は、うちわに蓮の花の下絵に色づけする伝統文化体験を行なった。蓮の花は幸福、豊穣、多産のシンボルという。

（神奈川県立横浜国際高等学校 教諭 河内　節子）

色づけ体験

## 清州古印刷博物館
## 及び清州市韓国工芸館（A グループ）
## 8 月 27 日

**特色：『直指（Jikji）』は現存する世界最古の金属活字本で、人類文化史に及ぼした価値を認められ、2001 年 6 月、清州で開催された第 5 次ユネスコ世界記憶遺産会議諮問委員会で、ユネスコ記憶遺産として勧告され、2001 年 9 月 4 日ユネスコ記憶遺産として登録されたものである。 正式名は『白雲和尚抄録仏祖直指心体要**

**節」（はくうんわしょうしょうろくぶっそちょくししんたいようせつ、백운화상초록불조직지심체요절、ペグンファサンチョロクプルチョチクチシムチェヨジョル）』である。2011年現在、世界記憶遺産には267点が登録されており、韓国は『承政院日記』など9点が登録されている。**

1.『直指』の意義

韓国は1200年代初期、すでに高麗で金属活字を使用していたという記録が残されているが、事実を裏付けるものは実在していなかった。そのため、ドイツのグーデンベルクが『42行聖書』（1455年）を金属活字で印刷したのが最古とされていたが、1377年（宣光七年丁巳七月）と記された『直指』が発見され、金属活字印刷物の中で最も古い書籍であることが確認された。金属活字を使用した最古の書籍は『直指』であり、さらに78年遡ることになる。そして、14世紀後半には寺院でも金属活字を利用して本を制作するほどに発展した印刷技術を持っていたことを裏付けることができた。

2.『直指』の意味

禅僧・白雲和尚景閑が禅の要諦を悟るに必要な内容を選んで1372年に著した仏教の書籍で、上・下巻で構成されている。これは元朝から取り入れた『仏祖直指心体要節』の内容を大幅に加筆し上・下巻の2巻に編集したものである。中心の主題は「直指人心見性成仏」から由来しており、座禅を組み、人の心正しく見るとき、その心の本性が、すなわち御釈迦様の心を悟るという意味である。つまり「直指」は「直接治める・正しい心・直接示す・正しく示す」等の意味に使われる。

3.『直指』の再発見

金属活字本と呼ばれているもののうち現存しているのは下巻だけで、19世紀末から20世紀初頭にかけて駐韓フランス公使コリン・デ・プランシ（Victor Emile Marie Joseph Collin de Plancy）が韓国で蒐集した古書の中に含まれていた。1900年フランス・パリで開かれた世界万博博覧会の際、韓国館に展示され、1901年モーリス・クーラン Maurice　Courant により発行された『朝鮮書誌』に金属活字で印刷された世界で最も古い韓国の印刷物であることが紹介された。古書のコレクションはコリンの死後フランス国立図書館に寄付されたが、『直指』は長らく蔵書の中に埋もれた状態だった。直指は1970年代になり再発見され、1972年のフランス国立図書館主催の国際書籍年関連のイベントで在フランス学者、朴炳善（パク　・ビョンソン）により展示され、世界最古の金属活字本として注目を浴びるようになった。現在もフランス国立図書館に所蔵されている。上巻は伝承されておらず、下巻1冊のみ保存されている。下巻は、表紙を除いて39頁あるが、最初の1枚は紛失してしまっており、1頁11行ずつ、各行ごとに18～20字ずつ印刷されている。中の紙は木の染みが残っているが、表紙は後に新しく復元されたものである。表紙を復元した際に、上下を少し切り取る処理をしたため小さくなっている。されに、薄くなった文字を筆でなぞった跡もある。

4.『直指』と興徳寺

『直指』の最後の章に〈宣光七年丁巳七月日　清州牧外興徳寺鋳字印施〉という刊行記録があり、『直指』が、清州の興徳寺から刊行されたのが分かる。しかし、興徳寺址の位置を確認出来なかった。1984年12月から韓国土地公司が雲泉地区宅地開発事業に伴い、清州大学校博物館（団長キム・ヨンジン）が、雲泉洞寺址発掘調査を実施した。1985年10月に、宅地工事で毀損された寺址の東方から‘甲寅五月日西原府興徳寺禁口壱座’という名文がある青銅禁口と青銅佛器などが出土され、この寺址が、つまり高麗禑王3年（1377）年に現存する世界最古の金属活字本で、世界記憶遺産である『直指』を印刷した興徳寺址であるのが明らかになった。

5.もう一つの『直指』

金属活字本のほか、直指の木版本も現存している。刊記によると木版本は、高麗禑王4年（1378年）の6月に、驪州の鷲岩寺で白雲和尚の弟子の法隣により刊行された。この木版本は、禑王3年（1377年）に清州の興徳寺で刊行された金属活字本を底本としている。序文は1377年に成士達が書いたものをそのまま使用し、前部に1378年に李穡が書いた序文を加えて刊行した。興徳寺で刷り出した金属活字本とは違い、鷲岩寺の本はコウゾで作った紙に刷った木版本で、金属活字本では地方の寺の印刷術が未熟で印出の部数に制限があり、多く刷ることができなかったようである。

6.まとめ

金属活字本『直指』は、現在のインターネットコンピューター社会に繋がる原点であり、さらに教育市清州のルーツでもあることが理解できた。破壊や紛失でわからない点も多く、調査・保存の重要性も再認識した。

（奈良市立伏見小学校 教諭 山中　淳代）

学芸員から直指の説明を聞く

【参加者の感想】

**河内節子**・・・・・・・・・世界で最古の金属活字による印刷物「直指」の博物館で、大変興味深く見学した。最古の金属活字については、知っていたものの、詳しいことは知らず、今回コピーとはいえ実際の文書を見ることができ、朝鮮の文字に対する熱意の深さを感じることができた。西欧の文化・歴史に偏りがちな歴史教育の在り方について、改めて考えさせられた。

---

## DMZ（非武装地帯）韓国平和生命園・乙支（ウルチ）展望台・第4トンネル（Bグループ）8月25日

---

**代表:イ・ジョンリ理事長**

**特色:江原道にあるDMZ(非武装地帯)に隣接し、38度線まで車で20分の位置にある村。平和活動を地域住民と実践している。また、残された豊かな自然を活かし、教育と生命社会活動を実践し広めている。**

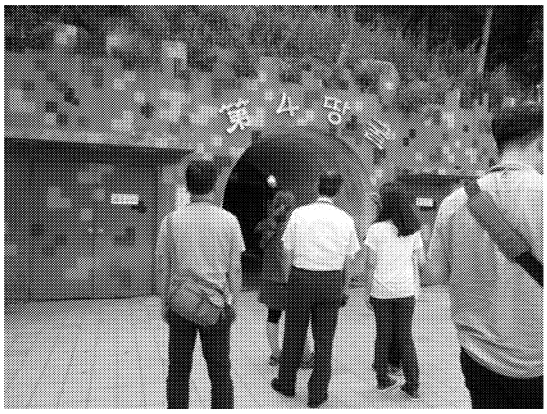
イ・ジョンリ理事長より、平和生命園について説明を受けた。DMZ韓国平和生命園は、DMZ一帯の生命と歴史、文化を正しく保存し、地域住民の暮らしを向上させることを目的に設けられた。DMZの評価とその歴史性、逆説性、多重性を韓国全土、さらには朝鮮半島全土に広めている。ESDに関連付けて以下のように述べた。この村では、生存のために生命社会教育を進めていかねばならない。大量消費を支えている化石エネルギーを減らし、今後どう適切な形に変えていくか、原発問題も含めて考えていかなければならない。教育については、教育部と市民教育委員会、経済社会発展委員会が進めているが、大学卒業後もこの村に人が残ってくれるよう考えている。今後の課題は、これからの10年間をどう過ごしていくか。大切なのは教育で、少ない教育費の中で、誰が計画をたてるか、住民がどれだけ動いていけるかが課題である。理事長は最後に「生命と文明の大転換を考えていくための努力を続けていかなければならない。今回の訪問を皆さんの教育に活かしていってほしい、とまとめた。

次に、DMZ平和生命園の敷地内にある「命の丘」、「5行の丘」を見学した。5行（木、火、土、金、水）の要素に合わせ、命の丘にある「頭、腕、肝臓、心臓、腎臓、肺，脾臓」を支えるような庭園になっており、作物を育てている。途中には戦時中に使われた戦車に花がささげられている場所もあった。

次に、一行はバスに乗り、乙支（ウルチ）展望台に向かった。厳戒態勢で検問があり、写真撮影は制約された。展望台に上り、韓国の兵士から展望台の説明を受けた後、国境軍事境界線を見学した。北朝鮮がすぐ眼下に見え、自動小銃をもった若い兵隊からの点呼もあった。

また、北朝鮮側から掘られた第4トンネルを見学した。徒歩とトロッコで薄暗いトンネル内部を340mほど進み、北朝鮮との国境付近まで行った。

（東京都稲城市立稲城第二小学校　高垣　大介）



第4トンネルにて

【参加者の感想】

**浜中真希**・・・・・・・・・北朝鮮との国境線南北各2㎞の人の立ち入ることのできない非武装地帯(DMZ)は、1954年の休戦から人間の手が入らない自然が残っている。韓国の絶滅危機種の動植物の38%がDMZ内に生息している。休戦状態にある韓国では、平和を切実に願い、これからの世代が戦争を起こさないように考えている。戦争は、食糧や燃料を奪おうとすることからも起きうる。異常気象は食糧難を招き、戦争に結びついていく。だからこそ環境を守る活動は必要である。

私にとって、このような視点での平和学習は経験がなく、戦争が起きないように、今日からでもできることがあるのだと感じた。教育も消費運動も世界中の人々が幸せに暮らすことを目指していることがわかった。また、展望台では、目の前に見えている北朝鮮が同じ民族でありながら、敵となっていて行き来できない状況を目の当たりにした。北朝鮮兵の動きも見えるような間近な所で、言葉にできない複雑な気持ちになった。

**木嶋勇一**・・・・・・・・・DMZ 一帯の住民と軍人の現場教育、市民団体、企業管理職と職員、小中高及び大学生を対象とした一般教育と指導者教育、地球村の平和教育を実施していた。DMZ 一帯の生態系と歴史、文化の保存を行なうことで、その価値を全世界に広める活動に共感を覚えた。地球温暖化が進むことで、食糧不足が起こり、戦争の可能性が生まれる中で、こうした体験型の平和教育活動はより意義深くなるものと考える。

**高橋勝也**・・・・・・・・・DMZ は、単なる平和教育に活用されていると勝手に思い込んでいたところがある。それだけにとどまることなく、さまざまな分野で ESD とリンクするような活動がなされていることに驚きを覚えた。幅広い視点を持つことができてよかった。

**手塚美代子**・・・・・・・・・北朝鮮を間近に体感できたことは貴重な経験となった。何よりも、ガイドをしていただいた村長さんの話は理屈なしに平和の難しさと朝鮮半島統一への強い願いを感じさせるものだった。日本の子どもたちに平和について、何を考えさせどう実現させていくべきなのか、平和になれてしまった今の日本の状況を改めて考えさせられた。「命のカギで平和の門を開く」というパンフレットの言葉のように自然が平和への架け橋となっていくためにも教育の役割の重要さを感じる。

## 清平寺（B グループ）
## 8 月 26 日

**特色：百済時代の王と王族の墓が群集している場所で、武寧王陵を始め合計7基の古墳が分布している。**

清平寺は 973 年に建立されたお寺で、朝鮮半島を南北にわける軍事境界線である 38 度線の近くに位置し、1950 年代の朝鮮戦争の際にそのほとんどが焼け落ちてしまったが、再建され、今日の姿を残している。清平寺は、他とは違う特徴を有するお寺で、国内でも 2 箇所しかないという輪廻の思想を表現した回転門がある。また、石垣も特徴的で、朝鮮戦争の爪跡も残されている。

境内の湧き水には韓国語で「ショウチャン」と書かれ、その水を飲むと、長生きする、将軍のような力を持てる、女性が飲めば将軍のような髭が伸びるといった言い伝えがある。影池は奥が長い台形をしているが、正面からは正方形に見えるように作られている。

日本のお寺との違いは、お釈迦様の顔と、鐘の形。日本では高い位置から吊るすが、韓国では、人の足の位置に届くような高さで吊るされていた。音色も違い、韓国のものは、近くで聴くと騒音のようだが、2 キロほど離れると、とても良い音色に聞こえるという。

清平寺が臨む昭陽湖は、貯水量 29 億トン（ソウル市民の 6 年分の使用量に相当）を誇る昭陽ダム建設の際に生じた広大な湖で、面積は 144 平方キロメートルに及ぶそうだ。

（小松市教育委員会学校教育課 指導主事 東口　幸央）

清平寺

## 雉岳山国立公園（B グループ）
## 8 月 27 日

**特色：韓半島中部地方、内陸山間部に位置する雉岳山（チアクサン）は、1984 年に 16 番目の国立公園に指定された。毘盧峰（1288m）が最高峰。雉岳山には 821 種の植物が報告されており、モンゴリナラとコナラなど天然林へと変化しつつある。動物としては絶滅危惧種のモモンガ、クロアカコウモリなどの 34 種を含む計 2,646 種**

**が棲息する、自然の宝庫である。高くて険しいことで有名な山である雉岳山は山並みが雄壮で、ここ数年、韓国では山岳ブームの影響から多くの人が訪れる。昔は、モミジが美しいことから赤岳山と呼ばれていたが、「キジの恩返し」の伝説から雉岳山に呼び方が代わった。**

雉岳山には昔から寺が多くあり、現在は亀龍寺をはじめ8カ所が残っている。亀龍寺は新羅の文武王（在位661～681）の時代に義湘（625～702）が建てた古い寺で、大雄殿（地方有形文化財24号）があり、周囲には亀龍滝、亀岩、虎岩、竜岩などがある。亀龍滝には樹齢数百年の松（金剛松）が生い茂っている、金剛松は、材質が堅いことから、宮殿などの建材として利用される。そのため、山での伐木が禁止されている。今回の研修では、亀龍寺までの0.9キロメートルを、自然観察ガイドの説明を受けながら視察した。途中、ルーペを使った苔の観察などの自然観察プログラムのいくつかを体験した。亀龍寺までのルートは涼しく、渓谷を眺めながらのハイキングであった。

※参考：「キジの恩返し」伝説

若者が旅をしているとき、大蛇にねらわれていた雉（キジ）を助けた。若者は、旅の途中あばら屋に泊まった。その家には女性が住んでいたが、その女性は実は昼に殺された大蛇の妻であった。女性は大蛇となり若者を締め付けた。大蛇は朝になるまでに鐘が3回なれば助けると言った。若者が途方に暮れていると、若者が昼間助けた雉が自分の体を鐘にたたきつけて鐘を3回鳴らし、若者を助けた。若者が涙ながらにお礼を言うと、血で真っ赤に染まっていた雉は、光に包まれ、光の中へ飛び立っていった。

（奈良市教育委員会事務局学校教育課　課長補佐　毛利　康人）

苔の観察

グループプログラムレビュー会議

報告会

A グループの参加者・スタッフ

B グループの参加者・スタッフ

# 5. 成果

## Ａグループ

### 参加動機と印象的だったこと

**会坂　友子**

今回のプログラムは公募で参加したが、希望した理由は主に２つあった。１つは、韓国の学校施設等を見学し、教育事情を知り、理解を深めることであった。また、韓国の方々と直接触れ合うことで、文化交流を図りたいということであった。２つ目に、2010 年の中国の招へいプログラムに参加し、同じアジアの中でも韓国ではどのような現状なのか知りたいと思ったからである。きっかけは個人で、韓国の釜山・慶州・ソウルを訪ねたときである。特に、慶州の仏国寺・石窟庵・大陵苑・瞻星台・国立慶州博物館などは古都奈良を思わせる雰囲気で、良洞民族マウルは、中国・貴陽市烏当区偏坡九年生学校とその周辺の風景にとても似ていたので、韓国の学校はどんな様子だろうかと思ったのである。また、ソウルの国立中央博物館では、フランスから戻ってきた「儀軌（ぎき：政府の正式の日記）」の展示を見学した際、各国立博物館では入場無料で、文化に対して意識が高いように感じ、伝統的な文化や現在の文化についても知りたくなったからだ。

韓国では、高校進学の選抜がないことや給食事情など詳しくはなかったので、新しく知ることも多かった。実際、小・中・高校、忠清北道教育庁を訪ね、校舎見学や教職員の交流会を通じて、直に学校現場や授業の様子など理解を深めることができた。また、KNCU での「韓国教育の最新改革動向」では、自由学期制の講話を聴き、取組みへの期待と実際は学校ごとに課題がでてくるのでは？と感じた。個人的なところでは、明洞のナンタ劇場がユネスコのビルだったと知らなかったので、入り口を入るときにはじっくりと看板を見てしまった。

今回、特に、印象的だったことを順不同にあげる。

①ICT 設備が教室に常設され、日常的に授業で活用されていたこと

50 インチ程の大型 TV と実物投影・PC の活用、教卓と PC が一体化した施設等を日常的に使用できるような授業環境はさすが韓国だと感心した。

②小学校・中学校での給食無償化

食堂での給食はクラスごとに引率されていた（牛乳は、朝、教室で配布）。

③各学校等での訪問歓迎の児童・生徒による出し物と先生方のおもてなし

どの学校でも、生徒が正装やユニフォーム姿で、演奏や実演、学校全体で歓迎してくれたこと。（合唱、バイオリンとフルート演奏、テコンドーやシルム（韓国相撲）の実演や、控室などでの心配りに対し外部からの訪問も多いのだろうと感じた。）

④忠清北道教育庁（清州市）

教育面や体育での優秀な成績を収めている忠北教育の取組み紹介 VTR（日本語を始め各国のナレーションで用意）を見て、広報面でも教育庁の意識の高さを実感した。見学先同行も含め、奨学官の方々の歓迎の気持ちがあらゆる場面で伝わってきた。

⑤各地域での文化施設等を訪ねて

ハングル文字が生まれるまでは漢字文化の国だと実感。古い資料や建物には漢字も多く、我々にとっては理解しやすい。「漢字（Chinese）」の授業があり、ホームビジットのお宅にも漢字練習のポスターや漢字で書かれた表紙の本があったのは興味深かった。

清州で宿泊したホテルのエレベーターは、清州古印刷博物館で 1377 年活版印刷された「直指（JINKI＝白雲和尚抄録仏祖直指心体要節）」のデザインだったことをあとで確認（金属活字を使った印刷物の中で現存する最古の本より）。

### 「同じ時を生きる人」
### ～仲間としての韓国人～

**秋山　満代**

まず、韓国の教育について知ることが出来た成果について報告したい。今回、ウォンピョン小学校、ソウル大学校師範大学附属女子中学校、サンダン高等学校を学校訪問させていただいて、韓国の教育事

情が理解できた。

第一に、小学校の段階から英語教育に力を入れている点である。残念ながら、ハングル文字も日本語も国際的には対応出来ない言語であるため、英語が必須となる。そのための努力は日本も韓国も共通にある。

第二に、教育に高いICT技術を持つということである。教室には電子黒板や大型スクリーンが設置されており、またそれらを韓国の教員達は日常的に使いこなしていた。技術の高さと、それを裏付ける教材研究の熱心さなど、私達日本人教員には多くの学ぶべき点があった。

第三に、生徒達の礼儀正しさである。どの学校を訪れても、生徒達は立ち止まって、きちんと手を前に組み、お辞儀をして挨拶をしてくれた。また先生に対する尊敬の念も強い。儒教精神が奥深く流れているのを感じた。

第四に、大学受験の過熱ぶりである。高校の放課後の特別授業は夜10時まで実施される。それが終わって更に塾へ行く生徒がいると聞いて、韓国の教育改革が「ゆとり教育」へとシフトしていく理由が理解できるように思えた。

次に、韓国の人々との交流について書きたい。決して長い時間ではなかったが、貴重な体験をさせていただき、韓国の方々の温かさや優しさに触れて感動したことは、今回のプログラムの最大の成果だった。ソウル探訪でご一緒した韓国の先生方や通訳の若者、ホームビジットの校長先生ご夫婦は、本当に親切で誠実で、「同じ時を生きる人」であると感じた。国としての文化や歴史はあるけれども、我々はそれを乗り越えて、共に手を携えて歩まなければならない。

最後に、私がESDで取り上げて学習している「水」のことについて述べたい。今回は残念ながら、簡単な韓国の水事情の情報しか得ることができなかった。話を聞いたところによると、ソウルの一般の家庭では、水道水は煮沸してから飲み、そのまま飲むことはないそうである。学校では生活水と飲料水は別にされており、飲料水は浄水器の水を使用している。今後、水については、韓国でも重要な課題の一つになることが予想される。

---

## 韓国の真の姿を伝えたい

**猪股 豪**

今回の私の韓国訪問の目的は、歴史認識の違いや竹島問題を起因とする国家レベルの冷え切った日韓関係を少しでも改善したい（大げさかもしれないが）と考え、韓国でのホームビジットや模擬授業、生徒との交流の中で個人レベルでの心と心の交流を行い、それを日本の学校に持ち帰り韓国の良さを生徒たちに伝えることであった。

今回の訪問中、日韓教員ソウル探訪で訪れた「西大門刑務所」やサンダン高校にあった「全国独島（竹島）作文コンクール」、また、ホームビジット先で竹島問題について抗議された先生もいたことなど、確かに「日本嫌いの韓国人」というステレオタイプ的な場面に出くわす場面もあったことは事実である。しかし、滞在中に接したほとんどの韓国の方は日本人である私たちに親切であった。百聞は一見に如かず。今回の訪問で韓国人の優しさに触れることができたことは、大きな成果の一つである。

「交流」をテーマとした今回のプログラム参加において最大の成果は、『出会い』であった。日韓教員ソウル探訪で担当していただいた先生方や通訳の学生は、とても親切にそして楽しくソウル市内をご案内してくださり、地元民が通うディープなビビンパ屋で親交を深め、楽しいひとときを過ごすことができた。彼らとの交流を通して、恥ずかしながら私の中にもあった韓国人に対する先入観が一掃され、韓国のことが一段と好きになった。

また、ホームビジット先の日本語教師ヨ ハヨン先生と出会えたことは、日韓の交流活動を推進していきたいと考えている中での最大の成果であった。訪日経験が豊富で日本語が堪能なヨ先生は、勤務校である清原高校をご案内してくださり、彼女が担当する日本語クラスと私の勤務校との間での交流授業を行うことで意気投合した。清原高校への訪問だけでなく、喫茶店で優しい旦那さんとも一緒に食べたパッピンス（かき氷）やレストランでの夕食、自宅であるアパートへの訪問などを通して、彼女と旦那さんの人柄にも惹かれた。正味5時間程度の交流ではあったが、韓国の風習や文化を知ることのできる充実した時間であった。今後は彼女とEメールを通して交流を行っていき、交流授業の実践に向けてアイデアを出し合っていきたいと思う。

そして、Aグループの先生方々との出会いも大きな成果の一つであった。海外経験が豊富でバイタリティにあふれ、そして誰ひとり同じような考えを持つ人はなく、とても個性的でエネルギッシュな先生方

に囲まれ、私も今後の教員生活をもっともっと充実させたものにしていかなければならないと大きく触発された。また、小中高と校種の違った先生方と活動を共にできたことで、小・中学校教諭の体験学習に長けた様子などから高校教諭としての私に足りない部分を学ぶことができた。文部科学省の栗山和大氏からは、謙虚さの中にも国の教育を背負う自信が感じられ、とても頼もしく（決して上から目線ではありません）、日程を重ねるごとに尊敬の念を抱くようになっていった。

今回のプログラムに参加したことで、緊張が続く国家レベルでの関係とは異なり、個人レベルでは日本人に対して韓国人は友好的であるという現状を知ることができ、韓国に対するプラスのイメージを持って帰国することができた。今後は、ヨ先生と交流を続け、日本の間違ったステレオタイプを持つ生徒たちに、韓国の真の姿を伝えていきたいと考えている。

---

## 見習うべき韓国の英語教育

**鎌田　彰**

「近くて遠い国：韓国」のイメージが先行する日韓関係だが、今回の研修を通じて「本当に近くて近い国」に成りつつある感触を持って帰国の途につけたことを、まず関係各位に感謝したい。

私がこのプログラムに参加した大きな目的は、教育を通じてお互いの文化を尊重し理解し、次のステップに繋げることであった。その点から目的に合致したものは、上黨（サンダン）高等学校の日本文化授業である。共学でありながら、クラスが男女別であるので、やや戸惑いを感じていたが、授業を始めた瞬間、2年8組（男子クラス）の生徒諸君の学びの姿勢や熱気に授業の進行を助けられ、順調に終了できた。

授業内容は、学校紹介で、本校（千葉県立流山おおたかの森高校）が行っている行事中心に構成されたもので、生徒の反応は、運動会や文化祭等共通するものがあり、親近感を持って終始見てくれた。次に日本語と韓国語が共通する言葉のプレゼンであった。この目的は絵（写真）を基に、日本語を私が発音し、韓国語を生徒が発音する形で30個ほど行った。生徒達も一斉に発音してくれ、言葉の持つ魅力が織りなす熱気あふれるものになった。そして生徒からの質問（東日本大震災の今の復興状況、日本サッカー、日本での韓国スターのこと、日本の食べ物について）があり、熱心に聞いてくれて日本に対する関心の高さを感じることができた。

最後に現在NHKBSで放映されている韓国ドラマ「馬医」をヒントに、回転馬の折り紙を行った。男子クラスということでやや心配があったが、折り方のプリントを用意したためどうにか全員完成し、折り紙の馬を回転して立たせる競争を行った。みんな真剣に1分間の競技に真剣に取組み、最高7回成功させた生徒が1位となった。100円ショップで買ったおもちゃの金メダルや銀メダルを商品として与えた。授業をさせていただいたこの貴重な体験は、教員生活で一番忘れられないものとなった。

次に韓国の英語教育事情について、述べさせていただきたい。

上黨高等学校での英語授業を見せていただき、電子黒板を活用して、効率的且つスピーディーな授業展開ができていた。韓国の英語教育は、小学校から教科として実用的な英会話中心の教育を行っていて、英語を手段として考える教育を行っている。小学校からの英語教育が始まって16年になり、成果は確実に上がっている。垣坪（ウォンピョン）小学校、ソウル大学校師範大学附属女子中学校、Cheongju English Center、CBFLISとどの学校・施設においても、実用的な英語を意識して徹底的に教育を行っているところが、日本と違った面であろう。特にALT（英語指導助手）としてネイティブを雇っているだけでなく、アメリカ・カナダ等の英語を母語とする国に生まれ育った韓国系移民を採用して、ネイティブ不足を埋めている。日本と同じ大学受験を中心に高校教育が進められている問題点があるにせよ、国家レベルで英語の大学入試を改革し、クオリティの高い4技能型の資格試験に統一することで、韓国の大学受験において、L(リスニング)、R(リーディング)、S(スピーキング)、W(ライティング)の4技能を万遍なく試す統一試験「NEAT」が導入されたことで、高校生の英語能力を飛躍的に伸ばしているし、また複数回受験できるようにしている。更に課外での英語教育やPC・インターネットの家庭での経済的な負担に補助等を与えたりして英語学習環境を後押している。また、近年は韓国の教育制度を嫌い、子弟に早期英語教育を受けさせるために移民する「教育移民」も増加している。このような韓国社会の徹底した教育熱には、驚かざるを得ない。日本も高校での英語教育を韓国レベルまで改革を行うことで、今後の日本

人の英語運用能力を高めていく努力が必要であろう。そのためには韓国の英語教育をモデルとして早急に改革を行うことが大切である。

## 歴史・異文化理解教育の重要性

**河内　節子**

本プログラムのメインテーマであるESDについては、勤務校で特に取組みをしているわけではなく、今回初めて聞く言葉であった。しかし、さまざまな場面で研修を受ける中、特に国際交流や異文化理解に関しては、勤務校での日常の取組みや自分自身の日頃の興味関心と通じるものであった。今回初めての韓国訪問を、このプログラムによって実現できたことは、自分にとって大きな収穫であった。

まず、観光旅行とは異なり、韓国の現地の学校を見学できたことである。充実した教育施設は目を見張るものがあり、ごく普通にICT機器を使って日常の授業ができる環境には本当に驚き、うらやましく感じた。また、韓国の学生がみな礼儀正しく、訪問者の我々にも気持ちよく挨拶をしてくれる姿に、教師と生徒の間の良い伝統が残っていると感じた。

2点目は、現地の先生方やKNCUのスタッフの方々とお話しする機会がたくさん持てたことである。ソウル探訪の際、西大門の刑務所歴史館を見学した。占領時代の日韓の関係をダイレクトに感じられるところであり、日本人として複雑な思いを抱きながら見学した。多くの子どもたちが見学に訪れ、中学生が課題研究のためにインタビューを行うなど、自分たちの歴史を学びに来ている姿が印象的であった。また、案内していただいたジョン先生が、「私はここへ来ると寂しくなります。やはり心が重くなります。」とおっしゃっており、深く心に残った。

歴史認識問題については、ことあるごとに日韓の相互の感情悪化、などと報道されるが、日本人がもっと歴史を直視し、きちんと勉強しなければならないこと、そして先方の思いを理解することがやはり大事であり、そのための歴史教育の重要性を改めて認識した。今後の教育活動に、まず活かしていかなければならないと思う。

また、今回いろいろお話しできた韓国の方々は、日本に携わることが多い親日的な方であったとは思うが、歴史問題などについても、日本を批判するような発言はなく、また、町を散策中もお店に入った時も、日本人であるためにいやな思いをすることは全くなく、反対に親切にされることも多かった。

政府間の関係悪化などマスコミでの報道とは違う、個人と個人との交流がさまざまなレベルで実現できれば、両国の国同士の関係ももっと建設的な方向へ向かうことができると思う。そのために、学校現場での異文化理解、交流をますます積極的に行っていきたいと考えている。

3点目は、食文化をはじめ、韓国の文化の豊かさを経験できたことである。朝鮮半島と日本は、似ている点も多いが異なる点も多く、韓国ならではの歴史・文化の豊かさがある。毎回の食事で味わった食文化、伝統家屋の美しさ、個人的に訪れた陶磁器店で見た焼き物の繊細さなど伝統に基づいた文化のみならず、最先端のICTや海外進出著しい芸能分野の活躍など現代の韓国の優れた文化を理解しすることで、偏見のない良好な関係を築くことができると考えている。

これからの日本人は、否応なしに世界とのかかわりを持つ機会が多くなると考えられるが、その際には相手の文化・歴史・価値観をきちんと理解、尊重することができる態度がまず必要であると思う。そのため、広い視野に立った歴史教育、異文化理解教育を行い、真の国際交流ができる人材を育てたいと考えている。

## 先進的な韓国の教育環境からの学び

**風張　敬**

本プログラム参加にあたり、「韓国の教育事情、ICT活用の授業や外国語教育などをどのように推進しているのか」「ESDやEIU（国際理解教育）をどのように行っているのか」ということを主に学ぼうと考えていた。

韓国の教育事情に関しては、ホームビジットやソウル探訪での現地の教員の方との交流や様々な校種の授業参観や機関の話などを聞くことにより、深く学ぶことができた。参加前は韓国の受験競争のイメージしかなかった自分にとって、大学への厳しい受験競争の緩和、生徒や保護者の大きな負担の軽減、キャリア教育の拡大、「創意」的な人材の育成などの課題に対して、「夢」と「才能」を育てる幸せ教育を推進し、学習環境の整備など教育への投資をさらに拡大しているという最近の韓国の教育の動きについて学べたのは大きな成果であった。

外国語教育では、英語の学習環境や内容の大きな

違いに驚いた。具体的には、韓国人の英語専科の教員が複数名いること、3 年生から 6 年生の各学年に 1 つ英語教室があること、教科書があること。また、授業では ICT を有効に活用し、豊富な内容を扱っていることである。授業時数も小学校 3～4 年は週 2 時間、5～6 年は週 3 時間などの違いもあり、熱心に英語学習を進めていることを肌で実感した。学校の各教室には情報機器が整備され、様々な教科で電子教卓、電子黒板、パソコン、TV などを効果的に活用し、授業を展開している様子を見て、教員の研修の充実や教室の環境整備に力を注いでいる所も学ぶことができた。

ESD の活動に関しては、ソウル大学校師範大学附属女子中学校（ユネスコスクール）の活動がとても参考になった。教科内容を扱ったり、部活動で学校の敷地内に畑や森づくりの活動をしたり、残飯のない日を作ったり、子どもの身近な所で様々な学ぶ仕組みを考えていること。さらに市のエコマイレージという活動を通して地域と連携して教育を行っている具体例を紹介して頂き、とても成果があった。自校で新たに環境や資源の保護につながる活動を考えていく上で参考にしていきたい。

EIU については、外国人と共に参加する文化教室（CCAP）の実施や ASPnet の活動から学ぶことが多かった。ユネスコスクールということから、CCAP に授業を申請することで様々な国の方との交流を行うことができることを知ることができた。1 年間に複数回交流することを通して、子どもたちの国際理解への学習を推進し、興味を喚起することができると感じた。自校はまだユネスコスクールではないため、そのような活動をすぐには行うことはできないが、今回学んだことを活かして活動を考え、今回のプロジェクトでできたつながりをもとに、異文化交流など国際理解教育を推進していければと考える。

プログラムに参加し、1 つ 1 つがとても有意義だったと思う。なかでも、各校種を訪問して、授業参観したり、授業を実践したりして、日韓の教員と教育について話し交流できたことが、とても有意義だったと感じる。韓国を知るとともに、日本について考えるきっかけにもなり学ぶことがとても多く、様々な方と交流することで刺激を受け、自分の視野も広げることができた。まだまだ分からないことも多く、これから活動をどのように実践していくか不安な点もあるが、今回できたつながりを大切に、協力して活動していけるようにしたい。

## 「共に生きる力を培う」交流

**小島 源一郎**

六年前に、前任校で訪問団やホームビジットを受け入れさせていただき、韓国教員との交流を経験することができた。その後、同僚が韓国に行った際の報告を受け、私自身も同じアジアでの教育について学びたいと考えこのプログラムへ参加した。

韓国の教育については、近年 PISA の学力状況調査結果をはじめとして、私にとって興味深いことが多くあり、次のような視点で、実際に学校や教育施設の見学を行った。

① 近年の韓国の教育の成果と現在抱えている課題について

② 国際理解に向けた教育内容について(外国語教育もふくめて)

③ ICT 活用（特にデジタル教科書やタブレット端末を用いた授業）について

④ キャリア教育など

また、教員との交流を通して教育のあり方を共有していければと考えていた。

韓国の教育は、新大統領就任以降「幸せ教育」の実施により、自由学期制度が導入され、これまでの順位優先の成績重視からの脱却を図ろうとしている。現在の韓国の学歴偏重社会と受験戦争の激しさは、日本で知る以上のものであった。実際、高校ではどの生徒に尋ねても「勉強ばかりしている」「学校は楽しくない」「疲弊している」というような言葉が聞かれた。日本の「ゆとり教育」にも似た大きな政策変更を実施するわけであるが、これが成功するかどうかについては注目していきたい。

いずれにしろ、このような教育政策の変更が迅速に行われることは、日本では考えられないことである。地方の教育行政においても同じであり教育に対しての力のかけ方が日本と違ってとても大きいと感じた。

実際に学校を訪問し、教育施設を見学したが、この国の教育にかける力は並々ならぬものがあり、教育に対する積極的な姿勢に大きな刺激を受けた。まず、どの学校も設備が充実している点である。特に ICT 機器についてはどの教室にも完備してあり、非常に使いやすく配備してあった。そして、どの教員も効果的に使いこなしていることにも驚かされた。また、外国語教育では、英語の力が日本と比べもの

にならないくらい進んでいることを実感した。小中高どの学校でも、English room が複数有りしかもICT 機器を含め教室環境のすばらしさに驚いた。さらに、地方都市においても、立派な英語センターがいくつもあり、充実したスタッフと設備のもとで子どもたちが英語を学べることができるのはうらやましい限りである。児童・生徒についても、どの子も熱心に勉強する姿に感心した。また、学校や教員の学力向上に向けた取組みは、熱心できめ細やかなものがあった。それは、学力不振児に対しては、習熟度別を取り入れた取組みが行われていて、基礎学力の引き上げを重視しているところにある。教科学級制高校においては、放課後 10 時まで残って勉強する生徒のために教員も付き合うということであった（ただし、そのことには超過勤務手当が出るとのことである）。

個人的には、奈良を訪問された先生方と再会できたことや、忠清北道教育庁ユチョル先生や KNCU のスタッフとのつながりができたこと、日本からの訪問団の先生方とのつながりをもてたことなどこのプログラムでしか得ることのできない数多くの経験をすることができたことはこれからの私の大きな力になると思う。最後に、グループ長としては頼りないことであったが、無事にプログラムを遂行できたのは、周りの先生方やスタッフに支えられたと感謝している。

柳惠淑さんがおっしゃった「ESD、国際理解教育の重要性がさらに高まっている。そのため、両国の教員が意見を交わすことは『共に生きる力を培う』という点で、とても有意義である。ぜひこの特別な経験を日本の子どもたちに教え、享受してほしい。」を心に、今後の教育推進に邁進していきたい。

---

## 言葉の持つ親近感

**永石　利恵**

日本に帰ってきて 2 週間がたつが、今あらためて有意義であったと思うのは、言葉の重要性を再認識できたことだ。私にとっては初めての訪韓だったが、韓国でこれほど日本語を耳にするとは思っていなかった。そして実際、外国で日本語を聞くとほっとし、一瞬にして心が近づくのを実感した。同行してくださった職員の方々、ホームビジット先の家族、教員交流で通訳を務めてくれた学生、街頭で呼びかける店員、訪問先の中高生など、思った以上に日本語を勉強している韓国人は多い。対して日本で韓国語を話せる人は、少なくとも私の周りにはほとんどいない。韓国の人が日本に来た時には、私が感じたような言葉による心の近づきは少ないのだろうということが、少々残念に思えた。とはいえ私自身、韓国ドラマは好きでも、韓国語を学んでみようと思う動機までには至らない。日本で生活する限りは必要性を感じないからである。これは一般的に英語についても同じ事が言える。島国ニッポンは地続きの国境を持たない。環境的に外国語を学ぶ必要性を感じることなく生活ができてしまうのである。日本で外国語教育が進展せず遅れをとっている大きな原因のひとつであると考えている。そして私の訪韓の一番の課題はこの外国語教育についてであった。

初日の歓迎セレモニーの中で、品田先生が流ちょうな韓国語で、日本の盆踊りについての説明をされた時、韓国の方々がどよめき、感嘆の声をあげた。その嬉しそうな顔は本当に印象的であった。心が一気に近づいたのを肌で感じた。日本人が韓国語を話すことは、想像以上に韓国人の心を惹きつけるのだと思う。日本人が韓国語を話せれば、日韓の距離はぐっと近づくことは間違いないだろう。人と人とが出会い、ふれ合う交流が前提であることはもちろんであるが、さらに一歩踏み込んで親しくなるためには、やはり言葉は欠かせない。韓国の人々の温かさに触れ、真の友情を築きたいと思えた。しかし歴史的な背景もある中で、日本語を話せる韓国の方に日本人が甘えてしまっている間は、私たちの歩み寄りは浅いようにも感じた。

となるとやはり、せめて英語を使えるようになっておくべきなのだという結論になる。実際、訪韓中ほとんどの会話は英語を使用した。私自身が直接韓国の人とふれあい、聞きたいことを聞き、話したいことを話すために、英語は必須だった。英語を使ってコミュニケーションをとれるのは、すなわち英語を話せる韓国人も多いということだ。「言葉」という観点からすれば、日本は韓国に完全に遅れをとっていると感じた。一般庶民レベルでの遅れは、いずれ大きな国力の差になっていくだろう。世界で渡り合うために言葉は欠かせないからである。

訪れた中学校では、私たちひとりひとりに中学生がついて学校案内をし、学校生活について話してくれた。英語を使って臆せずコミュニケーションをとろうとする態度にまず感心した。積極的に自分たちの ESD 活動についても説明してくれ、途中わからな

い言葉は友だちと教えあいながら、実に楽しそうに私たちに接し、語ってくれた。間違いなど気にせず、素直に言葉を発する姿勢が気持ちよかった。これが小学校からの英語教育の成果なのであろう。日本語にしても英語にしても、まずは使ってみる。通じなければそこで方向転換する。通訳を介することなく直接相手に笑顔で歩み寄り、自分の思いを述べる。英語教育というより言語教育の原点を見たように思う。人々の幸せや世界の平和につなげる ESD の発展にも欠かせない要素であろう。日本の ESD 発展のため、外国語教育発展のために何が必要なのかをあらためて考えさせられた。韓国の人々との交流から学び得た一番の成果である。

## 有意義だった文化授業体験

**長谷　圭城**

今回は、国際交流の中でも特に教員同士の交流事業について学びたいという目的を持って参加した。私の勤務校は生徒同士の国際交流プログラムを多く持ち実践しているが、教員同士が交流できる機会は、自由参加の懇親会やわずかな生徒引率の隙間での観光地案内等しかない。今回はこのプログラムに参加できたことで、多彩な交流方法を学ぶことができた。また、教員として文化授業と題した授業を現地の高校で行うことができたことが有意義な体験であった。

私は英語が得意ではなく、ましてや韓国語は挨拶程度を憶えるのにも必死であった。訪韓が決まった後も、日々の校務のなかで準備が不十分であった。その状態で私自身がどのように韓国の先生方と交流できるのか不安であった。韓国初日の歓迎会には、多くの韓国の先生方が参加して下さっていた。韓国の先生にも英語が苦手な方がおられたが、各テーブルには日本語が話せる大学生等（私のテーブルには慶応大学への留学生）が通訳として配置され、はじめてお会いする韓国の先生方ともいろいろな意見交換が出来た。その中には、同プログラムでの来日経験者もおられ、日本滞在の感想を伺うことができたが、皆さんが訪問地での体験を楽しそうに語られ、充実した交流だったことが感じられた。学校訪問では、各学校で質疑応答の時間が確保されており、積極的な意見交換をすることができた。中学から高校への入学方法の違いや大学受験の話、保護者との関係等、多くの質問に率直に答えて頂いた。忙しい中、私たちを案内して頂いた訪問校の先生方の協力的な姿には、本当に感謝している。

今回のプログラムでは、私たちを受け入れようとする関係者の体制が素晴らしかったと感じている。グループ別行動となった後も、22 人の日本人に対して、旅行ガイド 1 名、通訳 2 名、韓国ユネスコスタッフ（日本語可）2 名と十分なサポートがあり、私たちの細かな疑問点や質問にすぐに答えて頂いた。日本側の関係者も含め、韓国側の受け入れて下さった皆さんの義務的ではなく、韓国のことを本当に伝えたいという姿勢に、知識面だけではなく交流現場に必要な気持ちの面からも多くのことを学ぶことができた。

現地で行った文化授業の体験は、非常に有意義なものであった。私は高校 2 年の男子クラスで、コミック（アニメ）と浮世絵についてスライドを使った授業行った。昨年は直前に企画され、サバイバル授業として実施されたと聞いたが、今回は 1 ヶ月前の説明会で授業者が決定した。この 1 ヶ月というのが非常に微妙な時間であり、準備期間としては十分とはいえないが、頭を悩ませる時間には十分すぎた。とはいえ、私たち教員は通常でも授業が一番大切な時間である。その授業で国際交流を考えられたこと、また実際に行う体験ができたことは何よりも得難い時間であった。今後、勤務校に来られる海外の先生にも、是非、文化授業を提案してみたいと考えている。

学校現場でできる国際交流は、時間や予算など多くの制限がある。しかし、教員という同じ教育にたずさわるもの同士が言語や文化の壁を越えて、子供たちの将来について思索をめぐらせる経験は、日韓という 2 国間の関係だけではなく、世界の未来についての思いを通じ合うものにさせるのに十分であった。この交流事業は意義深いものであり、今後も継続されることを強く望む。

## 韓国における ICT の活用法に学ぶ

**根石　雅仁**

もっとも有意義だったのは、小学校、中学校、高校の学校訪問である。どの校種でも ICT の充実、生徒を第一に考えた環境づくりは同じだった。また、子どもたちが教員を敬う姿勢、子どもたちの教育に対する期待と熱心さ、教員の子どもに対する情熱と愛情を肌で感じ取ることができた。さらに、学力不振の子どもに対する支援も国レベルで行われている

ことに感銘を受けると同時に、韓国の教育を受けることで子どもたちに幸せになってもらいたいという願いがあることを理解した。

小学校ではICTを最大限に活用した英語の授業が行われていた。専門的知識を持ったネイティブスピーカーによる無駄の無い授業だった。韓国は日本と同じEFL（英語以外の言語が広く使用されている環境における第二言語としての英語）の環境にある。この環境をいかに打開していくかが重要な課題である。小学校での英語の授業は、教員がすべて英語で教えていた。英語のシャワーを少しでも浴びせようと考えていることが分かった。また、教室環境も英語に関する物が掲示されているなど配慮されており、EFLの環境を打開しようと試みているのが分かった。一方、日本においてはEFLの環境がまだ大きな課題である。日本の小学校の授業ではコミュニケーション能力の素地の育成にあり韓国と目標が異なる。そのため、授業内容と形式が全く違い、小学校の授業でEFLの環境を打開するには難しい。しかし、日本の小学校にもALTが配置されていることも多いため、ALTを上手に活用し、EFLの環境を打開していきたい。

中学校と高校の生徒と英語で会話をする機会があった。小学校の英語授業を受けてきた生徒ならある程度の英会話はできるかと思っていたが、実際はそうではなかった。小学校から中学校、中学校から高校への効果的な連携が取れていないのではないかと思った。そこで、英語を話せるようになるためには校種間の連携がとても大事であるということが分かった。

訪問した学校ではESDを目的とした様々な活動を具体的に知ることができた。ESDの活動が子どもたちに大きな可能性を与えるということに気付いた。自国の文化にとらわれず、視野を広くもち考えることで、より平和な世界を築くことができると感じた。

また、ホームビジットやソウル探訪を通して、韓国の先生方と実際に話をすることで、日本や韓国の教育課題も見えた。韓国においては校種間の連携や学年での児童・生徒に関する情報共有の仕方などについて課題がある。日本においては、教員が授業に専念することができる時間の確保やICTの充実、学習に対する意欲の長期的保持の仕方などが課題である。

今回のプログラムで日本も韓国も教育について非常に関心が高く、熱心な教員が多くいることが分かった。韓国の教育事情だけでなく、我が国の教育事情についても語り合う場ともなり、とても有意義な時間だった。今後も子どもたちのためにESDを通して異文化理解や異文化交流を続けていきたい。

---

## 「つながり」

**西川 りか**

今回のプログラム参加にあたり、私は次の三つのことを目的として臨んだ。①韓国の英語教育の現状を知ること②韓国のESDの取組み内容を知ること③本校と交流可能な学校の開拓である。

①韓国の英語教育に関して感じたことは、子ども達の英語のレベルが非常に高いということと英語を学ぶ環境が整っているということである。5、6先生の授業を見せて頂いたが、どちらのクラスも先生が英語で説明したことを理解し、とても意欲的に活動していた。6年生で過去形を学び、英作文を書けていることにも驚かされた。また、ICTの完備された教室、英語専科の先生がいるということから、韓国では英語教育に非常に力を入れているということがわかった。また、学校だけでなく、自治体でも英語センターを作り、ネイティブスピーカーの指導の下、さまざまな英語体験プログラムを子ども達が無料で学べる施設があることも知った。

②韓国のESDについては、訪問先の各学校で取組み内容を聞くことができた。CCAPプログラムとして、韓国に住む外国人から聞き取りをし、理解しようとする教育や、残りごはんをゼロにする日を週に一回設定する、ライスプロジェクトなどどの学校においても積極的に取り組まれていることがわかった。また本校のESDと重なる活動がたくさんあることも知ることができた。

③交流校の開拓についてであるが、清州（チョンジュ）市の教育庁の先生方が、私達のプログラムに関して本当にいろいろ配慮して下さった。学校間で交流していきたいという話をすると、笑顔で承諾して下さり、日本に帰ってからも連絡を取り合い、韓国と日本の子ども達がつながる取組みを考えていきたい。

次に、私が心に残ったプログラムは二つある。一つ目はホームビジット、二つ目はウォンピョン小学校での日本文化の授業である。ホームビジットでは、自分と同じ小学校教員のお宅を訪問した。食べきれないほどの食事を準備して温かく迎えて下さった。

御夫婦で教師をされていたので、学校現場の悩みを話し合ったり、お互いの学校の子ども達同士で交流する話をしたりとても有意義な時間を過ごすことができた。ウォンピョン小学校では、日本教職員４人で授業をさせて頂いた。子ども達は、とても意欲的に日本の学校生活や文化紹介のプレゼンテーションを見たり、質問したことに答えたりしてくれた。けん玉や新聞紙でかぶとを折るという体験もしたが、次の活動が始まっているのにまだ必死にけん玉をがんばっている男の子を見て、楽しんでくれたことをうれしく思った。

このプログラムを通して、私が得た何よりの成果は、「人とのつながり」である。韓国の先生方だけでなく、八日間共に行動したグループの先生方、ACCU、KNCU のスタッフの方、通訳の方にはいろいろな場面で大変お世話になり心から感謝申し上げたい。今後も、この「つながり」を大切に自分が学んだことを職場や本校の子ども達に伝え、日本と韓国がさらに良い関係を築いていけるような取組みを小学校現場において実践していきたいと思う。

---

## 価値観が大きく変わった体験

**西野　正晃**

第一に、韓国という国、またそこに住む人々への自分自身の思いが 180 度好転した。そしていかに自分がマスコミという情報源だけに影響を受け、偏見を持っていたかを自覚させられたプログラムであった。訪韓前はやはり国家間の関係の影響を受け多少なりともそういった空気を感じることになるのだろうと思っていた。ところがいざ韓国に足を踏み入れてみるとそんな空気は一切感じられなかった。逆にこれほど我々が住む日本という国に興味を持ってくれているのかと本当にうれしくなった。はたして日本の中学生、高校生いや大学生でも韓国語を学ぼうとする学生はどのくらいいるだろうか。特に学校現場を訪問させて頂きそのことを痛切に感じた。こんなにも近い国にこんなにも日本に興味を持ってくれている同世代の学生がいる、このことを現場に戻ってまず日本の学生に伝えなければいけないと感じた。異文化の学生と交流をする機会がこんなに近くにあることを知らないことは残念でならないと思った。

第二にこのプログラム内で私自身にとってもっとも有意義であった内容についてであるが、これは実際に韓国の学生に授業をさせていただいたことだ。授業をすると決まってから、短い時間ではあったが、本当に周到に準備を行ってきた。そして自分自身にも「自分のできる国際交流を」と課題を設定し授業を組み立てた。日本であろうが韓国であろうが生徒は生徒。大好きな子供たちである。その生徒たちの幸せを願った授業は大成功であったと自分は感じている。そして私が今まで生きてきた中で頂いたことのない拍手を生徒たちから頂いた。この拍手を私は生涯忘れることはない。熱心に私の授業に聴き入り、視線を送り、また私もその生徒たちを思い、授業が行えた。言葉では言いあらわせないような幸せな時間を共有した。多くの海外研修また視察プログラムが存在する中で、その国の学生相手に授業ができるようなプログラムはそんなにないと思う。我々はやはり教師であり、どのような交流よりも、目の前に座るであろう子どもたち生徒たちを想像し、周到に準備をした授業でお互いをぶつけあうことが何よりの幸せなのである。その点では本当にこのプログラムは意味のある、意義高いプログラムであると感じた。私が授業を行ったのは訪韓２日目つまり、最初の授業組である。他の先生方の授業は当然参観できなかったが、どの先生も完ぺきな準備をし、授業後もやりきったという表情をされておられた。当然その後の授業をされた先生方もいうまでもない。もちろん生徒たちも。それぞれが充実した時間を過ごし、お互いを認め合える機会を頂けたそのことが本当にこのプログラムの素晴らしさを示していると思う。

第三にこれは蛇足になるかもしれない漠然とした成果になるが、色々な意味で頑張ろうと思えるプログラムであった。日本国内では ACCU のスタッフの方々、また韓国内では KNCU のスタッフの方々の本当に細やかな気配り、心遣い。特に、KNCU のスタッフの方々には何不自由なくプログラムに集中させていただける環境を作っていただいた。その姿におそらく全ての参加者は韓国の方々を大好きになったのではないかと思う。そしてやはり、マスコミの伝える韓国でなく自分たちが見てきた韓国を韓国の方々を子供たちに伝えていくことになるのだと思う。また全国から校種様々に集まった先生方が色々な役割を分担し助け合う事でそういったことの大切さを再認識し、またこれからの継続した交流につながるプログラム期間でもあった。このような点から、活力の湧いてくるプログラムであったと感じている。少しずれるのかもしれないが、こういった成果も実際あったことはまちがいない。

## 日韓の類似点と共通点

**榊　洋史**

日本と韓国の教員が相手国を訪問し、交流を深めることは大変意義深いことである。今回このプログラムに日本教員の一人として参加できたことを大変光栄に感じている。

最初に、韓国の学校を訪問し感じたことは、日本の学校と類似している点が多いと思ったことである。授業の様子や子どもたちの様子を見ていて、日本の学校を訪問しているかのように錯覚する場面さえあった。しかし、詳細に見てみると日本の教育では及ばない進んだ点や、逆に日本の学校教育の良さを再認識できるような部分も感じた。例えば、英語教育については、訪問以前から耳にしていた通り、韓国の学生の英語力、全体のレベルの高さに感心した。小学校の訪問で見た英語の授業では母国語を全く使わず英語の授業が行われていたことに驚いた。聞き取る力、話す力、共に優れているようであった。また、ICT教育においても韓国は進んでいると感じた。設備の面ではほとんどの教室に電子黒板が設置されていたことや、正面の教卓にパソコンが常備されており、そのパソコンと大型テレビを使って授業を進めていた。また、ヘッドホンマイクを使い電子黒板で説明している教師の姿など今の日本の教室ではなかなか見られない。

次に、韓国の教育事情で心に留まったことは、日本が「ゆとり教育」を振り返り、教育課程を見直してきた最中、韓国では中学校での「自由学期制」の導入が考えられていることである。「自由学期制」とは中学校の１学期間、生徒たちが中間・期末考査などテストから解放され生徒主導の参加型教育を実施することであり、その目的の背景には、入試と競争中心の教育からの脱皮があった。韓国での激しい受験戦争の現状を物語っている。教育を通じて学歴・キャリアよりは創意性・品性がより重要であるという社会的なコンセンサスを拡散させることの重要性は今の日本でも全く同じであると感じた。

昨年度実施された韓国教職員招へいプログラムにおいてお二人の韓国の先生方のホームビジットをホストファミリーとして受け入れた。その時の韓国の先生方の優しくフレンドリーな人柄に感心したことがとても印象に残っている。今回、自分が韓国を訪れることで韓国の人たちが本当に日本人に対し優しく温かであるのかを実際体験することも、韓国訪問の大きな目的の一つであった。

今回のプログラムの中で最も感動した体験がホームビジットである。韓国の中学校で日本語を教えている女性の方がホストファミリーであった。全て日本語で会話することができ安堵のもと訪問が始まり、最初に田舎の祖母の家に案内され韓国の伝統的なもてなしを受けることができた。親戚や近隣に住まれている方々も集まってこられ、大勢から歓迎を受け、誰もが本当に優しく親切だと感じた。その後、市場や飲食店をまわり楽しいひとときを過ごすことができた。最上のもてなしに心から感謝している。

最後に今回のプログラム参加に対し思うことは、韓国の異文化を実際に見聞きし、触れ、感じたことで韓国に対する親愛の気持ちがより強くなった。相手国をリスペクトするこのことがESDを進める上でも重要になってくるのだと思う。そしてこのプログラムで学んだ全てのことを生かし本校のESDを発展させたい。

## お互いの長所を認め合うことから

**坂下　和之**

本プログラムに参加する前は、韓国は近くて遠い国であるという思いがあった。私の住んでいる小松市は小松空港からソウルまで飛行機で２時間で行くことができる。また、韓国歴史ドラマを楽しく視聴していた。しかし、これまで私はニュースで伝えられる日韓の問題から韓国を身近に感じることができなかった。そこで、今回の日本教職員韓国招へいプログラム参加の機会を与えていただき、韓国の最新の教育政策を学校や教育施設訪問を通じて直接学び、これから必要となる学力とはどのようなものか、韓国では児童にどのような力を身につけさせているのか、教育の課題は何か等、韓国の教職員・児童生徒との交流や情報交換を通して、学びたいと考えた。さらに、これから国際社会で活躍する人材を育成するための国際理解教育や持続発展教育について研修したいと考えて参加した。

本プログラムで最も有意義であった内容は、垣坪小学校で授業をしたことである。Aグループの日本の小学校教員全員で協力して授業を作り上げた。日本と韓国の食文化やスポーツ、行事の共通点や相違点を見つけることを通して、それぞれの国の良さを認め合うことを子どもたちに伝えることを目的に授

業を行った。私は日本の国技である相撲を紹介した。垣坪初等学校はシルム（韓国式相撲）が盛んな学校であり、相撲について関心をもって聞いてくれた。相撲とシルムの違いを日本の先生に関取役になっていただき、実際に相撲をとって伝えた。子どもたちの歓声や笑顔を見ると、韓国の子どもたちの素直さや優しさにふれることができた。相撲もシルムも違いはあるがそれぞれ素晴らしいスポーツであり、互いに尊重していくことを伝えた。日本の教職員で協力して授業を作り上げたことで、これまで知らなかった日韓の共通点や相違点を学ぶことができ、何よりも授業という目標をもって交流を深めることができた。

さらに、ホームビジットや日韓教員ソウル探訪において、韓国の教員と現場における多忙さや保護者対応、学力向上等の様々な課題について直接意見交換できたことは有意義であった。互いに課題を抱えながらも、日々子どもたちのために努力していることは同じであると感じた。

韓国では国が主導して教育施設の充実や学力を身につけさせるための具体的な方策を行っていることが伝わってきた。例えば、各教室に IT が設置されている。冷暖房と天井には扇風機が設置されて集中して学習に取り組めるようになっている。基礎学力が身についていない児童に対しては、放課後、国が手当を支給して教師が指導を行っている。学力優秀校の教師には特別な手当が出る等である。

日本では教師個人の献身的な働きによるところが大きい。学力を身につけさせるためには韓国のように教員へのサポートもこれから必要ではないかと感じた。但し、授業における指導法は、日本では思考力・判断力・表現力等の活用力を身につけさせるために様々な授業形態で授業を行い、児童が主体的に学び合う授業改善が行われているのに対して、韓国では教師主導の授業形態が多く見られた。韓国の学校訪問を通じて伝統を大切にし、自校に誇りをもつ教育を行っていることや教師はプロとして自信をもって授業を行い、生徒も教師を尊敬していると感じた。

国際社会で活躍する人材を育成するためには、英語教育の必要性を痛感した。私自身、語学が苦手で韓国の方々と交流したいという思いはあるが言葉で出てこなく、コミュニケーションをとることができなかった。今回参加された先生方は、英語や韓国語で積極的にコミュニケーションを図っている姿を見て、素晴らしいと感じると同時に羨ましかった。授業においても、韓国では英語教育が進んでおり、小学校においても英語専科の教員を配置する等、国を上げて英語教育に力を入れていることが伝わってきた。また、今回特別に見せていただいた英語村の施設では実際の社会の中で英語を使えるスキルを身につけられるように様々な部屋があった。日本においても、国際社会で活躍する日本人を育成するためにも、実際に使える英語教育が必要であることを感じた。教員のスキルアップを図り、小学校においても、楽しく無理なく英語が学べる環境整備や外国の方と交流する機会を通して語学の必要性を感じられるようにしていく必要があると感じた。

このように、日本と韓国の教員が実際に現地を訪問して交流を図ることで、これまで近くて遠い国と感じていた両国の距離が確実に縮まることができた。韓国で出会った方々は親切で明るく生き生きとされていた。私の勤務する安宅小学校は小松空港が校区にあり、安宅の関や安宅祭り等歴史や伝統がある。1月には韓国の先生方が小松市を訪問される。この機会に教師間・児童間の交流を機会として、国際理解教育を推進していきたい。

---

## 変わらぬ韓国の「温かさ」

**品田　大介**

有意義だと感じた内容は多岐に渡る。8 日間全てが有意義であった。プログラムを通した活動、人々との交流、ふとした街の人との出会い、映画館で観た「雪国列車」、子どもたちが話す将来の夢…。本プログラムに参加するにあたり、「私が留学した 15 年前との韓国の変化」、「その変化に伴う日本と韓国の関係の変化」、「韓国というフィルターを通した日本の再認識」といった点を課題として設定した。その中には、中国大連日本人学校への派遣による私自身の認識の変化も含めながら、本プログラムを通して、「今後どのように私が韓国と関わっていくことができるか」、「ESD への理解を深めたい」そんな思いが強くあった。オリエンテーションから出発までの 1 ヶ月間は、私に久しぶりに訪れた韓国ブームだった。

仁川国際空港ができたことを始めとして、この 15 年間での韓国の変化は、とても大きいと感じた。一方で、日本も同じように 15 年間の変化は大きく、「15 年」という月日を実感した。そのなかでも、韓国の方の「温かさ」は変わることなく、本プログラムを

通して、変わらない韓国を感じることができた。ソウル探訪では、街行く人に「この辺りで美味しい店はどこ？」、「美味しいかき氷の店はない？」と尋ね、「全部同じかな」「よく知らなくて…」と返ってくる言葉にも、笑顔で突き進む姿に懐かしさを感じた。街の様子も大きく変わり、私が友達と待ち合わせによく利用していたファーストフード店はなくなっていた。しかし、今回の訪問を通して、新しい思い出が数多くできた。

私は15年前、ユネスコの方にお手伝いいただき、ソウルの小学校4年生に「日本のイメージ」という授業をさせていただいた。まだ学生だった私が、2時間の授業を計画し、子どもたちと触れ合うことができたことは、今でもとてもよい思い出となっている。当時は日本で韓国観光公社が制作したCMが流れ始め、SES（芸能グループ名）の日本デビューが決まり、まだ日本でも韓国でもお互いの文化のことをよく知らない頃であった。あれから15年、院坪小学校でも、ソウル大附属女子中学校でも、上黨高等学校でも韓国の子どもたちは、日本のことをよく知っていて、日本の小学生も中学生も高校生も韓国のことをよく知っている。「近くて遠い国」と言われた2つの国が、「近くて近い国」へ変わったと感じた。授業をさせていただいた院坪小学校では、3人の先生方と協力し、日本の子どもたちの様子、行事、文化について韓国の子どもたちに伝えることができた。子どもたちが目を輝かせながら耳を傾ける様子に感動し、鯉のぼりと一緒に撮影した記念写真は、私の宝物となり、授業の最後にいただいた子どもたちからの質問は、今後の大きな宿題となった。

本プログラムを通して、たくさんの先生方と接し、会話し、交流することができた。韓国というフィルターを通して、教育現場へのICT機器の導入、小学校英語の実践、教員と子どもたちとの距離感、教育現場における課題等、考えるよい機会となった。たくさんの方にお世話になった。たくさんのことを教えていただいた。報告会でお伝えした「옷깃만 스쳐도 인연（袖振り合うも多生の縁）」。きっと大きな縁を様々な形で結ぶことができたように思う。たくさんの方に感謝申し上げたい。ありがとうございました。

---

## 韓国の特別支援学級に学ぶこと

**髙瀬　浩司**

今年1月、韓国の先生方のプログラムの受け入れ校の一つとして、本校でお迎えすることになった。昨年度開校したばかりの新設校の特別支援学校にとって、韓国の先生方が訪問されるということは、画期的な出来事であった。その交流が縁となり、今回のプログラムに参加させていただくことになったが、まず思ったことは、韓国の教育への関心がこれまで自分自身にあったかという自問自答であった。これまでの教師人生においては、日本国内における実践をモデルとして研究に取り組んできた。特別支援学校を中心として携わり、特別支援教育の歴史的背景や先進的な教育実践に触れていく中で、我が国の特別支援教育の質は高いと実際のところ認識していた。しかし、韓国の特別支援教育に関する文献などを調査すると、学ぶべき事柄が多いことに気づいた。

プログラムに参加するにあたり、自身に課したテーマは、韓国のインクルーシブ教育をはじめとした特別支援教育のあり方である。今世紀初めての国際人権条約である「障害のある人の権利に関する条約」には、我が国は未だ批准していないが、韓国ではすでに批准を済ませている。中でも教育分野においては、インクルーシブ教育の推進とそのあり方が現在の大きな課題である。今回は、垣坪小学校、ソウル大学校師範大學附属女子中学校、上黨高等学校の校種の違う3校を訪問した。特別支援学校は残念ながら拝見することができなかったが、訪問した全ての学校に特別支援学級が設置されていたことから、我が国の特別支援教育について改めて考える機会をいただいた。

日本と韓国の特別支援教育(特殊教育)の比較における重要なポイントは、就学におけるシステムとインクルーシブ教育システムの在り方であった。まず、就学の手続きについての違いである。我が国の特別なニーズのある子どもたちは、市町村教育委員会における就学指導委員会を経て、より適切な教育環境下におかれる。一方、韓国では、子供たちや保護者のニーズをもとに、主体的かつ自己選択的な就学が進められている。特別なニーズのある子供たちの教育を受ける権利が尊重され、地域の学校で学ぶシステムが、当たり前のように構築されていた。我が国では、就学指導委員会制度を廃止し、新たに教育支

援委員会（仮称）を設置し、子供本人・保護者・学校・教育委員会による合意形成のもとで就学先を決定するといったシステムへの転換期にあたる。韓国の就学システムからは、特別なニーズのある子どもたちの教育を受ける権利について、多くのことを学ばせていただいた。

また、韓国の全ての高等学校において特別支援学級が設置されている点は、我が国との大きな相違点であった。高等学校段階における特別なニーズのある生徒たちが、地域で教育を受ける権利を保障する意味でも、後期中等教育における特別支援教育は喫緊の課題である。通常の高等学校でハンディキャップの有無に関わらずインクルーシブな教育を提供するか、または軽度の障害のある生徒達に特化した質の高い教育を提供するか。本校の位置づけは後者であるが、今回学んだ多くのことをもとに、地域における後期中等教育段階のよりよいインクルーシブ教育システムの構築に向けて、特別支援教育に携わる一人として、より一層尽力したいと思う。

「障害のある人の権利に関する条約」に、すでに批准している韓国においては、ハンディキャップのある子供達の人権を尊重した取組みが進められていることを目の当たりにした。我が国も障害者の権利条約の批准の実現に向けて、特別支援教育の在り方を、さらに追求していきたいと考える。限られた時間の中ではあったが、特別なニーズのある子供達の両国の教育環境について、深く考える貴重な経験であった。我が国の特別支援教育を推進する上で、今後も隣国として、韓国の先生方と共に関わりを深めていきたい。地球上における全ての子どもたちの人権を大切にし、ハンディキャップの有無に左右されない共生社会の実現に向けて、今後も韓国の子どもたち、先生方と共に歩んで行けることを願っている。

## 再考させられたESDの在り方

**竹之内　勝**

私はこのプログラムに参加するにあたって、市内のESDの取組みをさらに充実させるための具体例や推進するための体制づくりを学びたいと考えていた。また、今回知り合った韓国と日本の学校、日本の学校同士が、教育活動を通して交流を促進するためのコーディネートができたらと考えていた。結論から言うと、このプログラムは、これからの教育活動に、私自身をさらに奮い立たせる栄養剤となった。

一番の大きな成果は、小・中・高校を貫いたESDの推進プランが浮かんだことだ。

小学校段階では、地域の特性（ライスプロジェクト等）に合わせた取組みを児童全員で行い、学び方を学ぶ。中学校段階では、3年間共通した一つの取組み（キャリア教育等）を生徒全員で行い、その他に１年で完結する一取組みを個人で選択させる。高校では、興味・関心を同じくした仲間が集い、3年間かけて一取組みを行う。

また、体制として、小学校においては、一つの工程を低・中・高学年の三段階に分けた取組みとして完成させられる内容とする。各段階の学年間では、上学年が下学年の（2年生が1年生を、というように）アドバイザーとして、前年度アドバイスされて学んだものをアドバイスしながら再度学ぶといった活動とする。中学校においては、進路指導部の教員がキャリア教育を担当し、3年間共通した取組みを生徒全員が取り組むとともに、他の教員は学年内で2人1組となって、1年間で完結するESDの取組みを開設し、生徒は興味のあるものを選択して3年間で3種の活動をする。高校においては、生徒が組織した団体が中心となって興味のあるESDの取組みグループを開設し、学年を取り払って3年間で一つの活動を行い、教員は2人1組で顧問となる。

このプログラムを通して、韓国の学校訪問や先生方との交流からヒントをいただき、いろいろなアイデアが浮かんできた。このアイデアをどのように実現させていくか、これからが本番だ。そのためにも、今回知り合った国内の学校とつながりながら、実際に子供同士も交流させ、ESDを推進していきたい。そして、韓国の子供とも交流させ、国外へ視野を広げる活動へと発展させたい。知識を知恵に変えられる子供を育て、答えのない課題に取り組ませ、2050年の大人づくりを邁進していく。

## 国際理解教育の大切さ

**谷口　喜美**

今回のプログラムを通して、異文化を学ぶことは、子どもにとってはもちろん、大人にとっても大変刺激的で興味深いことであり、同時に重要なことだと強く感じた。

そう感じることができたのは、垣坪初等学校での授業体験があったからだ。昨年度、韓国教職員招へいプログラムで韓国の教職員のみなさんが来校して下

さった際、子どもたちは大はしゃぎで先生方に関わろうとしていた。私自身、担任していた6年生の子どもたちがここまで盛り上がるとは思っておらず、正直驚いたのを今でも覚えている。しかし今回、韓国で同じ6年生と授業する貴重な機会をいただき、実際に授業をして、子どもたちが目を輝かせながら映像に見入ったり、喜んで体験活動をしたりする姿に触れ、本校の児童が興味津々だった理由が分かったような気がした。大人はどうしても自分たちの身の回りに固執しがちだが、子どもがワクワクしながら知らない世界に飛び込んでいく姿に、小さい頃から異文化に触れることの大切さを改めて感じた。そして、それは私自身にも言えることで、今回の韓国訪問を通して、異文化に触れることがこれほどまでに興味深いことなのだと身をもって実感することができた。

それに加え、教育を通じて子どもをより良く育てようとする韓国の教職員のみなさんと熱心な態度の子どもたち、充実した設備には驚かされる点が非常に多くあった。特に印象的だったのは、ソウル大学師範大学附属女子中学校です。子どもが十分に学べるよう、子どもの思考が生かせるよう、整えられた設備はうらやましくさえ思う程だった。特に、数学科の教室は大画面のモニターが設置されており、子どもの思考を全員で共有できる環境が整っていることは大変魅力的だった。受験戦争が過熱し、社会問題になっているとは言え、大人が子どもをより良く育てたいと願い、子どもがそれに応えようと熱心に学ぶのはいつの時代、どこの国でも変わらず、双方のこのような想いが韓国の高学力を支えているのだと感じた。通訳さんと話をしていて、韓国の歴史上の尊敬する人物を挙げる、という話題になった時、何のためらいもなくスラスラと挙げることができていた姿に、私だったら相当考えないと思い浮かばないだろう、とただ驚くばかりだったが、納得させられた瞬間でもあった。

また、このプログラムでは、韓国の良さはもちろん、日本と韓国の共通点についても多く知ることができた。特に、教育において「自由学期制」は日本のゆとり教育と似ており、これまでの教育制度から転換するきっかけになった校内暴力やいじめ、自殺の多発といった背景にある問題までもが似通っていた。日本はゆとり教育から脱却しつつある今、だからこそ、日韓の教員がより良い策を話し合う機会を持つことの重要性も感じた。

8日間の初めての韓国訪問は、わたしにとって大変実り多いものとなった。韓国の良さに触れたことで、帰国後、季節の移り変わりや日本食のおいしさなど、日本の良さも改めて感じることができたように思う。この貴重な経験をこれからの教師生活に活かして、一人でも多くの子どもが、国際理解を深め、地球規模で物事を考えられるよう、日々の教育活動に取り組んでいきたいと思う。

---

## 「百聞は一見にしかず」

**友部　尚子**

「百聞は一見にしかず」私は今、この言葉を強く実感している。私がこのプログラムに参加するまでの韓国についての知識といえば、日本で見る韓国ドラマやK-POPからで、今までは、韓国の教育についての知識も関心もなかった。しかし、今回のプログラムでの学校視察、文化遺産の見学、韓国の人たちとの交流など、日本にいる時にはできない実体験を通して、韓国への関心と理解を深めることができた。今回のプログラムの内容はどれも有意義なものであったが、特に二点について述べたいと思う。

まず、一つ目は、小学校、中学校、高等学校の校種のちがう学校を訪問し、韓国の教育の様子を肌で感じることができたことである。まず、どの学校も教育環境が素晴らしく整えられていることに驚いた。数学の教室には、数学に関するいろいろな掲示物が掲示されているなど、各教科の特性に合わせた掲示物を教室に掲示することで、生徒の意欲が高められているように感じた。日本の中学校・高等学校は殺風景な教室が多い中、新鮮だった。そして、必ずどの教室にも大型テレビやPCが設置されていて参観した授業の中では積極的に活用されていた。どの先生も授業にICTを有効に活用していることに指導技術の高さを感じた。

小学校の英語の授業では、教室の前面にある大型テレビやスライド式のホワイトボードを活用していた。画面には英語のゲームに使う画面を映したり、写真を映したりして児童に分かりやすく指導する工夫がされていた。韓国と日本の英語学習の違いは、時間数の多さ、専門性のある教師の指導、教室環境の整備、小学校からの「書く力」の育成であるように感じた。韓国の高校生と話した時に英語力の高さを実感し、日本の高校生がこれほど英語を話せるだろうか・・・と思った。これからの国際社会を生き

ていく人材を育てていくためには、日本も韓国の英語学習の実践から学ぶところが多いのではないかと思った。

また、どの学校も学力向上に対する意識が高く、放課後学習等それに対する取組みがなされていた。しかし、高校生が朝から夜10時まで忙しく勉強だけに追われる生活に疑問も感じた。

二つ目は、韓国の人たちとの交流である。今回のプログラムで日韓のたくさんの方々との交流があった。韓国の先生方、児童・生徒、KNCUのスタッフの皆さんとの交流は有意義であった。特に院坪小学校で4年生に授業をさせていただいたことは、一生の宝物になった。一生懸命話を聞き、楽しそうに活動してくれた子供達の姿に感激した。そして、最後に皆で一緒に歌った「こいのぼり」の歌声に胸が熱くなった。授業をするまではとても不安であったが、終わった時には授業をして本当によかったと思った。今回の文化交流授業をきっかけにして、日本のことをよく知らない韓国の子供達が、少しでも日本に興味をもち、もっと知りたいという気持ちになってくれたらうれしく思う。

最後に、このプログラムに参加するに際して、日本でのテレビ報道などから韓国の人たちは、日本人をよく思っていないのではないかと、日本人に対する感情について不安に思っていた。しかし、実際に訪韓し、各学校や施設での私達への温かい歓迎の様子や多くの韓国の方々との交流からその不安は払拭された。もちろん歴史的な背景から日本に対するいろいろな思いはあるであろう。しかし、それ以上に、実際に会って話し合い、交流を盛んにし、違いを認識した上で良い点を学び合うことがより良い友好関係・絆を深めることにつながると確信した。この想いを微力ながらいろいろな人に伝えていきたい。

## 情報化社会と幸福感の関係

**壷井　宏泰**

訪韓前は、反日感情が高まっているとうマスコミ報道を鵜呑みにして多少の不安があったものの、実際に行ってみると出会ったほぼ全員がきわめて親日的であり、不安は全て払拭された。やはり、マスコミ報道だけでは真の情報を得ることは難しく、実際に自分の足を運んで経験することの大切さを改めて実感した。また、マスコミ報道とのギャップを埋めるためにも今後草の根レベルでの日韓交流が非常に大切だと感じた、特に若い世代同志が未来志向で協力・協調していくためには若年層同志の交流をもっと活発にするべきだと確信した。

さて、韓国の教育については、各種学力テストで世界の上位に君臨しているのでどのような教育がなされているのかについて非常に興味があった。実際に行ってみると、高校生のほとんどが夜10時まで学校で勉強し、さらに土曜日や日曜日のプログラムもあることがわかり、好成績の裏側には過度の負担が高校生にも親にもかかっていることが良く分かった。その反省から自由学期制度が導入されようとしているが、日本のゆとり教育の失敗を繰り返すことにならないかという一抹の不安もある。

また、韓国の英語教育については、かなり進んでいることは理解していたものの、実際にその現場を目にすると日本が追いつくためには緊急かつ抜本的な英語教育の改革が必要であると感じた。小学校の英語の授業が全て英語でなされ、簡易スタジオやICTを駆使されて、教材も洗練されているという印象を受けた。日本が見習うべき点は数多く、小学校の英語を担当する教員の研修だけでなく、経済的な支援も必要だと感じた。実際、年配の方々は英語が苦手な人が多く、若い人たちは英語が堪能であり、これは韓国の英語教育の成果であると思う。

さて、私のテーマである「エネルギー消費量と幸せの関係」については、当初私が予想していた通りであった。韓国経済の発達に伴って、エネルギー消費量も増加し、便利で快適な生活を享受できるようになってきた、それを支えるために過度の競争原理が働き、そのしわ寄せが若年層を中心に広がっており、幸福感を得ることができなくなっている。それを打開するために韓国では「自由学期制」が導入されようとしているが、「幸せ」についての価値観が変わらない限り制度の変更だけでは効果はあまり期待できないだろうと感じた。

一人あたりの電力使用量が世界第2位のアメリカと第3位の韓国と第4位の日本が協力して「エネルギー消費量と幸せの関係」プロジェクトに取り組めば、大きなエネルギー削減につながるだけでなく、真の教育改革にもつながり、有意義な成果があげられると確信した。

## 外国語教育の第一義は世界平和への第一歩

**浦西　洋平**

地理的、文化的に近い韓国は、教育の分野でも日本と比較されることが多い。しかし、メディアや教育の研究会で取り上げられる韓国の教育の姿は、あくまで教育実践をテストなどで数値化された「結果」の部分だけを述べたものが多く、そこにたどり着くまでの「プロセス」の中に、教員のどのような思い、苦労、そして試行錯誤があり、また児童、生徒のがんばる姿、課題があるかまでは取り上げられることは多くない。今回参加した韓国政府日本教職員招へいプログラムでは、韓国での国際理解教育や英語教育の取組みがどのような文脈で実施されているのかを知り、またこのプログラムで経験したことを勤務校の生徒達に共有し、国際理解の第一歩になるようにしたいと思い、韓国での一週間を過ごした。

今回の訪韓で最も有意義であったことは、韓国の教育実践や子どもと直に触れ合うことができたことである。特にソウル大学校師範大学附属附設女子中学校への訪問では、「子ども主体の環境づくり」を軸に、生徒の学習状況に応じた習熟度別授業、教科教室制、自習や生徒同士のコミュニケーションの場である「ホームベース」、充実したICT環境など、生徒が学習する機会を最大限に活かす学習環境をいかに整備しているかを視察し、勤務校においてもどのように学習環境を整備すべきかとても有用なヒントをたくさんもらうことができた。また日本文化紹介の授業をしたが、教室に一歩踏み入れた瞬間から全員が笑顔で「こんにちは！よろしくお願いします。」と挨拶をしてくれ、それだけで韓国に来てよかったと本当に思えたほどである。授業開始前に、「英語か日本語のどちらで授業して欲しいですか。」という問いに対しても「英語がメインで日本語も入れてください！」と元気の良い返事が返ってきた。授業内では、ほぼ英語で紹介を行ったにも関わらず、英語に対する高い理解力や表現力を持っており、学力の高さに驚いた。終始積極的かつ熱心に取り組む姿、日本において韓国の文化が人気であることを非常に喜んでくれた姿、またうちわ作りで筆ペンを使って一生懸命漢字やひらがなを書いている姿など、非常に印象的でした。担当教科である英語科として、日本に興味を持ち、また素直で熱心な生徒たちと勤務先の生徒たちが将来、お互いの良さを英語を通じて理解し合えるための英語コミュニケーション能力の育成が必要であると痛感した。

地球全体で抱えている社会的、環境的な問題に対して個々の国の教育機関が連携し合い、そしてこれからの社会を構成していく子どもたちに対し、どのようなことを学ばせ、行動に移し問題解決に取り組むかという点は、世界各国の共通課題である。故に、血の通った国際理解教育はますます重要となっていく。それらを実現するために、普段の教育活動において児童・生徒がそれらの問題に対し解決できるための素地作りを体系的に組み込む必要があると感じた。また自分が担当する英語科として、日本語を一生懸命話そうと頑張っていた附属中学校の生徒の姿をみて、外国語教育の第一義は、世界平和実現の第一歩であると感じた。

## 文化交流授業での衝撃と韓国の食育事情

**山中　淳代**

個人旅行では児童生徒が活動する学校を訪問することは難しく、今回のようなプログラムに参加することは以前からの念願であり、さらに見学するだけではなく、文化交流授業という参加型のプログラムは斬新で貴重な経験となった。このプログラムに参加するきっかけとなったのは、奈良市における世界遺産学習食育部会での唐菓子をテーマにした取組みである。中国から伝えられた共通する食文化でありながら日本と韓国では在り方が違うことに気づいたのは、8年前からの韓国伝統文化大学の学生との交流のお陰である。韓国では「과배기（クゥペギ）」と呼ばれ日常的に食べられているが、日本の「麦縄」は神饌として受け継がれているが一般的に知る人が少ない。本プログラム参加にあたり、韓国の子どもたちに対し「과배기（クゥペギ）」の認知度を調査すること、そして日韓友好の手立てとして、日本文化の紹介という一方的なものではなく、世界で最も似た日韓文化の類似点を再認識することをテーマに設定した。垣坪小学校での文化交流授業は、4人での連携授業のため内容が多く厳選する必要があったが、検討することで精選され、参加者同士の親交も深まり、日韓類似する文化について再確認することができた。完全通訳という方法もあったが、可能な限り韓国語で行うことで親韓の思いが伝わるのではと考え韓国

語で実施する準備をした。事前資料で通訳の方にも内容を検討して頂くことができ、難しい内容については潔く通訳をお願いし、ほかの部分については補足的に韓国語で解説という臨機応変な対応を頂いた。四大名節を重んじる韓国なので、日本以上に行事に対して子どもたちの認識があると考えていたが、日本以上に行事認識が浅く愕然とした。さらに「꽈배기（クヮペギ）」は高速サービスエリアでも出来立てが販売されているなど身近な菓子として健在していたが、市場にあるような伝統的なものは子どもたちの日常とは遠く、スナック菓子タイプなら身近であるようだった。しかし、すべての児童が「꽈배기（クヮペギ）」を知っていて、食べた経験があった。

また、学校訪問と同時に児童生徒たちと韓国の学校給食を一緒に食べることも以前からの願いであったが、今回叶えることができた。校門に「GREEN FOOD ZONE」の看板を掲げ、国策として韓食を基本にした学校給食は、副菜数・野菜分量も多く毎回おいしくいただいた。政治的背景を持ちながらも義務教育での学校給食無償化は望ましい形であると思った。そして、結果的に訪問したすべての学校に栄養教諭が在籍していた。垣坪小学校では短時間ではあるが通訳を介した会話と、全体交流で質疑応答をすることができた。他校では見学、食事の合間に挨拶程度の交流をすることはできたが、専門職として交流する時間が持てなかったのが非常に残念である。小学校では栄養教諭が食事中の児童に食事指導する姿が見受けられたが、中学高校では生徒と接する姿は見受けることが出来なかった。Home Visit の家族から調理補助の業務が多く食育はできていないと聞いた。中高の給食残量が非常に多いことからも、健康管理としての食事指導の必要性を感じた。そして、今回のプログラムの経験から、日韓の食文化は意識的に守っていかなくてはならないと再認識した。食育に於いても ESD の在り方をリンクし、食文化授業に取り組んでいく必要性を強く感じた。

最後に、全国各地の様々な学校種の先生方、韓国の先生方、ユネスコ関係者をはじめこのプログラムを支えて下さったスタッフの方々との出会い、活動を通して親交を深められたことは最大の成果である。すべての方々に深く感謝し、今後も途切れることなく交流することを目指したい。

## 自分で見て自分で学ぶことでしか得られないもの

**篠崎　佳弘**

今回、私が目的としていたのは、ESD につながる新たな取組みを模索したい、韓国の子どもたちの現状や生活を知りたい、韓国の文化や価値観に出会い学びたい、という 3 つだったが、どれも驚きの連続で、概ね達成することができた。

訪問した中学校では道徳の時間に ESD を取り上げていて、部活動でも ESD について積極的に取り組んだ国際理解班や森プロジェクト班などがあり、市から活動のための補助金も出ていた。ただし、ESD に関して日本と大きく違うのは、ユネスコスクールが高校に多いという点で、さらに平和教育に重点を置いていることだった。日本では小中学校が環境教育や地域交流といった皆が自然に興味を持てるようなものを実践している。そのあたりにも違いがあり、これも兵役制度の有無など文化の違いからくるものではないかと感じた。

韓国の子どもたちの現状にも驚いた。特に訪問した高校の生徒たちは皆、朝 7 時半から夜 10 時まで学校で勉強し、その後帰宅してから塾に通うという生活だった。厳しい大学入試を控えて、学生が勉強し過ぎるということが社会的な問題になっていて、自由な時間を与えようと国レベルで対応を始めていた。しかし、自由学期制度というのは問題点が多く、すべてがうまくいくのは難しいのではと感じた。今後、修正や改善が必要な気がしている。この点については実際に行っている学校の先生や生徒の意見なども聞くことができればよかったと思った。

韓国の文化で一番わかりやすかったのは、食文化だった。3 回の学校訪問をした際に、いずれもその学校の生徒たちと一緒に給食を摂ったが、必ずキムチが出て、キムチ以外のおかずやスープ、どれをとってもとにかく辛かった。挨拶以外は、お互いにつたない英語での会話になったが、楽しく交流することができた。そして、私が今回一番印象に残っているのは、ホームビジットだった。実際に家庭に入って一緒に生活することで、家庭の雰囲気や人々の生活実態、文化などが見えてきて楽しめた。特に日本語が話せる人の家庭に充てていただいたので、多くの話ができて交流という点では素晴らしい企画だったと感じている。今度、日本に来たときには逆に私の

家庭に迎えてあげたいという気持ちにもなった。

韓国の先生方と世界文化遺産を巡る時間も少人数だったため、いろいろな話をすることができ、有意義な時間となった。通訳の方もとてもよく動いて下さって感謝している。

行く前は両国間の問題など心配な点もあったのだが、出会った人たちすべてがとても優しく、心の温かさを感じた。自分の足で訪れ、自分の眼で確かめ、自分の言葉で伝え合う、これはとても大事なことだと痛感した。本校の生徒たちにもこの点は伝えたいと思っている。

# Ｂグループ

## 経験を糧に

**阿部　宏史**

岡山大学は2007年4月にESD推進を目的とするユネスコチェアの設置認可を受け、2005年6月に国際連合大学からESD推進拠点(RCE)の認定を受けたRCE岡山の様々な機関と協力して、ESDの普及・促進に取り組んできた。また、2013～2014年度の2年間、国内のユネスコスクール支援を目的として2008年度に設立されたユネスコスクール支援大学間ネットワーク(ASPUnivNet)の事務局大学を務めている。このような経緯もあり、韓国におけるESD取組みやユネスコスクールの現状を把握することに大変興味があった。

私自身は、訪問団長を務めるとともに、Ｂグループに所属して江原道の各機関を訪問した。今回のプログラム全体は、韓国ユネスコ国内委員会事務局をはじめとする関係機関によって十分に準備された素晴らしい内容であり、韓国におけるESDやユネスコスクールの状況について様々な情報を得ることができた。

訪問3日目の8月24日に韓国ユネスコ会館において、韓国の教育事情とユネスコスクール事業の実施体制に関する講演があり、概要把握の意味で有意義であった。韓国では、ユネスコスクールへの正式加盟前に国内ネットワークでの予備期間を設けており、この間に教員研修・ワークショップ、地域別審査、2年間の活動評価などを実施している点は、ユネスコスクールの質を保証していく上で大変に有意義なシステムであると感じた。当初のプログラムでは、講演の後にESD教職員フォーラムが開催される予定であったが、中止になったことは残念である。

Ｂグループのユネスコスクール訪問は、保聖女子中学校、春川教育大学校附属小学校、原州女子高等学校の3校であったが、いずれの学校において温かく歓迎され、充実した交流プログラムを提供していただいた。また、各学校の児童や生徒の生き生きとした姿、先生方の熱心な教育姿勢、そして訪問団に対する歓迎行事に深く感銘を受けた。さらに、韓国での国際理解教育(EIU)や持続発展教育(ESD)への熱心な取組みにも触れることができた。

日本の先生方は、訪問先の学校で日本の自然、文化、生活などを紹介する授業を行った。私も授業を参観したが、先生方により入念に準備された熱意とユーモアあふれる授業内容に、韓国の生徒たちも興味津々の様子であった。言語の壁はあるものの、日本の教員から直接に授業を受けることは、韓国の児童・生徒にも貴重な経験になったと思う。

学校訪問以外にも、韓国DMZ平和生命園訪問、家庭訪問、江原道教育庁訪問、清平寺訪問、雉岳山国立公園訪問といった様々なプログラムが提供され、韓国の社会、文化、自然などについて、幅広い貴重な経験を得ることができた。

今回の事業に参加した関係者が、本プログラムで学んだ貴重な経験を各学校や地域に持ち帰り、より良い未来に貢献する人材を育むために役立てていただくとともに、今後とも日韓交流の橋渡しになっていただくことを期待している。

## 出会いは人生の宝

**石井　亜佐美**

（1）初めに

今回このようなプログラムに参加するまでは、ESDという言葉すら良く知らなかった。しかし8日間の研修を経て感じたことは、「すべてはESDにつながっている」ということだった。この8日間で、日韓問わず、たくさんのすてきな先生方、スタッフの方に出会うことができた。みなさんとても情熱的で熱心な方々ばかりだった。そういった先生方と話をしたり、実際に学校を訪問したりする中で、自分が学校で取り組んでいることや、授業で大切にしていることはESDにつながっていた。私が勤務する学校ではESDという言葉は浸透していない。しかし、研修等を利用して、もっと先生方に知ってもらおう

と思っている。

（2）課題について

私が本プログラムに参加するにあたり設定した課題は大きく分けて二つある。

一つ目は、子供たちの力を伸ばすための教育環境がどのように整備されているのかということ、二つ目は、韓国の英語教育の現状はどのようになっているのかということだ。

一つ目の課題においては、学校を見学する中で、どの学校も教育設備、中でもIT機器がとても充実していると感じた。電子黒板の活用、プロジェクターの設置など、訪問した学校ではいずれも整っていた。そしてそれを先生方が授業で当たり前のように活用していた。また、先生方が不自由なく使えるよう研修も充実しているということだった。IT機器を活用することで、授業を効率良く行うことができる。

また、韓国の教育に対する意識が高いことは以前から知っていた。しかし、実際の教育現場で具体的にどのような取組みを行っているのかはよく知らなかった。原州女子高等学校を訪問した際、夜10時まで先生方も一緒に勉強をしているという話を聞いた。それだけでも十分驚いたのだが、そのあと塾に行って勉強する子も少なくないようで、韓国の教育の意識の高さを実感した。実際に生徒さんと話すこともできたので、今おかれている現状について聞いてみたのだが、みんな今の状況を嫌がるわけでもなく、むしろ望んで学習しているようだった。「どうして勉強するのか。」と尋ねたところ、「夢を叶えるため」「良い大学に入るため」と言っており、生徒自身が強い意志を持って学習に取り組んでいることがわかた。韓国の中学校では、詰め込み教育を緩和させるために、高校受験を抽選にしたり、自由学期を設けて子供たちの主体性や興味関心を引き出したりする取組みを行っていると聞いた。しかし実際は、大学受験が与える影響がまだまだ大きいと感じた。

二つ目は、韓国の英語教育の現状です。私が特に印象に残っているのは春川教育大学附属小学校だ。この学校は、英語学習専用の建物があり、その場に行くと子供たちの英語のスイッチが入るようになっていた。実際に5年生の授業を見たのだが、日本では中学生レベルの内容の学習をしていた。韓国では小学校3年生から英語の学習が始まるそうで、子供たちの学習の積み重ねも感じた。また、特に英語に対する意識が高いようで幼稚園の段階から英語を習わせる家庭が多いという。小さい頃から英語に触れているので、子供たちがためらいもなく、意欲的に英語を話していた。また、先生がタッチすれば次の画面にいったり、音声が流れたりしてくる電子黒板にも驚いた。設備面でもう一つ驚いたことは、子供たちが英語を使ってロールプレイングができるようにレストランなどの場が設置してあることだ。今、子供たちと外国語の学習をしていて思うのは、子供たちが必要な場面で必要な英語を選択して使えていないということである。このようにロールプレイングできる場があると、子供たちは抵抗なく必要な英語を話すことができると感じた。韓国学生は、将来社会で活躍するためには英語ができて当たり前だという考えが多いようだった。子供たちの意欲を高めるといった意味でも、韓国は英語教育に対する設備には圧倒された。

（3）終わりに

今回のプログラムでの一番の成果は、人との出会いである。日韓問わずたくさんの方々と出会うことができたのは私の人生の宝となった。先生方と教育について語ったり、たわいもない話をしたりしてコミュニケーションをとることで、自分自身の見聞も広げることができた。また、普段の旅行では行くことのできない場所を訪問することで、韓国の歴史や文化についてもっと知りたいと思った。自分自身の英語力を高めたいという意識や、韓国語で出会った韓国の方々と話したいという気持にもなった。なにより、韓国はもっと好きになった。この出会いを大切にしながら、この経験を自分の教育に生かしていきたいと強く思った。

---

## 国際交流から広がる価値観

**浜中　真希**

本校では、2010年にユネスコスクールに加盟し、総合的な学習の時間を中心にESDを推進してきた。「ともに生きる力」の育成を目指し、「身のまわりの自然」から「地域（金沢）」、「日本」、「世界」へと学習範囲を広げている。その中で、国際交流は欠かせない。そして、本校は、海外の学校との交流を模索している。例えば、韓国は、隣国であり、交流を深めながら、環境問題や地域の伝統工芸や文化財等に関する教育を学び、「ともに生きる力」の育成を目指したいと考え、今回のプログラムに参加した。

韓国での教育講義や学校訪問から、韓国では一人一人の夢と才能を育てる幸せ教育を目指していて、

そのための施策が推進されている。ESD で目指す持続可能な社会の視点も、世界中の人々とともに、幸せに生きる平和な世界を目指していると感じた。ESD も、国際理解は欠かせないものとして取り組んでいる。相手をライバルや敵として見るのではなく、ともに歩む仲間として見ることを大事にしている。すべての人が、自分の夢を実現させ幸せに生きる。そのためには､5 教科の点数を上げることが重要なのか？そのような考え方では、全員が敗者となり全員が傷つくだけである。韓国は、国を挙げて改革に取り組んでいる。

実際に出会った韓国の先生は、大変優しく向上心に溢れていた。なぜですかと尋ねると、他の国の人と交流することは、自分の視野を広め、仲間になれることは、知り合いが増えとても良いことだ、と答えられた。先生自身が人とともに歩んで行こうとし、実践していることが印象深かった。

改めて、本校の目指している「ともに生きる力」の育成には、国際交流は欠かせないと感じた。自国の中での価値観だけではなく、世界を視野に入れた考えを育むことが大切である。

また、本校では、総合的な学習の時間を中心に、地域（金沢）の伝統や文化を大切にすること、家庭科を中心に、折りに触れ金沢の食文化や和食の良さを学習している。韓国では家庭科の授業が高校 1～2 年生の女子の科目であることがわかった。総合的な学習の時間や衣食住・環境等を系統的・総合的に学ぶ家庭科のある日本ならではの良さも発見できた。韓国でも日本同様、女性の社会進出、食や生活の欧米化が進んでいる。似ている部分が多いので、出会った先生方の話や価値観は大変興味深かった。

## 継続的な交流から ESD の質の向上を

**東口　幸央**

韓国の教育事情を知るうえで、小学校、中学校、高等学校を訪問したことはとても良かった。実際の教育現場を見ることで、聞いていたことを確認することができた。直接子供たちと触れ合うことのできる通訳サバイバル授業を行った。言葉が話せないので苦労すると思いましたが、子供たちは、理解しようと一生懸命聞いてくれる姿、反応してくれる姿に感動した。サバイバル授業は、今後も是非続けていってほしいです。自分の反省として、授業をするときには、英語がいくらか話せるとよいと思った。

韓国の子どもたちは、英語の話す力が高いと感じた。小学校から専門の英語教師をつけたり、ITC の活用を積極的に行っていたりして、日本より高度な英語活動を行っています。その分、英語力がついているのではないかと思った。特に高校生と話をする機会がって、ほとんどの生徒が英語での会話ができ、レベルの高さを感じた。

ホームビジットや探訪、歓迎会を通して、韓国の先生との交流時間がとれたことは良かった。お互いの教育事情について、多く話すことができた。苦労していること悩んでいることは日本と大きく変わらないと感じた。大学入試の関係で、韓国の子供たちは、学校で夜遅くまで学習していることには驚いた。日本では、塾が行っていることを、韓国では学校でしている。先生の負担等はどうなっているかが疑問に感じた。

学校訪問でも、教職員との意見交換会が持たれたが、時間が少なかった。このような機会はとても良かったので、もう少し時間があるとよいと思った。

韓国の教職員との交流だけでなく、日本人の参加者、お世話してくださった韓国と日本のユネスコの関係者との交流できたことが一番心に残っている。毎日、夜遅くまで多くの話ができとても貴重な時間だった。これが今回だけで終わるのではなく、今後も定期的に交流ができるとよいと話し合った。時間や経費など大変ではあるが、是非交流をしていきたいと思っている。韓国との交流も一つだがが、日本の中でお互いどのようにユネスコの活動や ESD 活動に取り組んでいるかを紹介したり、見あったりして学習していくことが、取組みが具体的で、よい参考になるのではないかと思う。

今回、このプログラムで学んだことは、韓国ユネスコスクールの取り組む､他の学校での ESD 活動は､小松市のいろいろな学校で実際取り組んでいることが多かった。本市ではユネスコスクールが 1 校しかないので、これから 1 校でもユネスコスクールに参加してくれるよう紹介していきたい。

## 韓国の理科教育の現状

**平石　達彦**

今回のプログラムによって、韓国の最新の教育事情や教育動向、教育現場などを学習することができた。特に、今まではテレビやインターネットでしか知ることができなかった韓国のイメージを、実際に

体験することで視野を広くすることができた。実際に見る・聞く・感じることで得た知識を、多くの教員や生徒に伝えられることが、私の得た大きな成果であると思う。

私は高等学校の理科教員であり、進路や大学入試が職務と大きく関係している。韓国は学歴社会であり、非常に競争が激しいというのが、私の持つ韓国のイメージだった。そのようなイメージを持っている理由は、大学入試の競争が非常に苛烈で、その様子は日本のテレビでもしばしば取り上げられることがあるためだ。そのため、実際の韓国の高等教育現場はどのような教科指導を行っているのだろうかと、興味を持ってプログラムに臨んだ。

結果としては、大学入試に対する取組みは、自分の想像以上であった。B グループの一員として、高等教育機関である原州女子高等学校を視察したが、日本の高校では考えられない教育活動を行っていた。原州女子高等学校は進学校として教育活動に取り組んでいますが、生徒は午後 10 時まで自習を行っていると説明を受けた。生徒自身や生徒の保護者も、このような教育活動について理解を示し受け入れているという事実を知り、大学入試への取組みは国民規模での一大行事であることを肌で感じることができた。また、韓国の教育方針は「注入式」から「ゆとり」へシフトしようと動いているという説明を、事前に受けていた。しかし、韓国の教育現場では長時間の学習活動が日常的に行われているため、新しい教育方針が浸透するのは時間がかかるのではないかと感じた。韓国の生徒が入試に向けて、ひたむきな姿勢で勉強を行っていた様子を、日本の高校生にも伝えていきたいと思う。

また、私は理科教員でもあるので、韓国の理科教育がどのように行われているかについても興味があった。原州女子高等学校の理科教室の設備や指導方法を伺い、日本と韓国の理科教育が大きく異なることに驚いた。まず、原州女子高等学校の理科室（化学室・物理室・生物室・地学室）を見学させていただいた。理科室の大きな違いとしては、ガスの設置口が存在しないことだった。担当の先生にお話を伺ったところ、ガス管は爆発の恐れがあるので、ガス管は通っていないという説明を受けた。さらに、ガス管が存在しないという事実は、韓国内の小学校・中学校・高等学校の全てで当てはまるという説明を受けて、衝撃を受けた。日本では、ガスバーナー等の火気器具を使用するため、通常は設置されている。実験はどのような方法で行われるのか伺ってみたところ、アルコールランプや携帯式バーナーを使用すると説明を受けましたが、基本的には実験等の体験的な活動は少ないということだった。知識の注入を重点的に取り組んでいるのかもしれないが、指導方法の大きな違いには驚かされた。全体的な教育活動はインターネット等で調べることも可能だが、教科教育・教科指導は実際に訪問してみなければ分からないことだったので、非常に大きな収穫となった。

---

## 個人レベルでの交流の重要性

**伊藤　英夫**

今まで最も近い国について知識や経験がとても浅く、理解不足であった。そのため今回の視察では「教育」といった視点から理解を深め、今後の仕事に役立てようと考えていた。

○訪問先の各機関が丁寧にしっかりと準備をしてくださっていた。それが我々訪問団の満足度の高さになって表れている。心から感謝したい。

○児童生徒と直接交流することで子供の感性は国による差違がないことを体験した。全行程を通して反日感情に接する機会はなかった。マスコミによって操作された感情や思い込みを払拭するには、人と人とが交流しない限り分かり合えないことがたくさんあるように感じた。

○「先生に会釈をする」「授業は座ってしっかり聞く」「授業中の挨拶や授業の進め方」等は、日本と変わらないように見えた。生活習慣や物の感じ方の基盤は同じであるように思える。

○教職員の意見交換はとてもよかった。欲を言えば、もっとフランクに仕事の実情や苦労について時間をかけて話し合えれば更に理解が深まったと思う。

○日本と同様に ESD の実践が多岐にわたっていた。つまり ESD は高い理念に支えられながら、国や人種を越えて実践されるべき崇高な目標であり喫緊の課題であると感じた。またキリスト教の精神文化に支えられているためか「ボランティア活動」に力を入れていた。ESD 実践の課題は授業時数の確保であろう。それは両国どこも難しさを抱えているように感じた。

○ホテルの食事以外は、ほとんどの食べ物を写真撮影した。国柄を理解するには食を理解する必要がある。毎食キムチが出る韓国料理が現地の人の健康を維持していると感じた。

○ホームビジットは教育関係者宅であったため両国の実情を話せてよかった。互いに苦労があり、それを語り合い理解し合うことがとても価値あることだと感じた。
○民間レベルで歴史問題を研究することが本当に必要だと思った。生活習慣や物の感じ方がここまで似通っていれば政治的な軋轢は解消されるのではないかと想像する。我々教員も一学者であるから、もっと研究する必要があると感じた。
○国内国外でESDを実践する仲間を増やすきっかけになった。ESDは様々な人と地域がつながり、支え合うシステムが求められる。ぜひこのつながりを大切にしていきたい。

---

## より質の高い交流と教育を目指して

**岩見　理華**

今回、自分は以下の三つの目的・期待をもって本プログラムに参加した。

まず、第一に、韓国の教育・文化・歴史についての理解を深めることがあげられる。プログラム中、ソウルユネスコ会館にて韓国教育開発院、また江原道（春川）教育庁の関係者から韓国の現在の教育事情についてお話を伺い、実際に小学校、中学校、高等学校を視察することができたのは大変有意義な経験だった。日本では、「総合的な学習の時間」の数を減らし、基礎学力の定着を図るために土曜授業復活が検討されているなど、「ゆとり教育」が原因とされる「学力低下」が問題となっているが、韓国では「自由学期制の導入」、ボランティア活動の評価を大学入試へ反映させるなど、まるで日本とは逆の方向転換を図っている。韓国では学歴社会で、受験競争が激化し、毎年、センターテストにあたる共通テストの時期には、家族総出で受験生の息子や娘を応援し、警察までが試験会場へ遅刻者の送迎を行うなどの様子をテレビで見ていたので、この国の動きについては驚いた。ただ、関係者もおっしゃっていましたが、日本と同様に、大学入試制度そのものの改革、現場の教員の混乱・反発を調整するのに時間がかかると思った。

また、教師の負担を減らし、教科指導に集中できるように、事務処理を行う部署と生徒指導を行う部署を分け、特に行政職の人員を増やすなど、学校管理体制の改善にも力をいれている点が印象的だった。日本でも、教員は教科指導だけでなく、部活動や生徒指導のほか、さまざまな事務手続きの校務があり、なかなか教材開発や指導法の改善について教員同士がお互い時間を割いて話し合ったりする機会がないのが現状だ。このような形で国や各教育会の行政レベルで統一した学校組織が確立されれば、教員はよりよい授業を提供でき、生徒の学力も向上するのではないかと思った。

文化や歴史の理解については、限られた時間ではあったが、ソウル探訪やプログラム中の施設訪問で、文化遺産の見学をさせていただくことができた。韓国は以前に二度訪問したことがあるが、今回何よりも貴重な経験をさせていただいたのは、非武装地帯（DMZ）の訪問だった。韓国の人もなかなか訪れることのない場所を見学し、韓国・北朝鮮両国の平和を願う韓国の人たちの熱い思いが伝わってきた。

第二に、韓国の教育現場でのICT活用や英語教育の現状について知りたいと思った。訪問した学校では、すべての教室に電子黒板が設置され、どの教科においても効果的に教材を提示し、教員もその操作に慣れている印象を受けた。日本においても電子黒板の設置やデジタル教科書の普及に力を入れているが、ハード面、ソフト面ともに、まだまだ不十分な点があり、設置環境が整っていないことから、なかなか進んでいないのが現状である。勤務校でも、ようやく各教室にプラズマディスプレイが設置されたが、インターネット環境が不安定で、パソコンとの接続が面倒など準備する負担が大きく、ついつい黒板ですませてしまっているところがある。韓国で見させていただいたことを参考に、今後はもっとICTを効果的に授業に活用していきたいと思っている。

第三に、現地の方々、特に教員の方々との交流を期待していた。残念ながら訪問先の学校の先生方や生徒さんたちとの交流はかなわなかったが、ソウル探訪で案内してくださった先生、通訳の学生さん、ホームビジットでお世話になった先生と親しくお話することができた。今後は、メールなども通じ、交流を継続させたいと思っている。また、本プログラムに参加される韓国の先生方の受入れも積極的に行っていきたいと考えている。

最後に、ホームビジットでお世話になった先生からのメールの一部を紹介させていただきたい。今後、私たち韓国と日本の個人レベルの交流がお互いの国同士の温かい交流へ発展していくことを願っている。

『私も先生とお目にかかったこと、とても嬉しく思っている。特に、私の学校は日本の学校と姉妹関

係にあり、一年に数回、日本の方と生徒さんとの交流がある。それから日本の方との出会いを大切に思っている。交流をすればするほど、友情と関係がもっと深くなるのは幸せだと思う。日本と韓国、韓国と日本、この両国は昔から緊密な関係を維持しながら生きてきたが、過去の歴史問題（植民地時代、従軍慰安婦、竹島領土紛争など）が出たら、すぐお互いに気詰まりな雰囲気になってしまう。しかし、こんな問題は絶えざる民間交流を通じて、お互いの立場を理解すればいつか今より協力できると思う。』

## 地域の文化を大切にした教育を
**梶　弘樹**

本プログラムで最も有意義であったことは、韓国国内の学校訪問である。韓国の小・中学校及び高等学校を訪問し、実際の授業や児童・生徒の姿をとおして、韓国の教育事情を知ることができたことは貴重な学びとなった。日本と韓国の学校教育における教師の姿勢や児童・生徒の実態の比較から、日本の学校のよさや課題も見えてきたと同時に、日韓の文化、考え方の違いや共通点を理解していくよい機会となった。また、本プログラムに共に参加した他の日本教員の授業を参観し、リフレクションすることで、自分自身の授業やコミュニケーションのあり方を見直していくこともできた。特に、日本から教材を持ち込んで韓国の生徒に行った日本文化交流授業は、自分自身にとってよい経験となった。お互いの国の言語や文化は違っても、相手に自分の思いや考えを伝えたい、相手の思いや考えをわかりたいという気持ちで接すれば、人はお互いに心を開き、分かり合うことができるということを学んだ。どこの国でも子どもたちは明るく素直であり、教師は子どもたちのよりよい成長を願っていると感じた。

韓国の教職員との懇談会も有意義であった。お互いの授業実践や教育観を交流することで、国の違いを越えた共感的な学び合いができた。交流した教職員の間には、国や学校種の違いがあったが、多様な人々と時間や空間を共有し、つながることで、お互いの思いを理解し合うことができたことは大きな成果であったと思う。

私が所属している熊野第四小学校は、筆の町として有名な熊野町にある。町役場や教育委員会、筆事業組合など様々な組織、団体が協同し持続可能な地域社会の実現に向けて知恵を出し合い、取組みを進めている。筆の町という特色ある地域に存在する所属校では、地域の伝統・文化をテーマにした総合的な学習の時間を計画し、実践している。地域の特産品である筆作りに関する学習はもちろんのこと、筆に関連する事象としての筆まつりの学習や、地域で筆豆と呼ばれている黒大豆の栽培もおこなっている。地域の人や専門科と連携し、子どもたちの学びが実感を伴った確かなものになるよう学習展開の工夫も行っている。このような現在の総合的な学習の時間であるが、ESD としてこれまでの学習とどう違うのかということをより明確にしていくことが、本プログラムに対する私の課題であった。本プログラムに参加し、多様な人々と交流しお互いに理解し合っていく過程の中で、ESD に関して大切なことは何か、どのような子どもを育成することが ESD につながるのかということが、見えてきたと感じている。今後は、本プログラムで得ることのできた人とのつながりや知識、自分自身が感じたことを大切にしながら、ESD に取組み、子どもたちの未来に対する教師としての責任を果たしていきたいと思う。

## 意識向上に繋がった訪問
**唐川　和喜**

私が最も有意義であった内容は、韓国の教育現場に訪問できたことである。

私の訪韓回数は 10 回を超える。時間があれば韓国を訪れている。なぜ、私がそれまで韓国にひきつけられるかというと、それは韓国の人たちのエネルギッシュな姿があり、そこに魅力を感じるからだ。韓国の人々のこのエネルギーはどこから来るのかというと、それはおそらく韓国の学校教育制度に起因しているのではないかと考えていた。私は韓国の学校教育について触れてみたい、常々思っていたが今回、このような機会を得て、目的意識をもってプログラムに臨んだ。

私が勤務している北九州市では、特に学力向上に力を入れている。日々の学習で、学習の基礎基本を身に着けるため、音読に力を入れたり、各教員が工夫して学習内容を工夫したりするなどの取組みを続けており、徐々に成果を上げているところである。韓国は OECD の調査（PISA）で学力水準が高いことから、学校教育での取組みはどのようであるか実際に見てみたいと常々思っていた。

今回の訪韓は学校見学を通して、実際に児童や生

徒の授業風景を見ること。また、子どもたちとの交流をしたこと。さらには韓国の教職員から、韓国の教育事情について話していただくなど、韓国の教育について理解を深めることができたとの同時に、自分自身の教育に対する考え方を見つめなおす機会になった。

私は小学校で勤務をしているので、春川教育大学校附属初等学校での学習の取組みについては、特に興味深いものがあった。印象に残ったのは、子どもたちが純粋で、きちんと教師の話を聞き、学習に取り組む姿勢がすばらしかったこと。また設備が最新のものがそろっており教育的な効果が高まっているということである。

派遣前の事前研修では、韓国は未来を担う子どものために国家として教育予算をかなり確保しているということを聞いた。実際に訪問してみると、最新鋭の図書館、ICT 教育のための機器などを備えていた。また学校内に森があり、自然とかかわりあえるスペースがあるなど、子どものために適切に環境を整えているということを実感した。

教科等の指導においては、小学校 5 年生外国語（英語）の学習を参観する機会を得た。外国語専門の教員を配置しており、小学校 3 年生から英語を学習しているとのことであった。見学をしたのは 8 月であるが、5 年生の 8 月の段階で、私の個人的な感覚的ではあるが、ヒアリングとスピーキングの能力は日本の中学 2、3 年レベルの水準に達していた。韓国の外国語の教育のレベルの高さを痛感した。学習規律なども、システム化されており、児童は教師の話をよく聞いている印象を受けた。年上の方、先生などを慮る教育がなされていると感じた。

ESD 教育に関しては、学校の年間計画の中にきちんと位置付け、親子とのふれあい、安全教育、環境教育、心をはぐくむ教育など教職員の共通理解のもと、学校全体で同じ方向で取り組んでいるということを感じた。校長先生の適切なリーダーシップのもとに教育活動が行われていたことに感銘を受けた。

今回の韓国訪問で、多くの韓国の教職員、そして同じ訪問団の日本の教職員と交流することができたことも大変有意義であった。その際に感じたのは皆、子どもたちの教育に対して「熱い想いがある！」ということである。事あるごとに先生方とは子どもたちへの思いを語り合いことができた。私はこのプログラムを進めていく中で、自分自身の教育観を見直す機会を与えていただいたのである。「向上心をもって子どもたちと向き合っているのであろうか。」「子どもたちのために何ができるのだろうか。」という思いが日に日に増してきた。今回の研修を意義あるものするために、また、これからを担う子どもたちのために、これからも教師として、また ESD の携わる教員として研鑽に励んでいく所存である。

---

## 韓国に学ぶ次世代教育

**木嶋　勇一**

残念ながら、本プログラムの参加目的の一つであった、継続的に相互交流活動ができる韓国の学校を見つけることはできなかった。しかし、韓国における教育関係者及び学校教職員と接することで、是非とも本校においても積極的に取り組んでいきたいアイデアを持つことができた。

具体的には、読書教育、体験型学習、人間性教育、保護者参加型教育などである。読書教育への取組みは、現在日本国内においても注目されているが、高校での読書教育の環境整備などについては、事例が少なく、今回の学校訪問で参考になることがあった。また、生徒が楽しく、積極的に学ぶ一人ひとりにあわせた体験型学習は、日本で行なわれている総合学習科目の実施状況の見直しにもつながるものであった。さらに、放課後の時間のより有効な活用方法についても考えるきっかけとなった。人格教育は、本校においても同様の取組みを行なっているが、教員主導ではなく、生徒主体の「気づき」の活動を通して育む教育方法を参考にしたいと思った。さらに、本校では、保護者と協調した教育が実践されているとは言えず、日常の教育活動において保護者を巻き込んだ教育活動は大きな意義があるものと思った。単なる授業見学に留まらず、保護者を「講師」として招く特別授業なども実施してみたい。

原州女子高等学校において、教壇に立つ機会を得たが、大変に学ぶことが多かった。南北に長く伸びる日本の気候の違いや観光名所などを通して、文化を紹介する第 1 部と、日頃行なっている英語授業を展開する第 2 部の 2 部構成で授業を実施した。特に、第 2 部は教師主体の授業(Teacher-Centered)ではなく、生徒を主体とした授業(Students-Centered)を展開することで、韓国の生徒及び教職員の反応を見ることを目的として指導案を作成し、実施してみた。生徒たちが協力して、与えられた課題(Task)を完成させる授業形態に対して、予想以上に、生徒の取組み

と反応がよく「英語の授業が楽しい！」という声が聞かれた。また、授業後の日韓教員の懇談会では、授業を参観された韓国の先生から内容及び指導方法についての質問を受け、関心の高さが感じられた。日本よりも英語教育をリードしていると言われる韓国においても、新しい英語教育の在り方の指導方法について模索をしており、今後は英語教育だけでなく、国際教育の方法についての共同研究の機会があればと思われる。

本プログラムに参加して、多く「気づき」があり、特に今後の授業展開において、参考にしたい項目があったと言える。

## 「共に歩む相手」と見る国際教育

**大竹　優志**

隣国である韓国について理解すること、韓国と日本が良好な関係を築くことは国際化され国境が曖昧になってきている中で両国の発展に必須である。私がこのプログラムに参加した理由は、そのために実際に韓国に赴き、現地の方々と交流を深め、韓国の文化や歴史を知りたいと考えたからである。実際、韓国を訪れ、長い期間滞在する中で、事前知識やメディアの報道だけでは知ることが出来ない韓国の様々な面を知ることが出来た。その中でも特に印象に残っていることを挙げる。

第一に韓国の人々の温かさである。韓国ユネスコの方々をはじめ、現地の学校で働く教員の方々や街で出会う人々を含めたくさんの方々のおもてなしを受け、本当に楽しい時間を過ごさせて頂いた。人の優しさに触れると自分も他人に優しくなれる。日本に帰ってきて一番に感じた自分の変化はそれであった。日々の生活に追われ、新しい人との出会いがなかなか出来ない日常の中、毎日たくさんの韓国人の方々の愛情に触れることで自分の中で忘れかけていた人情の尊さを思い出すことが出来た。「日韓教員ソウル探訪」でソウル各地を案内して頂いた教員の方々になぜそんなにも献身的になってもらえるのか理由を聞いたところ、「昨年日本の鎌倉に研修に行った時、日本人の教員に同じようにお世話してもらったから。」とおっしゃっていたのが印象的であった。

第二に韓国の教育の現状を知ることが出来たことである。事前に知っていたのは受験大国であるということくらいであった。実際に訪れた高校では午後10時まで教員が生徒の勉強をみている現状やIT技術を取り入れた先進的な授業を行っていることなど実際の教育現場が生徒の大学受験へ徹底したサポート体制を整えていた。その一方でソウルや春川の教育委員会では今の受験偏重の教育事情への危惧、またそれからの脱却のため生徒のボランティア活動や芸術活動など勉強以外の活動を評価するシステム（日本のゆとり教育のようなもの）の導入など、将来の韓国の教育についても知ることが出来た。特にこれからの学校教育を生徒の自主性や創造性を育む教育にしていくというこの韓国教育の方針には大きな驚きを感じた。なぜなら私は世界で有数の企業をもつ韓国は現状の教育に自信を持っていると考えていたからだ。また、国際教育では、対象の見方を変えることに力を入れ、相手を競争相手と考えるのではなく、共に歩む相手と見ることを大事にしていた。過去にあったことを乗り越えるためにお互いにいいところをみて尊重し合うことを意識した教育が行われていた。これも日本のメディアで繰り返し報道される韓国での反日感情からはとても想像できなかった。

## 出会った人たちの温かさに触れて

**三浦　良人**

今回のプログラム参加において私が学びたいと思ったことの一つ目は、ESDを含めた韓国の教育事情を自分の目や耳で見聞してくること。二つ目が韓国の人々とたくさんの交流をしてくることであった。以下にその成果や感想を述べる。

〇韓国の学校やESDについて

Bグループは3つの学校を視察・見学した。私立の女子中学校、国立の小学校、公立の女子高校で、小中高、国公私立それぞれタイプの違う学校を見学させていただき、大変勉強になった。

見学してまず驚かされたことは、施設・設備の素晴らしさである。冷暖房設備やICTに関する設備、給食を食べる大きな食堂等、どの学校の設備も充実していた。特に最後に訪れた原州女子高等学校は7月に新校舎に移転したということもあるが、最新鋭の設備でため息の出るほどであった。どの学校でも特徴的だったのは読書環境で、図書室はもちろん、独立した図書館をもっている学校もあり、子どもたちによい本を読ませたいという気持ちを感じることができた。

子どもたちの学習に取り組む姿も素晴らしいも

のであった。どの子も先生の話をしっかり聞こうとしていた。教える側、教わる側という関係が確立されていて、教育で一番大切な先生の話を聞くということが確実にできているという印象を受けた。私たちも改めて教師と児童・生徒の適切な関係確立を図っていかなければならないと感じた。

ESD については、韓国のユネスコスクール加入の審査が厳しいこともあり、どの学校でも着実に実践されていることが分かった。特に保聖中学校では、外国の食文化に触れることを目的とした活動、残飯や生ゴミの量を調べて食べ残しを少なくする活動、そして靴のはけない子どもたちのいる他国に靴を送るというレインボープロジェクト等、積極的に活動している様子を紹介していただいた。今後は自校での活動に生かしていきたい。

○韓国の人々との触れ合いについて

まず、韓国の子どもたちに授業を行ったことが貴重な経験であった。私は春川の小学校で、日本の 6 年生が学習している教材で韓国の 6 年生に道徳の授業を行った。日本の子どもたちが学習している教材を韓国の子どもたちに知ってもらうこと、日本の子どもたちと韓国の子どもたちの反応の違いを知ること等がねらいであった。また、最後の説話として、日本に留学中に駅の線路に落ちた人を助けようとして亡くなった韓国人のイ・スヒョンさんについても話をした。

授業の前は言葉が通じず、不安がいっぱいであったが、教壇に立った時に子どもたちの顔を見て、自分の思いを伝えたいという素直な気持ちになれた。国は違えど、教わりたいという子どもたちの純粋な顔や目は変わらない。私たち教員は教えることのプロとして、どんな子どもたちにも大切なことをしっかりと教えていかなければならないということを再認識するいい機会になった。

また、ソウル探訪やホームビジットでは韓国の先生方と楽しく有意義な触れ合いをもつことができた。韓国の先生方には本当によくしていただき、感謝の気持ちでいっぱいである。私たちを客人として、しっかりともてなそうという気持ちが感じられ、韓国という国や人の誠実さを感じることができた。

今回、宮城県からの参加者は私一人であった。本県は 2011 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災で甚大な被害を受けた。私は、今回の参加が決まった時に、韓国の方々にもこれまでの支援のお礼を言いたいと思った。そこで、私の行った授業の初めに、東日本大震災について説明をし、そのお礼を子どもたちに言った。すると、子どもたちから自然に大きな拍手をもらうことができた。今回のプログラム参加で私にとって一番うれしかったことが、この瞬間であった。本県は今、“震災からの復興”に向けて全県をあげて取り組んでいる。私も今回の貴重な体験を糧に、我が郷土の復興に向けて全力を尽くしていきたい。

---

## ESD の推進に向けて

**毛利　康人**

1.はじめに

本プログラムで、韓国の学校訪問（授業参観、日韓教員の質疑）、ソウル探訪における教員との交流、教育庁への訪問等ができ、通常の韓国訪問では経験できない貴重な研修をすることができた。

韓国は、2009 年に実施された OECD の PISA 調査で参加国中でトップクラスであること、韓国の過度の大学受験について日本のメディアで話題になること、さらに、「国連 ESD の 10 年」の最終年である 2014 年に日本で「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ世界会議」が開催されることなどから、韓国では、どのような教育や取組みが行われているのか、子どもたちが、学校や家庭でどのように学習しているのか、今回のプログラムを通して韓国の教育事情をしっかり学びたいと思い参加した。

2.大学受験を意識した学校や生徒

韓国における受験競争の現状を学校や教員、高校生から直接、話を聞くことができた。訪問した高等学校では、学力向上を図るため 100 分授業を実施するとともに、通常授業終了後、学校で夕食を食べた後、引き続き午後 7 時から 10 時まで自主参加の学習会が実施されていた。多くの生徒が、この自主参加の学習に参加していた。学校から帰宅してから、引き続き家庭教師による学習をすることもめずらしくないという。

また、ホームビジットした家庭の高校 1 年生の子どもは、ソウル大学を目指し、日曜日は、夕方まで図書館で勉強、引き続き夜 9 時から家庭教師による学習をしていた。このように高校 1 年から、大学受験に向けて受験勉強する様子が分かった。

3.大学受験制度

韓国で、大学に進学するためには、国立、私立大

学ともに、毎年、11 月に実施される「大学修学能力試験」を受験する必要があり、この試験の結果で受験できる大学が決まり、高校卒業後の人生が決まると言われている。このような一点集中型の試験システムが韓国における受験戦争の激化の要因の一つであると感じた。

4.日本と韓国の大学進学率・就職率

2010 年の韓国と日本の大学進学率を比較すると、韓国の大学進学率は 71 パーセント、日本は 51 パーセントで、韓国は日本より高い進学率であるといえる（OECD「図表でみる教育　2011 年版」）。また、大学卒業後の就職状況は、韓国は 56 パーセント、日本は 61.6 パーセントであり、韓国も日本と同様に、大学卒業後の就職が厳しい状況にある。※韓国就職率：教育科学技術部、2010 年 8 月と 2011 年 2 月に 2 年制と 4 年制大学を卒業した全国 556 大学の卒業生 55 万 9000 人の就職率調査（2011 年 6 月現在）

※日本就職率：学校基本調査（2011 年 5 月 1 日現在）

5.ICT 機器の活用

訪問した学校では、教室にプロジェクターとスクリーン、パソコンが設置された教卓があった。また、インターネットの環境は無線LANが整備されていた。訪問した韓国の電子黒板は、黒板の中心に電子黒板がはめ込まれていた。

日本における ICT 機器の整備は、市町村においてかなり差異があるが、韓国では、日本よりも ICT 機器の整備が進んでいるように感じた。

授業における ICT 機器の活用についても、様々な教科の学習で、積極的に ICT 機器を活用した授業が行われていた。

電子黒板を活用した小学校の英語の授業の参観をすることができた。日本でも、小学校の外国語活動で、「Hi、 friends！」のソフトウェアを活用し、電子黒板を使った授業が行われているが、日本と韓国のソフトウェアを比べると、韓国の方が先進的であるように感じた。

6. ESD の取組みについて

韓国における ESD については、それぞれの学校、地域に応じた ESD の取組みが行われていた。江原道と鳥取県は継続した交流が行われており、春川教育大学附属小学校では、鳥取県の小学校と絵画の作品の交流を通した国際理解教育の取組みが行われていた。

また、ソウルの保聖女子中学校では、ボランティアを中心とした取組みが行われていた。

日本においては、ESD の取組みは、それぞれの学校や教師に委ねられている部分が多くある。ESD の取組みに熱心な教員が転勤してしまうと、これまでの取組みが継続できなくなる。

今後は、日本、韓国ともに持続可能な ESD の取組みが推進できるよう、地域の教育委員会が、積極的に ESD の推進を図るとともに、学校の年間指導計画に ESD の取組みをしっかり位置づけていくことが必要であると感じた。

7.おわりに

日本と韓国の教員交流を通して、お互いの国を理解することができた。このことが日韓の教員を通して子どもたちに、それぞれの国のことを正しく伝えることができ、今後のよりよい国際交流につながっていくと考えている。

---

## プログラムで学んだ ESD

**森下　まちこ**

私が初めて「ESD」という言葉を耳にしたのは、今から 6 年前だった。岡山県の公民館におじゃまし、そこで、様々な取組みを紹介いただき、「1 人の 1000 歩より 1000 人の 1 歩」というお話を伺った。しかしながら、それがどういうことなのか、なぜ、今、ESD なのかが理解できず、そのまま月日が経ってしまっていた。

今から、3 年前、ACCU の事業部長、柴尾智子氏に ESD の視点からアジアの教育事情を伺う機会を得、去る 8 月 19 日には、橋本市の複数校参加の ESD 夏季研修会で奈良教育大学の中澤先生から、ESD を端的に言うと、「将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすような開発」をいう、と定義を聞いたとき、何か理解できたように思った。

そして、今回のプログラムで韓国を訪問し、具体的な取組みを見せていただいたりお話を伺ったりする中で、本市における ESD の切り口が見えてきたように思った。今までは、環境問題やふるさと教育が ESD につながることは理解できたが、他の領域（分野）については、理解しづらかったが、平和や人権についての学習、他国との文化交流、そして、もちろん今回のようなプログラム（国際交流）も、全く ESD そのものであると理解できた。これらを有機的に連携させながら学習を進めていくことが大事であ

るとも。このことが今回の訪問での大きな収穫だった。今後の取組みのヒントを得たような気がしている。

もう1つ、大きな学びはというと、韓国の教育事情を学べたことだ。韓国の大学入試の厳しさ・難しさ、公務員になるが為に就職浪人を何年も続けている等については、日本のニュースで何度か耳にしたことはあったが、実際高校を訪問し、懸命に学習に取り組む姿を目のあたりにし、なるほどとうなずいた。一般の高校生たちは、夜10時まで毎日学校で勉強し、一部の生徒はその後も塾に通うという。しかしながら、韓国の子どもたちは、知識を使って人生を生き抜くという点で弱いということで、従来の知識注入型の教育から子どもが主体的に活動する教育への転換が図られている（幸せ教育）という。日本も正にそうで、この話は大変興味を持った。

以上、この2点が私にとっての大きな今回の学びであった。この学びを今後、仕事の場で大いに生かしていきたいと思っている。

---

## 韓国と日本における教育環境の比較

**岡　泰子**

本プログラム参加にあたり、韓国の教育における情報化の実際を知ること、教育環境や教育に対する姿勢、課題などについて知ること、そして、ESDについての情報交換を行うことが自ら設定した課題だった。

これらを含め、今回のプログラムで最も有意義であった内容は、学校訪問であった。これまで、自国の教育現場しか知らなかったので、他国の教育現場を実際に見ることで、日本の教育について考え、自分自身の教育観を振り返る機会となった。

韓国の学校を訪問し、（訪問校は特に先進校であったと思いますが）圧倒的な設備に驚くばかりだった。電子教卓や黒板の活用は児童にとってもわかりやすく有効だったと思う。しかしながら、従来の授業スタイルも多く見られたので、全面的に加速度的に移行しているわけではないのだとも感じた。今後、日本も同様に教育の情報化がさらに進んでいくと思われるので、イメージを膨らませることができた。

韓国の教育環境は日本と似た点も多かった。しかしながら、予算面では韓国の方が充実しているのではないかと感じた。

教育における課題は、やはり受験競争の激化だ。これについては以前から知っていたが、夜遅くまで学校に残る自習体制やそれが当然のこととして受け止められる社会観念は初めて知った。さらに、受験競争から生まれる弊害に対し、「幸せ教育」「自由学期制」の導入が検討されていた。これらの取組みは、受験のための学習、知識をつめこむだけの学習から解放し、実生活に適応する力をつけることや、自ら行動する態度をつけることに焦点をあてている。もし、この取組みが成功すれば、夢と希望をもった子どもを育てることに繋がる、まさに「幸せ教育」だ。今後の行方を見守り、長短所どちらも参考にすべきだと考える。しかしながら、受験そのものの制度が変わらないと、学校内での子どもの負担が減ったとしても、学校外に重点が移行するだけではないかとも感じた。

また、韓国では英語教育が盛んだった。自分自身、ほとんどしゃべれず、コミュニケーションに困る場面がいくつかあった。歓迎晩餐会で韓国の教員と隣になったとき、女子高生たちが、私たちに興味をもち話しかけに来てくれたとき、もっと英語が話せたらと身を持って外国語の必要性を感じた日々だった。グローバル社会に貢献できる子どもを育てるための外国語教育の実施、そして自国のよさを知ること、他国を尊重すること、コミュニケーション能力を高めることなど、国際理解教育がますます重要視されるだろうと感じた。

これら、韓国について知識を得ることはもちろん有意義だったが、もう一つの大きな収穫があった。それは、異校種の先生方と関わり、授業を見ることができたことだ。中高の先生からは専門知識に裏付けされた魅力的な授業を見せていただいた。今まで、高校の授業を参観したことはなかったので、私には大きな刺激となった。

ESDについては、韓国の学校での取組みを聞くことができた。しかしながら、多くの実践や他の学校での取組みについてはあまり見ることができなかった。

---

## 知ることで築かれる「平和の砦」

**柴田　祥彦**

1.国家間の関係と市民同志の関係は違うことを実感できた

不幸なことに現在日韓関係は必ずしも良好ではない。マスコミ等の報道でも抗議行動を行う人々など

の映像が流れ、この時期に韓国に行くと日本人だからという理由で不快な思いをすることがあるのではないか、という一抹の不安があった。

しかし受け入れる学校やホームビジットの家庭はもちろんのこと、自由行動時に接した一般市民も極めて紳士的、そして友好的であり、普段社会科教員として「マスコミ報道を鵜呑みにしてはならない」と生徒たちを指導しているにもかかわらず、その私自身がマスコミ報道のイメージにとらわれていたことに気づくと共に、現地を自分の目で見ることの重要性にあらためて気づかされた。

2.韓国人の友人ができた

今まで韓国人の「知り合い」はいたものの、今回のプログラムを通じて、より絆の深い「友人」ができた。このような顔の見える関係を築くことこそが「平和の砦」ではないだろうか。友人のいる国に対して銃を向けることはできないからだ。このことを実感できたため、これから交流できる機会があれば短時間でも交流し、生徒たちに〇〇人ではなく、名前を持った〇〇さんという存在を実感させ、私なりの「平和の砦」を築く活動を続けていきたい。

3.韓国教育を知ることができた

韓国の大学受験が厳しいことは知っていたが、22時まで学校で自習させ、その後さらに塾に通う生徒がいると聞き、とても驚いた。しかし一方でその弊害も認識されているようで、日本の「ゆとり教育」的な政策も計画されているようだが、日本での「失敗」をきちんと検証した上での実施なのか、やや疑問の残るところであった。また、韓国の国家戦略とも結びついているためという側面もあろうが、ICT機器の充実は、日本をはるかに越えるものであり、機器を導入したものの「個人情報保護」の錦の御旗のもと、事実上使用に制約が加えられている日本とは雲泥の差であった。韓国の教育も問題点はあろうが、我々は良い面を知ることができたのだから、その良い面はこれからどんどん真似すべきではないかと考える。

4.現代韓国社会を知ることができた

私は地理の教員をしているので、現在の韓国については他の先生方に比べれば知識としては持っていると思う。しかしソウル探訪やホームビジットを通じて韓国の先生方と話すことを通じて、韓国の現代社会より詳しく知ることができた。例えば伝統的な韓服を着ましょうという韓服の日の実施は、学校によること。そしてかつての女子高では卒業式に韓服を着ることが多かったが最近はそうではないこと。キムチ専用の冷蔵庫の普及率は極めて高く、現在でもキムチは自宅で作ることが多く、その冷蔵庫ではキムチの熟成もできるようになっていること、など様々な情報を得ることができた。

またソウル探訪時の通訳の方は兵役経験者で、その実態についても聞くことができたのは貴重であった。

---

## 教師としての使命

**清水　沙織**

本プログラムでの成果は、大きく２つある。それは、韓国への理解が深まったことと自分自身の使命を認識できるようになったことだ。

ESD 韓国の講義や、学校参観、懇談会、ホームビジットを通して、韓国への理解が深まった。出会った方、すべてが迎える相手を快く受け入れ、理解しようとしてくれた。国対国、政府対政府のレベルでは、解決が困難なこともあるが、個人対個人は互いに分かり合おうとすることができた。歓迎会では、日本語であいさつをしてくださったり、日本の歌を歌ってくださったりした。食を共にしたり、話をしたりする中で、生活を知ることができた。

また、韓国教育の中の ESD の理念を感じることができた。創意性・自主性・相手を競争相手としてみるのではなく、ともに歩む相手とみることというキーワードは、大変印象に残った。そのために、取組みとして読書教育やきれいな言葉の教育が日々の実践が取り入れられていた。まだまだ、受験という課題もあり、完全に創意性・自主性に向かうことは困難なように感じたが、それは、我が国においても同じ課題だと思う。文化が似ていて、課題が似ているからこそ、交流をすすめながら、課題解決に取り組んだり意見交換をしたりすることができるのではないかと思った。

教育事情と合わせて、韓国の文化に触れることは、私の教師としての使命感に大きく影響した。これまで、外国の生活は、小学校の児童にとってかけはなれているものとして考えてきた。それは、私があまりに無知だったからだ。しかし、世界遺産や DMZ を訪れる中で、韓国の悲しみに触れる場面が多々あった。日本との関係など、私たちは事実を知るべきだと思った。事実を知ることで、対象への興味がわき、自分と関係づけて考えることができると思う。アン

テナを張り巡らせてさえいれば、世界とも、どんなこととも私たちはつながっている。それは、自分が今回のプログラムで強く感じた。私たちは、その事実を教える、興味をもつきっかけを与える、自分と関係づけることができるような助言・支援をすることが使命だと思った。

持続可能な社会に平和は欠かない。持続可能な社会の担い手に最も必要なもののひとつに、対象をさまざまな視点でとらえ、受け入れることがあると思う。私は、本プログラムで、韓国をさまざまな視点から理解し、受け入れ自分の使命を感じることができた。

---

## 「楽しく」学ぶ相手文化

**曽我　雄司**

本プログラムで得られた成果を一言で言うならば、8日間という時間をかけることでじっくりと韓国社会や教育に対する理解が深められたことで、これまでの自分の見方がかなり穏健なものになったということである。専門教科が歴史（日本史・世界史）であることから、歴史認識を中心とした日韓関係の悪化をつねに意識してきた。韓国の人は歴史問題を中心に日本に何らかの敵意を持っており、それはぬぐい難いのだと、ある意味おびえながらこのプログラムに参加した。しかしプログラムが進むにつれて民間のレベルではやはり自分たちと同じように、この問題を重く受け止めつつもいかに良好な交流を続けるか模索していることがわかってきた。また当たり前と言ってしまえばそれまでだが、韓国の生徒たちも日本の生徒たちと同様に学び遊び生活しているのだということがわかった。まずは見落とされがちなこの単純な事実を持ち帰りたい。礼儀を尽くしたうえで、ちゃんとじっくりと対話することが可能であり、安易な情報に流されないで日韓が向き合うことが必要なことを伝えたい。

プログラム応募当初、課題としていたのは、韓国における生徒会活動や生徒同士の国際的な交流を通じて人材育成を図るためのヒントを見つけること、専門教科である歴史の分野に反映すべく現地での知見や経験を深めることであった。

このうち前者については、最初の訪問校である保聖女子中学校においてみることができた。会場での接待や校内の誘導などをしてくれたのは生徒会のメンバーであり、また同校内におけるESD活動の中核となっていたのは生徒会であった。月1回の地域社会での奉仕活動などESD活動を主導する一方で、どの程度自治的なことができるのだろう、そもそも組織としてはどうなっているのかなど疑問があったため、午後の懇談会では質問させていただいた。選挙制度については日本と同様であるが、生活指導について自分たちで裁判を行う摸擬自治法廷を開くなど、生徒たちがかなり強い意識を持って活動に参加していることに驚かされた。とりわけ印象的だったのは、昼食時に生徒会のメンバーがメッセージボードを持って食堂に立ち、ESD活動についてアピールをしている姿であった。教師の強制によらず活動を自発的に進めていく姿勢は日本でも取り入れていきたいものである。

後者については、積極的に対話という形での実現は難しかった。景福宮など文化遺産の見学とレクチャーを受けることで得られた知見を授業へフィードバックしたい。また空き時間を見つけてソウル・パゴタ公園に行った。ここは1919年の三・一独立運動の勃発の地である。もう少し愛国的な雰囲気の場所かと思っておそるおそる訪れたが、至って普通の公園であったことに肩透かしを食った気分になった。それでも石造・石碑が入口にあり、目標としていたレリーフは奥の方にひっそりとあった。ひととおり写真を撮り終わったので、授業で活用したい。

オリエンテーション参加後、力を注いだのは原州女子高校での授業の準備であった。言葉の通じない韓国の高校生に日本文化の何を紹介すればよいのか、どうすれば理解してもらえるのかなど非常に悩んだ。日常の授業では、画像や実演を入れてきたので、それを応用しながら臨んだ。日本でできることが、韓国では通じるかというのも課題であった。結果としては、大成功であったと思う。授業を受けた生徒たち本来の反応の良さもある（生徒たちが、自分をとても歓待してくれたことはとてもうれしかった）が、現在の名古屋の街の写真は生徒の興味を引いたし、実際に浴衣を着てみることはとても楽しかったようである。「楽しい」を通じながら、理解を深めさらに奥深いところへ持っていければよいというのがいつもの自分の授業である。今回、理解を深める段階まで進めたとは思えないが、「楽しい」体験を生徒たちにしてもらうことで日本文化に興味をもらうことはできたのではないかと思う。

## 世界とつながるESD
**高垣　大介**

本プログラムに参加し、貴重な経験ができた。今回プログラム参加した本来の目的は、ユネスコスクールとして「里山文化」という視点でESDを進めている本校との交流開拓や、韓国のESDの実践視察であった。実際は、韓国の教育現場の視察や説明の場が多く、ユネスコスクールの学校においてもすでに日本の他地域との交流が行われている場合が多く、ESDの面ではなかなか目的は達成できなかったかもしれない。しかし、実際には、韓国という他国の教育やそのシステムを見聞し、韓国の教職員と交流し、日本各地の先生方と交流し、充実した時間を過ごし、多くのものを得ることができた。大きな成果としては以下のような２点である。

１点目は保聖中学校での授業実践である。このプログラムでは、準備段階から、自国の文化を考え直し他国へ伝えるよりよい内容や方法を考えた。そして、どのようにすれば韓国の生徒が、日本に関心をもってくれるのか考えた。そして未来を考えたとき、どうすれば日本とのつながりをもちたいと思うのかまで考えていた。気づくと、この過程自体がESD的であり、自分自身がESDの授業を組み立てていることに気付いた。

当日、緊張や心配があったが、韓国の生徒の反応は大変よく、うなずいてくれたり歓声あげてくれたりした。日本の風景や、文化にも関心をもってくれていたように思える。これをきっかけに、もし日本を身近に感じてくれたり、将来日本との関係をよりよいものにと考える大人になってくれたりしたらよいと考えることができた授業であった。「はじめて韓国にきました」と話した時の「ウエルカム」とクラス皆で叫んでくれたことがとても印象的で、この自然に受け入れようとしてくれる感覚がどのように作りだされているのか、韓国の教育、保聖中学校の教育にも興味を持つことができた。私自身一人の教師のキャリアとして考えてみても、外国での授業実践は、収穫の多い大変意義深いものであった。

２点目は、ホームビジット、並びに韓国教員との交流の機会である。韓国の教員と一緒に話しをする時間をたっぷりともち、教育についての話から、文化の話、観光まで多くのことを話すことができた。言葉が通じなかったり通訳の方に頼ってしまい、十分なコミュニケーションが取れたかは心配だが、会話の中で得た情報はとても大切なことばかりであった。一番に感じるのはやはり、自分の学校や生徒児童の話になると、夢中になって話す姿である。世界中どこでも子供に対する教師の姿勢は同じと感じた。そして、授業がうまくいかない話や訪問校とは別の一面をもった韓国の学校の話も興味深く、教員の苦労も共有できた。この交流で感じたことをきっかけに、もっと関係を深めたいと感じたのはもちろんであるが、実際には職種が異なったり、ユネスコスクールではなかったりと、今後につなげることができないのが大変残念であった。

以上２点が成果であるが、この韓国との交流、韓国の教諭との交流こそが、まさに国際交流であり、世界とつながるESDであった。ESDを自らが体験できた機会であった。文化や、歴史、環境を考えながら、今を考え韓国の先生方とつながりをもてたこと、そしてそこで考え学んだことを、これからのESDや、学校での授業、児童指導で生かしていきたい。

## 「幸せ教育」と挑むべき課題
**高橋　勝也**

（１）韓国教育における自由学期制の導入：講義

「韓国教育の最新改革動向」の講義は一教育者である私に大きな影響を与えた。いつの時代、どの国においても改革には大きなエネルギーを費やす。簡単に事が進むことはまずなく、多くの反対意見と対峙しながら突き進められていることを推察する。そのようななか、一部の学校に限らず、全国家的に中学校に変革を与えようとする自由学期制の導入が推進されていることに、韓国政府とすべての関係者に敬意を表したい。自らも日本の教育者として、勇気をいただいた感がある。

夢と才能を育てる「幸せ教育」の構築に向け、自由学期制の導入に踏み込んでいることが素晴らしい。これは、日本での教育改革にも一助になろう。討論、実習中心の授業を運営して、学生の自発的な参加を推進することは、日本の教育でも必要とされていることの一つである。そのため、注目に値する。このプロジェクトの成功を切に祈っている。また、数年後にどのような結果をもたらいているのかを調査することを忘れない。

（２）厳しい大学受験競争という実態：原州女子高等学校

上述したように韓国の教育改革は積極的に進められている。韓国教育開発院が示した夢と才能を育てる幸せな教育、江原道教育庁が示した幸せな学校、共にする江原教育など理想的な教育改革が進行中である。

一方、ホームビジットで訪問した韓国家庭の高校一年生男子が、ソウル大学に合格するための勉強が過酷であるとの本音を発すると、一教育者として胸騒ぎした。加えて、原州女子高等学校において、放課後の自学自習が夜10時までに及ぶこと、そのあと塾に通う生徒もいる実態に触れ、日本の教師として衝撃を覚えた。一日の睡眠時間が数時間程度となれば、懸念を持たざるを得ない。

国家による教育制度改革と生徒の学習状況の実態の乖離を受容し、少しでも埋め合わせることが、日本や韓国に限らないすべての教育関係者が挑むべき課題であろう。「幸せ教育」という方針を掲げたとしても、一人ひとりの生徒が本当に幸せになっているのかと図るのは簡単ではない。崇高な理想を語った裏側に悲惨な現実が存在すれば、許されるものではない。よって、理想と現実をしっかりと見据えるバランス感覚が重要になってこよう。

一つの例として、日韓両国の最重要課題ともいえる大学入試改革で考えたい。とうとう日本でも大学入試センター試験にメスを入れる改革が進められようとしている。従来の一発勝負型ではなく、高校三年間で複数回に及ぶ到達度テストを導入しようとするものである。賛否両論が入り混じる議論がなされているが、大学入試の改革は高等学校だけでなく、中学校、小学校の教育にも影響を与えるものである。韓国の実態を踏まえれば、生徒の目線で改革を進めていくことで、大きな前進につなげていけるかもしれない。日韓両国が互いに教育改革に努力して、その成果を共有できれば、さらなる日韓交流、日韓友好が進むに違いない。微力ながら、その一翼を担いたいと考えている。

---

## ESDの取組みへの新たな期待

**手塚　美代子**

○　はじめに

本プログラムを通して韓国教育の今と未来、光と影を知ることができた。このことは、これからの教育実践において得がたい情報となっていく。また、学校訪問やホームビジット等を通して、韓国の教員や生徒、ACCUの方々、通訳の皆さんとの直接の触れ合いや対話により、韓国とのつながりと韓国への親近感を強めることができた。本プログラムでの成果を生かし、韓国との交流を進めるとともに、ESDの実践の充実につなげていきたい。

○　参加のねらいと効果

本プログラムへの参加目的は、ESDの韓国における取組みを知り、これからの教育実践に生かしていくことで、現任校の教育の質的向上を図ることにあった。世界的教育理念としての「ESDの10年」がどのような成果をもたらし、どのような実践が積み上げられているのかを、教育先進国である韓国の学校訪問を通して見聞きし、ESDの「グッドプラクティス」の実現に役立てていくのが主なテーマである。そのためにも、韓国の教員や学校・機関等と直接触れ合う機会を得ることで、韓国との教育交流を進めていくきっかけをつくっていきたいと考えている。

ESDは、各国・地域の独自性を重視しており、学際的であることから普遍的モデルは存在しない。訪問した2つのユネスコスクールでは、経済的正義の尊重、人権尊重、多文化・国際理解、環境教育などを基底価値とし、地域に根ざす独自の文化や社会的背景・歴史などを重視した実践が見うけられた。ESDが重視する「相互のつながり」においては、国際理解教育を核とした実践を行っており、国内外でのボランティア活動や日本の小学校との10年以上にわたる交流活動を続けている。このこと自体十分な成果ではあるが、これらの活動が「グッドプラクティス」となり得ているのは、活動の意義を児童・生徒や保護者、関係者が理解し、学校の特色として教育課程の充実につながるよう位置づけているからであろう。自校において参考としていきたいのは、ESDの取組みを限られた教科や意欲ある一担当の実践ではなく、学校経営として組織的・体系的に位置づけている点である。行政や関係機関など学校外の協力パートナーや地域・海外ネットワークの構築、予算措置などにおいて学校経営の一環としてESDの推進を図りたい。一方で、訪問校の教育実践が充実していることは実感できたものの、具体的にESDで育成するコンピテンシーやESDの評価について、韓国の実情を知ることができなかったのは残念である。

本プログラムをきっかけとして韓国と顔の見える関係を構築していきたいと考える。今回知り合えた学校・教員とのメール交換や互いの情報交換を通して、学校間の交流に繋げられたらと考えている。帰

国後に視察報告を行ったところ、韓国の教育改革や学校環境に多くの教員が興味を抱き、韓国との共通点や差異を知ることで、日本の教育のよさや自分たちのすばらしさ、課題点に気付くことができたように思う。また、近くて遠い存在だった韓国とつながることで、失望感を抱かせる日本の学校教育に対し、教師自身が夢と希望をいだき、教師としての自信をもつことにつながるのではないかと感じる。そうした意味においても、また、今後の実践においても、本プログラムが意義深いものとなっていくと考える。

○　韓国の教育からの示唆

厳しい受験競争とIT、そしてワールドクラスの学力をもつ韓国が、あらたなるパラダイムによる教育改革を進めていることに驚きと期待を感じる。子どもたちに「夢と才能」をはぐくみ、「幸せ教育」を目指すという理念は、かつての日本を彷彿させる印象もあるが、決して日本の追随ではなく韓国独自の方向性を導き出すにちがいないと思う。この「幸せ教育」は、ESDの理念である持続可能な未来の担い手づくりにもつながるものであろう。個々人の幸せのために学校教育が担うべき役割と責任は何か、未来を担う子どもたちをどう育てるべきかを、韓国の教育視察を通じてあらためて考えさせられた。そして、日本と韓国の差異を超えた「つながり」がESDの「グッドプラクティス」を実現するのではないかと感じている。

韓国の学校を見て、まさに「教育は施策なり」と実感する。羨ましいばかりに充実している教育環境だが、視察するなかで、日本の教育は教師の質の高さと自助努力によって維持されていることを再認識できた。これからは、両国の独自性と良さを共有化し、また、日本国内の学校とつながりながら、教育実践を行っていきたいと考える。

---

## 韓国の教育はどう変わっていくか

**山手　喜史**

プログラムの中で、小・中・高と異なる年代の学校を視察できた事で、韓国の体系的な教育の考え方を見ることができた。小学校の段階から全教室に電子黒板が設置されているなど、日本で聞いていた韓国のICT教育の現状はもちろんだが、小学校の段階で高いレベルの英語の授業が展開されるなど、国際化に向けた言語に対する取組みがとても進んでいることにも驚いた。

また、学校だけではなく、教育庁に訪問できた事で、政府の進める教育と、現場に求められている教育の理想と現実のギャップについて日韓共通だと感じることができた。日本の高校にも大学受験と言う厳しい壁があるが、韓国の大学受験は日本の大学受験と比べ、もっと厳しいという話を以前から聞いていた。実際に高校に訪問して、22時まで学校が授業を行っていること、その後生徒は塾に行くなどの話を見聞きすると、それはけっして大袈裟な話ではないということが分かった。

高校の先生方との質疑応答の中で、22時までの授業など、日本ではやり過ぎと捉えかねられないような指導を行っていた。しかし、韓国ではそのくらいの指導をしないと保護者から学校が指導をしていないとクレームが入るという話を聞いた時は、日本と韓国の教育に対する考え方の違いを大きく感じた。韓国では高校生を子に持つ保護者からは、高校に対し大学受験に向けて厳しい指導が求められているという現実があるようである。しかし、教育庁での話では、これからは日本のゆとり教育のような教育にシフトしていき、現在の教育スタイルを変えたいと考えているようだ。日本でもそうだったが、ゆとり教育の考え方自体は、子どもの自主性、創造性などを育むための理想的な教育だと私自身も考える。しかし、日本でもその全ての取組みが上手くいったというわけではなかったと言う事からも分かるように、保護者の中には、ゆとりではなく自分の子供の大学合格を学校に求めている人も大勢いる事は確かで、そういった保護者の意見を本当に聞いているのか、大学合格を求められている高校の教員から本当の理解、賛同を得られているのかという疑問を感じた。韓国での現状の厳しい大学受験制度が残る限り、各高校では大学合格に向けての指導が保護者から求められ、小・中でゆとりを持った教育をすると、そのしわ寄せは高校にやってくる。大学入試制度が変わらない限り、高校でのゆとりを持った教育と言うのは難しいと感じました。これから韓国の教育がそれら保護者の希望、現場の立場を踏まえ、どのように変わっていくのか、大変興味を持った。

ソウル探訪やホームビジットでは韓国の観光も兼ねて、韓国文化に触れることができた。歴史的な文化の発展や、日常の韓国を知ることも国際理解の上で非常に重要な事と考える。今回初めて韓国を訪問させていただいたが、報道などで知っている日本で持っていた韓国へのイメージと、実際の韓国の人々

や感情には、報道されている部分だけではないという事を認識することができた。学校教育の中で英語授業がとても進んでいたが、実際にソウルの街に出てみると、学校教育では素晴らしい英語教育が行われているが、世代によっては英語が全く使えない事が気になった。韓国の中では世代や格差による学力の差が大きいのではないかと言う事も、実際に探訪する機会があった事で感じることができた。

今回、初めての訪韓と言うこともあり、韓国の教育のすべてを理解するというまでには至らなかったが、前述したような疑問を持つことができたことが、今回の訪韓の最大の成果だと考えている。

教室後方にある携帯電話の保管ボックス（保聖女子中学校）

教師用の電子黒板装置（原州女子高等学校）

忠清北道での食事会

KNCU の随行者

# ６．今後の活動予定

## 伝える

**◆職場・職員に伝える**

- 校内研修を通して ESD について知ってもらう。特別な取組みでなくとも普段自分たちが行っていることが ESD につながっていることを知ってもらい、意識して教育活動に取り組んでもらいたい。
- 本プログラムで得られた成果を様々な研修の機会を通じて校内や近隣校の教職員に具体的な教育実践の様子や資料を提示しながら伝えていく。
- 今回の研修で得たことを他の教職員に伝え、本校の有効な持続発展教育、国際理解教育の発展に貢献したい。具体的には、ホームルーム、受け持つ各授業、教員会議などで、今回の研修で知り得たこと、感じたことをプレゼンテーションする予定である。
- このプログラムで経験したこと、韓国の教育、子どもたちの様子、それらの素晴らしさについて、職員会議や児童集会、学校便りを活用し伝えたい。それをきっかけに、本校のユネスコスクールとしての活動や ESD への理解が深まり、活動がさらに活発になっていくことを期待したい。
- 今回の訪問プログラムで学んだことを学校職員に伝えることで一人でも多くこのプログラムへの参加を希望しそのための研修を積んでいってもらいたい。
- 韓国の教育事情を中心にプレゼンテーションしたい。特に英語教育や ICT 教育などの進んでいる面を紹介したい。
- 職員研修にて今回のプログラムの報告会を予定している。多くの職員が韓国をはじめとした海外の教育に触れる機会がほとんどないので、今回の経験を共有できるようにする。
- 栄養教諭として、本県の栄養教諭・学校栄養職員に経験したことを伝達し、日韓文化の理解を深めたいと考えている。

**◆児童・生徒に伝える**

- 今回、保聖女子中学校に本校の生徒が作ったスライドや日本紹介の英語原稿、折り鶴を持参した。韓国の生徒からも折り鶴と英語による感想文をいただいたので、本校の生徒に紹介したいと考えている。
- 韓国やそこに住む人々について正しい知識をもつことは、よい関係を築く上で不可欠であると考える。実際に話をし、触れ合い、自分で感じることなしにイメージを抱くことは危険である。これらの経験を児童に伝えたい。
- 自分の歴史授業において活用できる素材を多く得ることが出来た。景福宮や南大門、パゴタ公園のレリーフの写真などを提示しながら、今回見聞きしたことを授業の中で生徒たちに伝えていきたい。
- 担当している高校 2 年生および 3 年生の地理Bの授業において韓国を地誌で取り上げ、学校生活や街の様子などの写真を提示しながら、日本と韓国の共通性や特有性について関心を高める授業を展開することで、異文化理解の必要性について学ぶ機会を設けたい。ホームビジットでお世話になった韓国の清原高校ヨ・ハヨン先生と交流を続け、日韓の高校間でのスカイプを用いたインターネット会議などの実践を行うことで同年代の海外の生徒との交流について関心を高める授業を展開したい。1 年生では総合的な学習の時間を利用し、帰国報告会を行う。
- 自分が見てきた韓国という国、子どもたち、住んでいる人々について話し、マスコミで報じられているような一面だけではないことを伝えたい。またどれほど日本に興味・関心を持ち、日本語教育にも力を入れているかなどにも触れ、国際交流を行うには本当に色々な意味で近い国であることを伝えていきたい。もちろん難しく、難解な問題も両国間には存

在するがそういうことを考えたり、そのうえで自分たちのできる交流とは何かを考えさせる機会としてみたい。

**◆保護者・PTA に伝える**

PTA 研修会などにおいても報告し、保護者とも情報を共有し、共に考える機会としたい。

**◆その他の公共の場で伝える**

- 小松市ではユネスコスクールが 1 校しかないので、本市の学校での取組みと韓国のユネスコスクールの ESD 活動が多く共通していたことを紹介し、1 校でも参加してくれるようにしたい。
- プログラムで得た情報や知識を報告書にまとめ、韓国の最新教育事情・教育動向を神奈川県教育委員会に提出する。
- 神奈川県ユネスコ協会のセミナー等があれば、今回のプログラムの様子を発表したい。
- 地域レベルでは、校区の市民センターでの報告会を設定し、市レベルでは、教育センター等の研修にて学んだことを伝える場を設けていただき、日本と韓国の自文化、異文化について理解を深める機会を積極的に提供したい。
- 市全体の研修会をもち、ESD の視点で取り組んでいる韓国の学校の取組みを紹介し、自校の取組みの参考にしたい。
- 本プログラムの報告を全国地理教育研究会の機関誌「地理の広場」にまとめ、その成果を全国の地理教員に還元。東京都地理教育研究会の研究協議会でも報告を行い、機関誌「都地研会報」に前述誌と被らない内容を掲載する。執筆に携わった地理の教科書・資料集の改訂時には今回得た情報を書き加え、生徒たちに最新の韓国事情を紹介する。
- 本校文化祭の校内発表のオープニングで、全生徒・教職員に向けて韓国訪問の成果についての報告講演をする。

## 改善・新しい取組みに活かす

**◆ESD 活動に活かす**

- 2014 年 11 月に岡山市においてユネスコスクール世界大会が開催されるので、今後は日韓両国でユネスコスクールや ESD に関する成果を共有し、2015 年以降の取組み体制構築に生かしていきたいと考えている。
- 本校は ESD として、郷土の特産品を生かした学習を行っている。今回訪問した韓国の学校で行っている ESD を参考にし、児童が興味・関心をもって更に深い活動ができるよう、計画の見直し等を行っていく。
- 韓国では ESD の取組みを限られた教科や意欲ある一担当の実践ではなく、学校経営として組織的・体系的に位置づけている。それを参考にし、自校でも、行政や関係機関などの学校外の協力パートナーや地域・海外ネットワークの構築、予算措置などにおいて、学校経営の一環として ESD の推進を図りたい。
- いまだユネスコスクールの登録校が 0 である青森県において、初の登録に向けて尽力したいと考えている。
- 社会科でごみ処理について取り上げ、理解を深める。その発展として、総合的な学習の時間に、1 学期はごみ問題について自分で課題を立て、調べ、学習する。自分の家のごみの量やごみを減らす工夫も調べ、その紹介を行う。2 学期は環境というテーマでごみ問題をきっかけに様々な問題について調べ、それに対して自分ができることを考え、実践する。3 学期にはその活動をまわりの人たちに紹介し、広める活動を行っていく。できれば、この学習で学んだことを韓国の学校とスカイプなどで紹介し合う。
- 本校は本年度開校された学校のため ESD の取組みがまだ進んでいないので、ESD の視点で学んだことを具体的に説明し、これからの本校での ESD の発展につなげていきたい。また、ユネスコスクールの紹介や目的についても説明し登録を進めたいと考えている。
- 今年の 11 月 30 日に開催される ESD の全国大会成功に向けて、研究奨励校はもちろんのこと、稲城市立小・中学校の ESD を推進するための研修会を充実させる。その中に、国内の学校間交流や韓国との交流を取り入れたい。来年の世界大会までに、稲城市立小・中学校全てがユネスコスクールとなり、稲城と日本の良さを世界に伝え、地球規模で取り組む課題を、他国の学校と共に取り組むコーディネートをしたい。
- 生徒会の活動として参考にできそうなのは、エネルギー節約・消灯運動、地域奉仕活動などである。特に消灯運動は、すぐにでも始められるのではないかと思う。

**◆教科授業に取り入れる**

- 今回訪問して、実際に体験して見てきた韓国のことを、写真をまとめたプレゼンテーションを作り、生徒達に伝えていきたい。生徒達が少しでも、隣国である韓国に興味を持ち、また友好関係が築けるよう支援していきたい。
- 韓国語を第二外国語として学習する生徒に、韓国ユネスコ委員会と連携し、更なる学習環境を整備し、学習する機会を充実させてゆくための方策を模索し、近い将来、高校との相互交流をして行きたい。
- 英語学習では歌や単語などを電子黒板や TV で表示したり、様々な教科での教材の表示をしたりするなど ICT 機器を効果的に活用した授業展開をする。

- 社会科の学習として、韓国の歴史や日本と韓国の関係を学ぶ内容につなげたい。韓国で撮った写真とともにこのプログラムで実際体験したことを話すことで、子どもたちに友好的に韓国を理解し他国を尊重する気持ちを養いたいと考えている。このことが ESD の国際理解における、はじめの一歩につながってほしい。
- 社会科の授業において、日本と韓国の食や文化・スポーツ等の共通点や相違点を紹介し、互いの国の良さを認め合うことの大切さを伝えたい。
- 国際理解教育として、韓国の言葉や文化財や学校の様子など、写真や動画を交えながら児童に伝える。
- 小学校 2 年生には、生活科の学習を通して日本の伝統文化・日本の昔遊びを学習し体験する機会を設定していきたいと思っている。
- 3 年生の 2 学期の「総合的な学習の時間」を、国際・異文化理解教育を軸に組み立てる予定。その事前学習として、大阪の鶴橋・桃谷付近にあるコリアタウンでの校外学習の実施を考えている。
- 食育の授業では、韓国の文化交流授業で得た実態を児童と共有し、食文化を守ることの大切さを再認識する授業を目指したい。

**◆教材・指導計画に活かす**

- これから、本校での持続発展教育（ESD）の取組みを生活科や総合的な学習に明確に位置付けていく。特に 3 年生の学習の総合的な学習では「韓国の文化」を知ろうという単元があり、プログラムで学んだことを資料化し学校の財産としていく。
- 学校には充実した IT 設備の重要性を伝えたい。韓国では多くの学校が電子黒板やスクリーンを使い、先進的な授業を展開していた。特に語学教育では生の映像や音声を使うことは生徒の語学力向上にとても有効であることを実感した。
- 小学校英語のカリキュラムにおいては、韓国でのカリキュラムを参考に、まずは場面設定をしっかりして、使いたい英語・使える英語を教材化していく。
- 場面設定に視覚的な効果を加えるための教具をそろえる。韓国で見学させていただいた英語教育センターのミニチュア版を目指す。
- 所属校で取り組んでいる、「郷土の伝統・文化に親しみ継承・発展させ、国際社会で活躍する人材の育成」に本プログラムで得られた成果を反映しながら、他の教職員と協同して取り組んでいく。

**◆その他の取組みに活かす**

- 2013 年 10 月より新たにインドネシアからのインターン学生を受入れる予定であり、生徒との交流のあり方について、今回のプログラムで経験した各教育現場での取組みを生かしたいと考えている。具体的には、英語教室を参考に、インドネシアの習慣や文化を紹介する教室を作り、そこで放課後にインドネシアに関する特別講座を実施したい。
- アジア諸国等、近隣国の理解をねらいとした国際理解教育にも重きを置いて取り組んでいきたい。その取組みの一つとして、韓国の学校や子どもたちを紹介する学習を行う予定である。
- 韓国は実用的な英語教育が行われていて、国際的興味や意識が高い。そのためには、本校が 5 年前から文部科学省指定の英語教育研究を続けて行く一方、更にコミュニケーションツールとしての英語を、韓国で行っている実際的シミュレーション英会話のような形で学べるように、学校内に「イングリッシュセンター」的なものを作っていきたい。
- 今回のソウル世界遺産探訪でお世話して頂いた先生が、近隣大学に客員研究員として 9 月 1 日から来られている。（奈良教育大学　南先生）本校で韓国についての授業をして頂くことを相談中。
- 自分の授業で ICT が有効に活用できるよう工夫し、実践してみたいと考えている。

## 今の活動を継続する

- ESD の実践を積み重ねていくと共に、その実践例を熊野町や広島県などでの研修会等を通じて、広く発信していく。また、私自身のこれまでの ESD に向けた実践を、日韓両国の先生方と進めていきたい。「私のまちのたからもの」は、「私たちが暮らすまちのよさを多くの人たちにもっと知ってもらいたい。」という思いもち発信をすることで、自分たちの住む地域を愛し大切にする心を育てることを目指した学習活動である。「世界寺子屋運動プロジェクト」では、リーフレット作りや書き損じはがき回収に向けてのボランティア活動を行う学習活動を行っている。このように、共通のテーマで実践を積み重ねることで ESD を広げていければと考える。

## 韓国との交流を実施する

- 韓国と日本の学校間の交流も大切にしていきたい。韓国だけでなく、世界のユネスコスクールとの交流も積極的に行っていく。そして、子どもたちが ESD に興味・関心をもてるように努力していく。
- 現在、「ユネスコスクール」の申請を検討しており、韓国のユネスコスクールとの交流の機会が得られることを期待している。ぜひ韓国の学校ともインターネット(メールやスカイプなど)を通じて、教科や「総合的な学習の時間」で交流してみたいと思う。
- ユネスコスクールや本プログラムで構築できた教師間のネットワークを活用しながら、ESD を共通課題とした韓国の学校との交流が行えるような体制を構築していく。
- 今回研修に参加した先生方との情報を共有し、また、今回交流した学校と積極的にアポイントを取っていく中で、共通の課題や取組み、情報交換を行い、草の根レベルの交流からスタートしていきたい。将来的には交換留学プログラムなどを創設し、本校と韓国の生徒同士が触れ合える環境をつくることが理想である。
- 日本語の先生、趙先生とお知り合いになれたので、もし生徒が韓国についての質問があれば、趙先生に質問のメールを送るなどして、交流を図りたい。
- 事前学習を充実させたい。交流時期に限らず、国際理解や総合学習を通して交流のある韓国について知る・考える時間を継続的に設定したい。
- 将来的には学校間での交流ができればと思っているが、ホームビジットで訪れた先生方とはメールのやりとりが帰国後もできているので、長く続けられるとよい。
- ホームビジットが高校の校長先生だったので、本校の生徒が作った学校紹介のパワーポイントや、地元富士市の美しい湧水地域の紹介パワーポイントを送って、高校の生徒達に見ていただこうかと考えている。できたら、校長先生の高校からも紹介のパワーポイントが送られてくることを期待したい。そして、子ども達が学んでいる英語を活用できるチャンスとして、韓国の学校と交流の機会を持ちたいと考えている。全て英語で話すのは難しいが、自己紹介や学校紹介などは、5 年生の後半なら可能である。
- 韓国の小学校とのつながりを持ちたいと考えている。そのためにも交流できる学校を探していきたい。
- 韓国の先生方と本校職員と小グループで交流を実施したい。できれば、テレビ会議で互いの児童同士が交流する機会をもちたい。
- 「教材化」以上に「実際に交流すること」の大切さを痛感した。テレビ会議システムやスカイプ等、様々な間接的な方法が考えられるが、可能であれば直接的に交流することを考えていきたい。言語的な制約はあるが、まずは教員が、そしてそこから子どもたち同士が交流することを計画していきたい。
- 今回のスカイプ交流である程度の下地ができたので、今後はそれをさらに発展させていきたいと考えている。具体的には現在アメリカの教員と進行中の「エネルギー消費量と幸せの関係」のプロジェクトを韓国の学校とも合同で実施し、日米韓の 3 か国共同のプロジェクトにしたい。それによって、より多面的に分析も可能になり効果も大きくなると考えている。
- 生徒同士の交流としては、今回授業を実施した生徒から日本の高校生へのメッセージを頂いているので、その返事を書き、スカイプ交流と並行して、手紙やビデオレターの交流も続けて行きたい。
- SNS などを利用した生徒間同士の草の根レベルの交流をする機会を作っていきたい。

## 受け入れに生かす

### ◆次回(2014 年 1 月)の韓国教職員招へいプログラムにむけて

- 韓国の先生方が来日した際は、学校で受け入れたり、ホームビジットに来てもらったりしながら日韓の文化交流を行いたいと思う。
- 韓国の教職員にぜひ小松市にも来ていただき、日本の学校の様子や市の取組みを紹介したい。受け入れ校候補となるように準備もしている。
- ぜひ積極的に受入れたいと思う。本校には韓国出身の生徒が多く、韓国・朝鮮語ができる生徒もいる。第二外国語で韓国・朝鮮語の授業も開講している。「総合的な学習の時間」では韓国・朝鮮語のグループがあり、韓国の言語や文化についても学習している。受け入れの際にはきっと充実した交流ができると思う。
- 奈良市では教職員の受け入れ準備をしている。韓国から奈良市教育委員会への訪問があれば、奈良市における教育

の説明だけでなく、本市におけるESDの取組の説明も行いたいと考えている。できればプレゼンテーションの文字だけでも韓国語で対応できるよう検討したい。

- 教職員との教育交流では、懇談会の時間を多く設定したいと思った。教諭の立場としては、全体会よりも一教諭と話し理解を深めたいと思った。
- 訪問先で先生方に授業や話をしてもらえたことで、生徒の多文化理解を深めるというのは意味のあることだと感じた。また来訪された先生にとっても、ただ見るだけではなく授業をしてみることは良い経験となると思う。研究部や教務部などに組み入れが可能か打診してみたい。
- 児童教職員による共通理解のもと、韓国の教職員をぜひ招き、日本（東京都稲城市）の素晴らしさを伝えるとともに、本校が推進するESD活動をぜひ見ていただき交流したい。本校のESD計画や授業実践が、どのようにとらえられるかも興味深い。稲城に残る稲作文化や里山の環境から学ぶ本校のESDの実践を、ぜひ他県や他国との関係の中で広めてみたいと考えている。
- 奈良市に韓国の先生が来られた時には自校にお招きし、児童および教職員と交流できる場を作れるよう提案したい。
- 訪問の際には、韓国の先生方に異文化を紹介する授業の実施をお願いしたい。
- 訪問受入校となった場合、今回のプログラムの参加経験を生かした交流を行いたい。奈良市では世界遺産、地域遺産をテーマに、全校で様々な機会に実践していることを伝えたい。そして、日韓両国のESDの取組みとして、食文化体験は必須内容といえる存在である。韓国の文化交流授業の体験を伝え、日韓児童の課題を共感したいとも考えている。

**◆その他の取組み**

- 「中国教職員招へいプログラム」を11月に受け入れて、韓国に続いて中国についても児童に理解を深めさせる。
- 本校1年生の生徒が毎年、韓国ソウルに英語研修に出かけているが、そのプログラムとの融合を図り、学校間交流を実施したい。
- 奈良市は、慶州と友好姉妹都市であることから、慶州からの教職員の訪問も大歓迎である。韓国の学校と日本の学校の継続した交流ができればと考えている。
- 韓国の高校との交流も新たなラインとして開拓できればと思う。勤務校は、名古屋大学キャンパス内にあることから韓国人留学生との交流の場などを持つことも可能である。少しずつ日韓の生徒交流の下地を作り、学校・生徒間の交流を進めていけばよいのではないかと考えている。
- 今回、韓国の教職員や学校と交流をもてたことにより、研修旅行の実施先に韓国を追加することも含め、交流を続けられればと思う。また、研修旅行以外でも姉妹校や交換留学等定期的な交流をもてるようにしたい。
- 学校内での個人的な活動にとどまらず、学校全体、もしくは市内へと活動の視点を広げていきたい。より韓国との交流を積極的に行い、「見える形」での交流、「触れる形」での交流を推進していきたいと考えている。
- 個人でも、歓迎会やホームビジット、都内探訪等、微力ながらできる限りの貢献がしたい。
- 垣坪小学校を訪問させていただいたことをきっかけに、今後、児童間での手紙の文化交流を進めていく。さらには、TV会議など児童が直接交流できる機会を持ちたいと考えている。
- 自分自身、韓国への興味が高まったので、韓国語やハングルの勉強を始めてみたいと思っている。

# 資料

## ◆資料１.

### 韓国政府日本教職員招へいプログラム

（2013 年 8 月 22 日－8 月 29 日：韓国　ソウル、忠清北道、江原道）

### 実　施　要　項

1.　背景

2000 年 3 月、戦後の文部大臣として初めて、中曽根弘文文部大臣(当時)が訪韓し、文龍鱗（ムン・ヨンリン）韓国教育部長官（当時）との会談でなされた招請に基づき、文部科学省の協力のもと、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、2001 年より韓国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施してきました。当初は「ACCU・ユネスコ青年交流信託基金事業」として、2003 年からは「ACCU 国際教育交流事業」として国際連合大学の委託を受け、これまで約 1,550 名の韓国教職員が日本を訪問し、我が国の教職員との交流を深め、日韓両国間の相互理解と友好の促進に貢献してきました。

2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年 10 名程度の日本教職員を韓国へ派遣してきましたが、これら交流事業の成果が韓国政府に高く評価されることとなり、2005 年からは、韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして参加人数を 20 名へ倍増し日韓教職員相互交流が実施されました。2008 年のプログラムからは、招へい人数がさらに倍増され、さらなる交流の発展を目指すこととなりました。

2.　目的

（1）韓国の初等中等教育における教育制度および教育課題への理解を深める。
（2）学校および地域社会における国際理解教育（EIU）と持続発展教育（ESD）の好事例を探る。
（3）教育経験を交換する機会を提供し、日韓両国の教育の質を高める。
（4）日韓教職員のネットワーク構築・強化に寄与する。

3.　活動内容

（1）小・中・高・特別支援学校や教育施設訪問を通じて、国際理解教育（EIU）や持続発展教育（ESD）を含む韓国の最新の教育政策・現状の視察
（2）訪問先における韓国の教職員・児童生徒との交流、日本の文化や ESD の紹介
（3）日韓の教職員が ESD をテーマに意見交換を行う、約半日の「第 7 回 ESD 日韓教職員フォーラム」への参加、および発表
（4）世界遺産見学やホームビジットを通じた、韓国文化の理解

## 4.　日程概要

2013 年 8 月 22 日（木）～8 月 29 日（木）（8 日間）
7 月 26 日(金)に都内にて事前オリエンテーションを実施

| 各自参加にむけて準備 | | |
|---|---|---|
| 8 月 22 日（木） | 東京→ソウル | オリエンテーション（KNCU）<br>開会式<br>歓迎交流会 |
| 8 月 23 日（金） | ソウル | 韓国の教育事情についての講義<br>ESD 日韓教職員フォーラム |
| 8 月 24 日（土） | ソウル | 学校訪問 |
| 8 月 25 日（日）<br>8 月 26 日（月）<br>8 月 27 日（火） | 忠清北道（チュンチョンボクド）<br>または<br>江原道（カンウォンド） | <2 グループに分かれて地方へ移動><br>学校訪問<br>教育・文化関連施設訪問<br>教育長表敬訪問<br>ホームビジット<br>情報共有会 |
| 8 月 28 日（水） | ソウルまたは仁川（インチョン） | <ソウルまたは仁川（インチョン）へ移動><br>報告会<br>閉会式 |
| 8 月 29 日（木） | ソウルまたは仁川（インチョン）<br>→日本各地 | 出発準備<br>福岡、大阪、東京へ帰国 |

## 5.　参加者

下記の教職員、随行員併せて 50 名を参加者とする。
（1）2012-2013 年韓国教職員招へいプログラム受入れ教育委員会が推薦する教職員
（2）上記プログラムの東京近郊受入れ校の教職員
（3）2013-2014 年韓国教職員招へいプログラム受入れ予定の教育委員会が推薦する教職員
（4）公募により選抜された教職員
（5）国際連合大学、日本ユネスコ国内委員会を含む文部科学省、および ACCU の職員

## 6. 参加資格

（1）日本国民であること。
（2）所属する学校等から推薦を受けた初等中等教育教職員（教育行政職員を含む）であること。
（3）ユネスコスクール、国際理解教育（EIU）または持続発展教育（ESD）の活動に携わっている者、または高い関心を持っている者。
（4）プログラム参加前の準備、プログラム中ならびに参加後も継続して、ESD に関連した韓国との具体的な交流の推進に寄与できること。
（5）健康で、オリエンテーションを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
（6）団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的に参加ができること。
（7）過去の本プログラムに参加がないこと。

## 7. 評価と報告

（1）派遣期間中
- 評価票記入(日本語または英語で記入し、韓国ユネスコ国内委員会へ提出。)
- 情報共有会（日本側参加者のみによる）への出席。
- 韓国教職員を交えての報告会への出席・発表。

（2）帰国後
- 所定の期日までに、各自、プログラム参加の報告を ACCU に日本語で提出する。
（ACCU による編集の後、実施報告書へ掲載予定）

- 所定の期日までに、各グループの報告をACCUに英語で提出する。
（ACCU から韓国ユネスコ国内委員会に送付後、韓国ユネスコ国内委員会による実施報告書へ掲載予定）

## 8. 旅費等諸経費

（1）韓国ユネスコ国内委員会が下記について負担する。
- 往復航空運賃：日本と韓国の国際空港間のエコノミークラス航空券
- 韓国内の移動に係る経費、宿泊、食事：但し、公式行事のない日の夕食については参加者が日当から支出することとする。
- 日当：8月22（木）日から8月28日（水）の7日間分。

（2）ACCUが下記について負担する。
- 日本国内交通費：事前オリエンテーション日の会場（東京）往復の交通費、出発日の空港までの交通費、および帰国日の到着空港からの国内交通費の定額（ACCU の規程に準ずる）。
- 日本滞在費：オリエンテーション前日の宿泊が必要な参加者について、日当の定額および宿泊。出発前日の宿泊が必要な参加者について、日当の定額および宿泊。帰国日 8月29日の日当。

（3）各参加者は、下記について負担する。
- 海外旅行損害保険：各参加者は、プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において、海外旅行損害保険に加入しておくこと。
- 上記（1）、（2）以外の諸経費

（4） 旅券と査証について
- 旅券（パスポート）：入国時に3ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。
- 査証（ビザ）：一般旅券の場合は、ビザの取得は不要。

## 9. 通訳

韓国国内でのプログラム期間中は日本語と韓国語間の逐次通訳を配置する。

## 10. このプログラムに関する照会先

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）
人物交流課（担当：米島、課長：佐々木）
〒162-8484 東京都新宿区袋町6番地 日本出版会館
TEL: 03-3269-4498 FAX: 03-3269-4510
E-MAIL: yoneshima@accu.or.jp, accu-exchange_ml@accu.or.jp

## ◆資料２.

### 韓国政府日本教職員招へいプログラム
（2013 年 8 月 22 日－8 月 29 日：韓国　ソウル、忠清北道、江原道）

### 日程

| 日付 | 宿泊先 | 時間 | 活動 |
|---|---|---|---|
| 8 月 22 日（木） | ソウル | 9:00<br>11:30<br>13:00-14:00<br>14:00<br>15:00-16:00<br>17:00-19:00 | 東京成田空港発（OZ107）<br>仁川国際空港（ソウル）着<br>昼食<br>ホテル到着、チェックイン<br>韓国ユネスコ国内委員会によるオリエンテーション<br>開会式及び歓迎夕食会<br>〈ソウルロイヤルホテル泊〉 |
| 8 月 23 日（金） | ソウル | 9:20-14:30<br>9:50-14:30 | 〈2グループに分かれ学校訪問〉<br>A：ソウル大学校師範大学附属女子中学校訪問（ユネスコスクール）（学校給食）<br>B: 保聖女子中学校訪問（ユネスコスクール)(学校給食)<br>〈ソウルロイヤルホテル泊〉 |
| 8 月 24 日（土） | ソウル | 9:00-9:30<br>9:30-10:50<br>11:00-17:00 | 韓国 ESD 及び ASPnet についての紹介<br>韓国の教育講義: 韓国教育の最新改革動向<br>UNESCO 韓日教師ソウル探訪<br>・グループ別探訪計画協議<br>・世界文化遺産及び ESD 現場訪問<br>〈ソウルロイヤルホテル泊〉 |
| 8 月 25 日（日） | A:忠清北道 | 8:00<br>10:00-12:00<br>12:00-13:00<br>13:00-14:00<br>15:00<br>15:00-16:00<br>16:00-20:30 | 〈2グループに分かれ地方へ移動〉<br>ソウル出発　→　忠清北道へ移動<br>清南臺及び大清ダム訪問<br>昼食<br>文義文化財團地訪問<br>ホテル到着、チェックイン<br>ホームビジット準備<br>ホームビジット<br>〈ラマダプラザチョンジュホテル泊〉 |
| | B：江原道 | 8:00<br>11:00-15:00<br>15:00-17:00<br>17:00<br>17:00-17:30<br>17:30-21:30 | ソウル出発　→　江原道へ移動<br>韓国 DMZ 平和生命園、乙支展望台、第 4 トンネル訪問<br>春川市へ移動<br>ホテル到着、チェックイン<br>ホームビジット準備<br>ホームビジット<br>〈ベニキア春川ホテル泊〉 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 8月26日(月) | A:忠清北道 | 09:00-14:00<br>14:30-15:30<br>16:00-17:30<br>18:00-20:00 | 上黨高等学校訪問(ユネスコスクール)(学校給食)<br>ハングルサラン館見学<br>忠清北道教育庁訪問<br>歓迎夕食会<br>〈ラマダプラザチョンジュホテル泊〉 |
| | B:江原道 | 08:40-9:50<br>10:00-14:00<br><br>15:00-17:00<br>17:30-19:30<br>19:30-21:00<br>21:00 | 江原道教育庁訪問<br>春川教育大学校附属小学校訪問<br>(ユネスコスクール)(学校給食)<br>清平寺訪問<br>歓迎夕食会<br>原州市へ移動<br>ホテル到着、チェックイン<br>〈ベニキアホテルビーズイン泊〉 |
| 8月27日(火) | A:忠清北道 | 09:00-14:00<br>14:30-16:30<br>17:30-18:30 | 垣坪小学校訪問(学校給食)<br>清州古印刷博物館及び清州市韓国工芸館見学<br>グループプログラムレビュー会議<br>〈ラマダプラザチョンジュホテル泊〉 |
| | B:江原道 | 09:30-14:00<br>14:00-15:30<br>16:00-18:00 | 原州女子高等学校訪問(学校給食)<br>グループプログラムレビュー会議<br>雉岳山国立公園訪問<br>〈ベニキアホテルビーズイン泊〉 |
| 8月28日(水) | 仁川 | 9:00-11:30<br>11:30-12:30<br>14:00<br>15:00-17:40 | 仁川市へ移動<br>昼食<br>ホテル到着、チェックイン<br>報告会及び閉会式<br>〈ベストウェスタンプレミアソンドパークホテル泊〉 |
| 8月29日(木) | | 14:00<br>14:10<br>15:10 | 仁川空港発、福岡空港へ (OZ134、15:50福岡着)<br>仁川空港発、関西空港へ (OZ114、15:50関西着)<br>仁川空港発、成田空港へ (OZ106、17:30成田着) |

# ◆資料３.

## 2012-2013年 韓国政府日本教職員招へいプログラム
## 参加者リスト

### <Aグループ>

### 1. 参加教職員（23名）

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | A-1 | 会坂　友子 | AISAKA　Tomoko | 東京都立王子総合高等学校（東京都） | 主任教諭 |
| | A-2 | 秋山　満代 | AKIYAMA　Mitsuyo | 静岡県立吉原工業高等学校（静岡県） | 教諭 |
| | A-3 | 猪股　豪 | INOMATA　Goh | 青森県立三本木高等学校（青森県） | 教諭 |
| | A-4 | 鎌田　彰 | KAMATA　Akira | 千葉県立流山おおたかの森高等学校(千葉県) | 教諭 |
| | A-5 | 河内　節子 | KAWACHI　Setsuko | 神奈川県立横浜国際高等学校（神奈川県） | 教諭 |
| | A-6 | 風張　敬 | KAZAHARI　Takashi | 八千代市立新木戸小学校（千葉県） | 教諭 |
| グループ長 | A-7 | 小島　源一郎 | KOJIMA　Genichiroh | 奈良市立東市小学校（奈良県） | 教頭 |
| | A-8 | 永石　利恵 | NAGAISHI　Toshie | 八千代市教育委員会（千葉県） | 指導主事 |
| | A-9 | 長谷　圭城 | NAGATANI　Tamaki | 奈良女子大学附属中等教育学校（奈良県） | 教諭 |
| | A-10 | 根石　雅仁 | NEISHI　Masato | 興本扇学園足立区立扇中学校（東京都） | 教諭 |
| | A-11 | 西川　りか | NISHIKAWA　Rika | 松原市立三宅小学校（大阪府） | 教諭 |
| | A-12 | 西野 正晃 | NISHINO　Masaaki | 橋本市立紀見東中学校（和歌山県） | 教諭 |
| | A-13 | 榊　洋史 | SAKAKI　Hiroshi | 橋本市立あやの台小学校（和歌山県） | 教諭 |
| | A-14 | 坂下　和之 | SAKASHITA　Kazuyuki | 小松市立安宅小学校（石川県） | 教諭 |
| | A-15 | 品田　大介 | SHINADA　Daisuke | さいたま市立高砂小学校（埼玉県） | 教諭 |
| | A-16 | 髙瀬　浩司 | TAKASE　Koji | 千葉県立特別支援学校市川大野高等学園（千葉県） | 教諭 |
| | A-17 | 竹之内　勝 | TAKENOUCHI　Masaru | 稲城市教育委員会（東京都） | 指導主事 |
| | A-18 | 谷口　喜美 | TANIGUCHI　Kimi | 橋本市立紀見小学校（和歌山県） | 教諭 |
| | A-19 | 友部　尚子 | TOMOBE　Naoko | 稲城市立稲城第六小学校（東京都） | 主任教諭 |
| | A-20 | 壷井　宏泰 | TSUBOI　Hiroyasu | 兵庫県立北須磨高等学校（兵庫県） | 教諭 |
| | A-21 | 浦西 洋平 | URANISHI　Yohei | 寝屋川市立第十中学校（大阪府） | 教諭 |
| | A-22 | 山中　淳代 | YAMANAKA　Atsuyo | 奈良市立伏見小学校（奈良県） | 栄養教諭 |
| | A-23 | 篠崎　佳弘 | SHINOZAKI　Yoshihiro | 渋谷教育学園幕張中学高等学校（千葉県） | 教諭 |

**3. 文部科学省同行（1名）**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| A-24 | 栗山　和大 | KURIYAMA　Kazuhiro | 文部科学省 | 初等中等教育局<br>初等中等教育企画課 企画係長 |

**3. 事務局（公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター）（1名）**

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| A-25 | 杉原　由美子 | SUGIHARA　Yumiko | 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター | 人物交流課　係員 |

# 2012-2013年 韓国政府日本教職員招へいプログラム
# 参加者リスト

## <Bグループ>

### 1. 参加教職員（22名）

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 団長 | B-1 | 阿部　宏史 | ABE | Hirofumi | 岡山大学（岡山県） | 副学長 |
| | B-2 | 石井　亜佐美 | ISHII | Asami | 八千代台東小学校（千葉県） | 教諭 |
| | B-3 | 浜中　真希 | HAMANAKA | Maki | 金沢市立泉中学校（石川県） | 教諭 |
| | B-4 | 東口　幸央 | HIGASHIGUCHI | Yukio | 小松市教育委員会（石川県） | 指導主事 |
| | B-5 | 平石　達彦 | HIRAISHI | Tatsuhiko | 神奈川県立有馬高等学校（神奈川県） | 教諭 |
| グループ長 | B-6 | 伊藤　英夫 | ITO | Hideo | 荒川区立尾久宮前小学校（東京都） | 校長 |
| | B-7 | 岩見　理華 | IWAMI | Rika | 兵庫県立芦屋国際中等教育学校（兵庫県） | 教諭 |
| | B-8 | 梶　弘樹 | KAJI | Hiroki | 熊野町立熊野第四小学校（広島県） | 教諭 |
| | B-9 | 唐川　和喜 | KARAKAWA | Kazuki | 北九州市立赤崎小学校（福岡県） | 教諭 |
| | B-10 | 木嶋　勇一 | KIJIMA | Yuichi | 市原中央高等学校（千葉県） | 教諭 |
| | B-11 | 大竹　優志 | OTAKE | Masashi | 慶應義塾高等学校（東京都） | 教諭 |
| | B-12 | 三浦　良人 | MIURA | Yoshito | 白石市立白石第二小学校（宮城県） | 教諭 |
| | B-13 | 毛利　康人 | MOHRI | Yasuhito | 奈良市教育委員会（奈良県） | 課長補佐 |
| | B-14 | 森下　まちこ | MORISHITA | Machiko | 橋本市教育委員会（和歌山県） | 指導主事 |
| | B-15 | 岡　泰子 | OKA | Yasuko | 橋本市立高野口小学校（和歌山県） | 教諭 |
| | B-16 | 柴田　祥彦 | SHIBATA | Yoshihiko | 東京都立国分寺高等学校（東京都） | 主任教諭 |
| | B-17 | 清水　沙織 | SHIMIZU | Saori | 横浜市立永田台小学校（神奈川県） | 教諭 |
| | B-18 | 曽我　雄司 | SOGA | Yuji | 名古屋大学教育学部附属中・高等学校（愛知県） | 教諭 |
| | B-19 | 高垣　大介 | TAKAGAKI | Daisuke | 稲城市立稲城第二小学校（東京都） | 主幹教諭 |
| | B-20 | 高橋　勝也 | TAKAHASHI | Katsuya | 東京都立桜修館中等教育学校（東京都） | 教諭 |
| | B-21 | 手塚　美代子 | TEZUKA | Miyoko | 佐賀市立本庄小学校（佐賀県） | 教頭 |
| | B-22 | 山手　喜史 | YAMATE | Yoshifumi | 福岡舞鶴高等学校（福岡県） | 教諭 |

**2. 国際連合大学同行（1名）**

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| B-23 | 秋葉　正嗣 | AKIBA | Masashi | 国際連合大学 | 大学院事務局長 |

**2. 文部科学省同行（1名）**

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| B-24 | 加茂下　祐子 | KAMOSHITA | Yuko | 文部科学省 | 国際統括官付<br>ユネスコ第二係長 |

**3. 事務局（公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター）（1名）**

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| B-25 | 米島　百合子 | YONESHIMA | Yuriko | 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター | 人物交流課　係員 |

# ◆資料４.

## 2012-2013 年国際教育交流事業 韓国政府日本教職員招へいプログラム
## 関係機関連絡先
## (2013 年 8 月現在)

### 1. 全体プログラム

**◆ユネスコ国内委員会/Korean National Commission for UNESCO**

事業本部教育チーム Education Team, Division of Programmes

住所:ソウル特別市中区明洞通り(ユネスコ通り)26 〒100-810
Address: 26 Myeongdong-gil(UNESCO Road), Jung-gu, Seoul 100-810 Korea
URL: http://www.unesco.or.kr/
Tel: 82 (0)2 6958 4157 / Fax: 82 (0)2 6958 4254
E-Mail : unescoteacher@unesco.or.kr

閔東石(ミン・ドンソク) MIN Dong-seok
事務総長
Secretary-General

金承潤(キム・スンユン)
事業部部長
Assistant Secretary-General of Division of Programmes

趙佑眞(チョ・ウジン) CHO Woo-jin
教育チーム長
Chief of Education Team

鄭素如(ジョン・ソヨ) JUNG Soyeo
教育チーム (担当者)
Assistant Programme Specialist

柳恩珍(リュウ・ウンジン) RYU Eun-jin
教育チーム
Programme Assistant

**◆教育部/Ministry of Education**

国際協力官国際教育協力担当官
International Education Cooperation Division, International Cooperation Bureau

住所:ソウル特別市鍾路区世宗大路 209 政府中央庁舎 教育部 〒110-760
Address: Central Government Complex, 209 Sejeongdae-ro, Jongno-gu, Seoul 110-760 Korea
URL: http://www.moe.go.kr
Tel: 82(0)2 6222 6060/ Fax: 82(0)2 2100 6133

### 2. グループプログラム受入れ教育庁

**◆Group A 忠清北道教育庁/ Chungcheongbuk-do Office of Education**

住所:忠清北道 清州市 興德区 清南路 1929 〒361-703
Address: 1929 Cheongnam-ro, Heungdeok-gu, Cheongju, Chungbuk, 361-703 Korea
URL:
Tel: 82-(0)43-290-2000 / Fax: 82-(0)43-290-2757

教育長/Superintendent:李起勇(イ・ギヨン) LEE Kee Yong
プログラム担当/Programme Coordinator:朴卿玉(パク・キョンオク) PARK Gyeong Ok

**◆Group B 江原道教育庁/Gangwon-do Office of Education**

住所:江原道 春川市 嶺西路 2854 〒200-713
Address: 2854, Yeongseo-ro, ChunCheon-si, Gangwon-do, 200-713, Korea
URL: http://www.gwe.go.kr
Tel: 82(0)33 258 5524/ Fax: 82(0)33 258 5519

教育長/Superintendent : 閔丙熙 (ミン・ビョンヒ) MIN Byeong-hee
プログラム担当/Programme Coordinator : 崔日豪 (チェ・イルホ) CHOI Ilho

## 3. 受入れ校

**Group A**

### ◆院坪小学校/ Wonpyong Elementary school

住所:忠北 清州市 興德区 粉坪洞 院坪路 32 〒361-823
Address: 32 Wonmaruro, Bunpyeong-dong, Heungdeok-gu, Cheongju-si,
Chungcheongbuk-do, 361-823, Korea
Tel: 82-(043)-295-2722/Fax: 82-(043)-295-2725

校長/Principal:嚴德鎔(オム・ドクヨン) EOM Deok Yong
プログラム担当/Programme Coordinator:廉銀正(ヨム・ウンジョン) Yeom Eun Jeong

### ◆ソウル大学校師範大学附属女子中学校/ Seoul National University Girls' Middle School

住所:ソウル特別市鍾路區大学路 64
Address: 64 Daehak-ro Jongno-Gu Seoul, Korea
Tel: 82-(0)2-762-5252/Fax: 82-(0)2-745-0664

校長/Principal:兪瑞暎(ユ・ソヨン) Ms. Yu Seo Young
プログラム担当/Programme Coordinator:金桂山(キム・ギェサン) Ms. Kim Kye San

### ◆上黨高等学校/ Sangdang High School

住所:忠清北道 清州市 上黨区 月坪路 238 3-10 〒360-825
Address: 3-10, Wolpyeong-ro 238 beon-gil, Sangdang-gu, Cheongju-si, Chungcheongbuk-do, 360-825, Korea
Tel: 82-043- 294-6142/Fax: 82-043-294-6145

校長/Principal:李平馥(イ・ピョンボク) LEE Pyeon Bok
プログラム担当/Programme Coordinator:李高雲(イ・ゴウン) Mr. Lee Go Woon

**Group B**

### ◆保聖女子中学校/ Bosung Girls Middle School

住所:ソウル市 龍山区 龍山洞 二街 1-1123
Address: 1-1123, Yongsan-Dong 2ga, Yongsan-gu, Seoul
Tel: 82-(0)2-793-0053 /Fax: 82-(0)2-798-4146

校長/Principal：洪慈純(ホン・ジャスン) Ms. HONG Ja Soon
プログラム担当/Programme Coordinator：金禧廷(キム・ヒジョン)Ms. Kim Hee Jeong

### ◆春川教育大学附属小学校/ The Attached Elementary School of Chuncheon National University of Education

住所:江原道 春川市 孔之路 316(孝子洞)
Address: 316, Gongji-ro, Chuncheon-si, Gangwon-do, Korea
Tel: 82-(0)33-254-2255/Fax: 82-(0)33-254-6868

校長/Principal： 金貞淑(キム・ジョンスク) Ms. Kim Jeong-suk
プログラム担当/Programme Coordinator：金京洙(キム・ギョンス) Mr. KIM Gyoung-su

### ◆原州女子高等学校/ Wonju Girls' High School

住所:江原道 原州市 盤谷洞 1438-1 番地
Address: 1438-1, Bangokdong, wonju, kangwondo, Korea
Tel: 82-(0)33-738-6020/Fax: 82-(0)33-738-6021

校長/Principal:金昌萬(キム・チャンマン) Mr. KIM Chang Man
プログラム担当/Programme Coordinator:姜寅植(カン・インシク) Mr.KANG In Sik

**●国際連合大学 2012-2013 年国際教育交流事業●**
韓国政府日本教職員招へいプログラム
**実施報告書**

2014 年 3 月
**編集・発行**

国際連合大学
〒150-8925
**東京都渋谷区神宮前 5-53-70**
URL　http://jp.unu.edu/

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
〒162-8484
**東京都新宿区袋町 6　日本出版会館**
**電話**　(03) 3269-4498
URL　http://www.accu.or.jp

Printed in Japan by WACO Inc. [200]
ⓒ2014 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)